

福岡市

ARI

TA

KO

TA

BE

有田・小田部

第20集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第378集

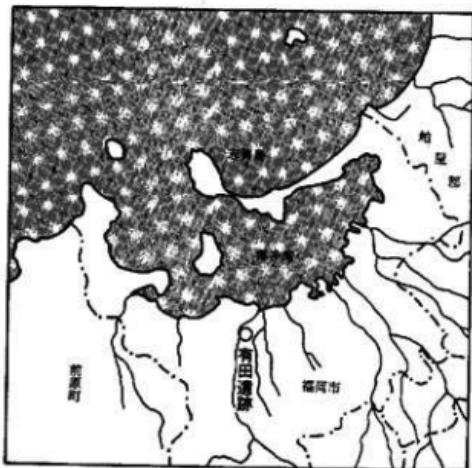
1994

福岡市教育委員会

ARI TA KO TA BE
有田・小田部

〈福岡市早良区有田・小田部地区における遺跡群の発掘調査報告書〉

第20集



1994

福岡市教育委員会

序

福岡市の西部に位置する早良平野は、近年、都市開発による人口増加が著しく進んでいる地域です。これによる、埋蔵文化財の調査も増加し、土墓級の墓が発見された国史跡の吉武高木遺跡や東入部遺跡を始め、学術的価値の高い遺跡の発見が相次いでいます。

右田遺跡群は、旧石器時代から江戸時代にかけての大遺跡です。昭和41年の区画整理事業に伴う調査以来、これまで、173次に及ぶ発掘調査が行われました。その結果、板付遺跡と並ぶ弥生時代前期初頭の環濠集落の発見を始め、多大な成果をあげています。

今回報告する第136・141・142・143次調査は、昭和63年度に調査が行われたものです。調査では、弥生時代から中世にかけての各種遺構・遺物が発見されました。特に第136次調査では戦国時代の小田部氏の居城のものと思われる塙が発見されました。

発掘調査から報告書作成に至るまで、地権者を始めとする関係各位に多大な御理解と御協力を賜りました。記して深く感謝の意を表します。

また、本書が埋蔵文化財の理解を深める一助となり、合わせて研究資料として御活用いただけることを願うものです。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

例　　言

- (1). 本書は、福岡市早良区有田・小田部・南庄地区における民間開発に伴い、福岡市教育委員会が、平成5年度の国庫補助を得て実施した、緊急発掘調査の報告書である。
- (2). 本書には、昭和63年度の第136次・141次・142次・143次調査を収録する。
- (3). 本書では、有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見なし、広義の有田遺跡群とする。
- (4). 本書に収録した調査は、第136次・141次・142次・143次調査を山崎龍雄・小林義彦（福岡市埋蔵文化財センター）・加藤良彦が担当した。
- (5). 本書に掲載した遺構の実測は、担当者の他、清原ユリ子・金子由利子・宮原邦江・吉岡田鶴子・黒田和生・英豪之・溝口武司が行い、写真は担当者が行った。遺物の実測とトレース、遺構のトレースについては、担当者の他、平川敬治・井上加代子・加藤周子・峰須賀博子・赤星攝・内野亜香・坂木智子が行い、遺物の写真撮影は担当者が行った。
- (6). 遺構番号は、福岡市の遺構記号基準によっている。
SA…柵、SB…掘立柱建物、SC…堅穴住居址、SD…溝状遺構、SE…井戸、SK…土坑、
SR…土壤墓、木棺墓、ST…麦棺墓、SP…ピット、SX…その他
- (7). 本書に使用した方位は磁北であり、その他については図中に記した。
- (8). 本書報告の遺物・図面・写真類は、すべて本市の埋蔵文化財センターに収蔵保管する予定である。
- (9). 本書の執筆・編集は加藤周子・内野の協力を得て山崎が行った。

本文目次

頁

第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査の組織.....	2
第2章 遺跡の立地と調査の成果.....	3
1. 遺跡の立地と調査の成果.....	3
2. 有田遺跡群関係文獻一覧.....	5
第3章 調査の記録.....	7
〈有田地区的調査〉	7
1. 第136次調査	9
1) 調査区の地形と概要.....	9
2) 遺構と遺物.....	9
3) 土壙の調査.....	29
4) 小結.....	30
2. 第141次調査	31
1) 調査区の地形と概要.....	31
2) 遺構と遺物.....	31
3) 小結.....	44
〈小田部地区的調査〉	47
3. 第142・143次調査	49
1) 調査区の地形と概要.....	49
2) 遺構と遺物.....	49
3) 小結.....	98

図版目次

- PL. 1 有田遺跡群周辺航空写真（1961年撮影）
PL. 2 有田遺跡群周辺航空写真（1972年撮影）
PL. 3 (1)第136次調査区全景（北から） (2)SD01・06（北西から）
PL. 4 (1)調査区東側（北西から） (2)SD06（東から）
PL. 5 (1)SD01東壁土層（西から） (2)SD01中央上層（東から）
 (3)SD01南ベルト上層（北から） (4)SD06土層（北から）
PL. 6 (1)SC01（東から） (2)SC01遺物出土状況
PL. 7 (1)SC02（東から） (2)SC03（南から）
PL. 8 (1)SK06（内から） (2)SX01防空壕（北から）
PL. 9 (1)SK01（西から） (2)SK01土層（東から） (3)SD02（北から） (4)SP05・06（北から）
 (5)1号トレンチ（東から） (6)2号トレンチ（南東から）
PL. 10 各遺構出土遺物 1
PL. 11 各遺構出土遺物 2
PL. 12 (1)第141次調査区全景（南から） (2)同全景（西から）
PL. 13 (1)SC01・05（西から） (2)SC01・05（南から）
PL. 14 (1)SC02（南から） (2)SC02充填状況（南から）
PL. 15 (1)SC02遺物出土状況 1 (2)同出土状況 2 (3)洞出土状況 3 (4)SC03（西から）
 (5)SC04（南から） (6)洞遺物出土状況（西から）
PL. 16 (1)SK01（北西から） (2)SK02（西から） (3)SK03（西から） (4)SK02遺物出土状況
 (5)SB01（南西から）
PL. 17 各遺構出土遺物
PL. 18 SC02出土遺物
PL. 19 (1)第142・143次調査区全景（北西から） (2)第142次調査区全景（北から）
PL. 20 (1)第143次調査区全景（西から） (2)SD01（西から）
PL. 21 (1)SC01（北東から） (2)SC01・02（北東から）
PL. 22 (1)SC01・02発掘状況（東から） (2)SC03・04（北西から）
PL. 23 (1)SC07（西から） (2)SC10（北から）
PL. 24 (1)SC06（北西から） (2)SC04内（SP181）遺物出土状況 (3)SC10中央土坑（南から）
 (4)SC13（南から） (5)洞遺物出土状況（西から）
PL. 25 (1)SC09（西から） (2)SC16（南西から）
PL. 26 (1)SC08・11・14・15（北東から） (2)SC11・15（南東から）

- PL. 27 (1)SB04 (北東から) (2)SC08発検出状況 (南東から) (3)SC11竪支脚 (南東から)
 (4)SC11・15発検出状況 (南東から) (5)SP290 根石検出状況
- PL. 28 (1)SD01 (北東から) (2)SD02 (北西から)
- PL. 29 (1)SD03 (北西から) (2)SD05 (北東から)
- PL. 30 (1)SD06・07 (南西から) (2)SK15 (南東から)
- PL. 31 (1)SD01南壁土層 (北東から) (2)SD01 2号ベルト土層 (南西から)
 (3)SD01 1号ベルト (南から)
- PL. 32 (1)調査区東壁土層 (西から) (2)SD06土層 (南西から) (3)SK01 (北から)
 (4)SK05 (北から) (5)SK06 (東から)
- PL. 33 (1)SK07 (北から) (2)SK08 (北から) (3)SK10 (南東から) (4)SK11 (東から)
 (5)SK12 (南から) (6)SK14 (北西から)
- PL. 34 (1)SK16 (南西から) (2)SK17 (北西から) (3)SK19 (西から) (4)SK20 (東から)
 (5)SK21 (南西から) (6)SK22 (南西から)
- PL. 35 各住居址出土遺物 1
- PL. 36 各住居址出土遺物 2
- PL. 37 各住居址・溝出土遺物
- PL. 38 溝・ピット・造橋面出土遺物

挿 図 目 次

Fig. 1 有田・小田部の周辺遺跡 (1/25,000)	4
Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点 (1/5,000)	折込み
Fig. 3 有田・小田部台地の旧地形図 (1/5,000)	折込み
Fig. 4 有田地区調査地位点箇図 (1/5,000)	7
Fig. 5 第136大調査区遺構配置図 (1/200)	10
Fig. 6 SC01・02 (1/60)	11
Fig. 7 SC01・03出土遺物 (1/4)	13
Fig. 8 SC03 (1/60)	14
Fig. 9 SC01出土遺物 (1/3・1/4・2/3)	15
Fig. 10 SK01 (1/40)	16
Fig. 11 SK03～05、SE01 (1/60)	17
Fig. 12 SK03、SE01出土遺物 (1/3・1/4)	18
Fig. 13 SD01・06土層 (1/60)	19
Fig. 14 SD01出土遺物 (1/4)	20

Fig. 15 SD02出土遺物 (1/4)	20
Fig. 16 SD06出土遺物 1 (1/4)	21
Fig. 17 SD06出土遺物 2 (1/4)	23
Fig. 18 SD01・06出土遺物 3 (1/3)	24
Fig. 19 SP05・06 (1/20)	24
Fig. 20 ピット、造構面出土遺物 (1/4)	25
Fig. 21 溝・ピット出土遺物 (1/3・1/4)	27
Fig. 22 SP05・06出土遺物 (1/6)	28
Fig. 23 第1トレンチ・第2トレンチ土層 (1/60)	29
Fig. 24 第141次調査区造構配置図 (1/150)	32
Fig. 25 SC01・05 (1/60)	33
Fig. 26 SC01・02・05出土遺物 (1/3・1/4)	34
Fig. 27 SC02 (1/60)	35
Fig. 28 SC02出土遺物 1 (1/4)	37
Fig. 29 SC02出土遺物 2 (1/4)	38
Fig. 30 SC02出土遺物 3 (1/4)	39
Fig. 31 SC03・04 (1/60)	40
Fig. 32 SC03・04出土遺物 (1/4)	41
Fig. 33 SB01 (1/60)	42
Fig. 34 SK01-03 (1/40)	43
Fig. 35 SK01・02、ピット出土遺物 (1/4)	44
Fig. 36 SC01・02、ピット出土遺物 (1/3)	45
Fig. 37 小田部地区調査地点位置図 (1/5,000)	47
Fig. 38 第142・143次調査区造構配置図 (1/200)	折込み
Fig. 39 SC01・02 (1/60)	51
Fig. 40 SC01・02縦 (1/30)	53
Fig. 41 SC01・02出土遺物 (1/4)	54
Fig. 42 各住居址出土遺物 (2/3)	56
Fig. 43 SC03・04 (1/60)	折込み
Fig. 44 SC03・04出土遺物 1 (1/4)	57
Fig. 45 SC03・04出土遺物 2 (1/3・1/4)	58
Fig. 46 SC03内・SK09出土遺物 (1/3・1/4)	59
Fig. 47 SC05・06 (1/60)	60

Fig. 48 SC06出土遺物 (1/3・1/4)	61
Fig. 49 SC07 (1/60)	62
Fig. 50 SC08・11・14・15 (1/60)	折込み
Fig. 51 SC08出土遺物 1 (1/4)	63
Fig. 52 SC08出土遺物 2 (1/3)	64
Fig. 53 SC09 (1/60)	65
Fig. 54 SC09・16出土遺物 (1/4)	66
Fig. 55 SC10 (1/60)	67
Fig. 56 SC11出土遺物 (1/4)	68
Fig. 57 SC13・16 (1/60)	69
Fig. 58 SC13出土遺物 (1/4)	69
Fig. 59 SC15出土遺物 (1/4)	70
Fig. 60 各遺構出土遺物 (2/3・1/3)	70
Fig. 61 SB01～04 (1/100)	71
Fig. 62 捩立柱建物出土遺物 (1/4)	72
Fig. 63 SK01～03・05 (1/40)	73
Fig. 64 各土坑出土遺物 (1/4)	74
Fig. 65 SK06～08・10 (1/40)	75
Fig. 66 SK11・12・14・16・17 (1/40)	76
Fig. 67 SK15 (1/40)	77
Fig. 68 SK19～22 (1/40)	78
Fig. 69 SK22出土遺物 1 (1/4)	79
Fig. 70 SK22出土遺物 2 (1/3・2/3)	80
Fig. 71 SD01土壙断面図 (1/60)	83
Fig. 72 SD01出土遺物 1 (1/4)	85
Fig. 73 SD01出土遺物 2 (1/4)	86
Fig. 74 SD01出土遺物 3 (1/4)	87
Fig. 75 SD01出土遺物 4 (1/4)	88
Fig. 76 SD01出土遺物 5 (1/4)	89
Fig. 77 SD01出土遺物 6 (1/3・1/4)	91
Fig. 78 SD01・05出土遺物 (1/3・2/3)	92
Fig. 79 SD02・05・14土壙断面図 (1/40)	93
Fig. 80 各溝出土遺物 (1/4・1/3・2/3)	94

Fig. 81 調査区土層断面図 (1/60)	折込み
Fig. 82 ピット出土遺物 (1/4)	96
Fig. 83 遺構面・表上出土遺物 (1/4・1/3)	97
Fig. 84 戦国期の縄状遺構配置図 (1/8,000)	100

表 目 次

Tab. 1 第20集 報告調査地区一覧表	1
-----------------------	---

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市近郊の純農村地帯であった有田・小田部の台地上には、有田・小田部・南庄の3つの集落が存在している。近年の国道202号線今宿バイパスと市営地下鉄1号線の開通は、福岡市西部地区の都市開発を大きく促進し、当地区一帯は近郊の新興住宅地として大きく変化をとげている。

有田遺跡群の考古学的調査は、昭和41年の九州大学の区画整理に伴う調査を初めとし、昭和50年度から、国庫補助事業として出発したが、52年度からは1,000m²以下の小規模開発についても対応を行っている。

昭和60年度迄の開発傾向は、都心に近い手近な住宅地として個人専用住宅の建設が多かったが、その後平成2年迄は、バブル景気の影響が及び、店舗・高層の共同住宅・分譲住宅などの開発が増加していた。バブル景気の沈静化と共に、開発も少し鎮まりつつある。平成5年度迄調査件数は173件である。この中には学校建設・下水道建設・市営住宅の建替工事、などの公共事業も含まれている。

本書では、昭和63年度に行った有田地区の第136次・141次調査、小田部地区の第142次・143次調査の成果を報告する。各調査の要項は下表のとおりである。

Tab. 1 第20集報告調査地区一覧表

調査次数・調査番号	地区名	調査実施者	(m ²) 申請面積	(m ²) 調査面積	申請者名	調査期間	監視点 番号	
第136次 8803	L	早良区有田2丁目22-33	1000	460	尾 口 光	1988年4月11日～5月20日	62-2-265	
+141+	8822	I	+ 有田1丁目53-6	260	250	藤 原 伊都子	1988年6月20日～7月18日	62-2-267
+142+	8836	K	+ 小田部5丁目12-10	795	790	毛 利 一 男	1988年9月12日～11月12日	62-2-269
+143+	8836	E	+ 小田部5丁目23-24	568.1	562	今 田 敦 行	+ 9月12日～11月25日	62-2-342

2. 発掘調査の組織

1) 昭和62年度～平成5年度の調査組織

調査主体 福岡市教育委員会

調査統括 昭和63年度～平成2年度 埋蔵文化財課長 柳田純孝

平成3年度～5年度 埋蔵文化財課長 折尾学

事務担当 昭和63年度 埋蔵文化財課第2課長 飛高憲雄、(庶務) 第1係 岸田隆

平成元年度～2年度 同課第2係長 柳沢一男、(庶務) 第1係 阿部徹・中山昭則

平成3年度～5年度 同課第1係長 飛高憲雄、同課第2係長 塩屋勝利、山崎純男(平成5年度)(庶務) 第1係 中山昭則

発掘担当 昭和63年度 同課第2係 山崎龍雄・小林義彦・加藤良彦

調査・整理作業 昭和63～平成5年度 平川敬治(九州大学)・梶村嘉長・溝口武司・黒田和生
・英豪之・井上加代子・蜂須賀博子・加藤周子・内野亜香・赤星攝

なお、発掘調査・資料整理にあたっては、申請者及び施工業者の皆様をはじめ、地元の方々の援助、協力を得た。特に地元の寺田勝行氏には、事務所用地を心よくお貸しいただいた。また調査にあたっては、調査指導の諸先生及び、埋蔵文化財課の試掘担当の諸氏に、多大な助言と指導を受けた。記して謝意を表したい。

第2章 遺跡の立地と調査の成果

1. 遺跡の立地と調査の成果

有田遺跡群は、福岡市の西南部に広がる早良平野の北側中央部に所在する。標高15m前後を満する周囲から孤立した洪積世独立台地である。行政的には福岡市早良区有田・小田部・南庄の一帯にまたがる。この台地の西側には室見川、東側には金屑川が北流し、これらの河川の度重なる流路変更による浸蝕や、台地北側を中心として小谷の開析によって、八手状に北側に広がる複雑な地形を形成している。

有田遺跡群は、過去173次に及ぶ調査の成果から、旧石器時代から近世に至る迄の遺構が台地上に分布する事が確認されている。IH石器時代については、有田地区の第6次調査区や小田部地区第131次地点を初め、10ヶ所程で遺物採集されており、早良平野内では吉武遺跡群や、羽根戸遺跡群と並んで数少ない旧石器時代遺跡である。縄文時代では台地西側の5・116次・下水道調査区で、中期から後期にかけての貯蔵穴群が馬蹄形状に巡る事が確認されている。

弥生時代では前期初頭の断面V字形の壕が、第2次調査区を初めとして、第45次・54次・77次・95次・133次調査区で確認され、これらから長径300m、短径200mの規模の楕円形状の環壕が、有田台地高所部を巡る事が予想される。この環壕は早良平野で最も古い時期のもので、有田遺跡群が大陸文化受容の一つのキーステーションであったことがわかる。また有田遺跡群の南西側には縄文時代晩期末に位置づけられる有田七田前遺跡がある。前期後半になると、集落は環壕の範囲を越えて、台地北側の小田部地区迄拡がる。この時期の墳墓は有田・小田部地区で5ヶ所確認されているが、検出した壺棺墓の数はいずれも少なく規模が小さい。遺跡南端の西福岡高校地内で出土した金海式壺棺墓から、細形銅戈が発見され、また小田部地区では細形銅戈と細形銅矛の出土も伝わる。中期になると前期より更に集落が台地上に広がり各尾根上に集落が分布するようである。当遺跡地内では青銅利器が鋳造されたようで、鋳型片が第3次・82次・108次調査区で出土し、また鋳型と同質の砥石なども各調査区で出土している。しかし後期になると一変して集落は縮小する。内陸部の吉武遺跡群・東入部遺跡群・海岸部の藤崎遺跡群などと共に早良平野に見られる一般的傾向である。この原因については、早良平野が東側の福岡平野の勢力下に入るからとか言われている。古墳時代の集落は全期間を通じて台地上に広く分布する。この時期、小田部地区には筑紫殿塚・松浦殿塚など大型の円墳が出現する。遺跡の北側にある原北小学校には、南庄地区から出土した石棺墓が移築保存されている。地元からの聞き取りによると、調査成果（第89次・97次調査区）によっても南庄地区に墳墓地域がある事が想定出来る。

古代には早良郡の田部郷に比定されている。有田地区の第56次・57次・77次・76次・82次・

第2章 遺跡の立地と調査の成果



Fig. 1 有田・小田部の周辺遺跡 (1/25,000)

101次・107次調査区では、方形区画に囲まれた大型掘立柱建物群が検出されている。これらの建物群は古代西海道に付設された額田駅が、西方約2km離れた野方あたりに比定されていることから、それに関連する官衙的な建物群と考えられている。また3本柱の櫓で囲まれた倉庫群も有田・小田部地区に6ヶ所確認されている。

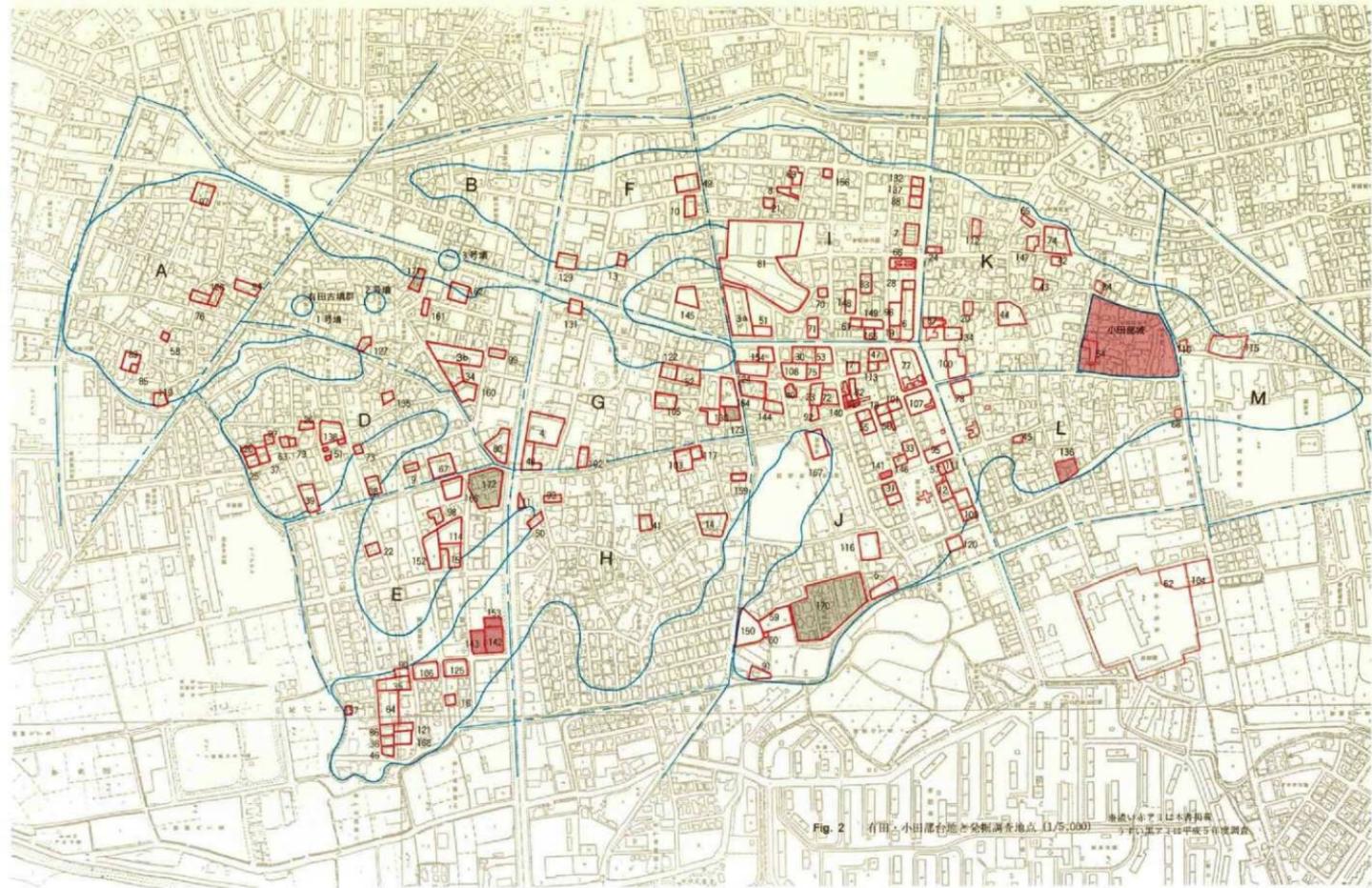
中世には小田部郷と呼ばれ、文永8年(1271)の飯盛宮社領坪付に記載が見られる。中世後半代には大内氏の筑前進出と共に、早良郡代大村興景が小田部の中間に知行地をもったとされるが、当地区にはその地名が小字名として残り、調査でもそれが裏付けられている。また有田地区では幅5~10m、深さ2mを測る柴砾塗の空堀が200m四方の範囲に掘削され、それらは方形の郭状に複雑に巡っている。築造時期は出土遺物の時期から推定して16世紀代であり、小田部城(月城)の可能性が強いが、福岡市の文化財分布地図では台地の南端部を中心に小田部氏の里城であった小田部城が、推定されており、小田部城の規模・位置の解明が今後の大きな検討課題である。

2. 有田遺跡群関係文献一覧

- 『有田古代遺跡発掘調査概報』市報第1集 1967
- 『有田遺跡—福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告』市報第2集 1968(2次)
- 『有田周辺遺跡調査概報』市報第43集 1977
- 『有田・小田部』現地説明会資料(孔版) 1977
- 『有田遺跡』(孔版) 1979
- 『有田・小田部第1集』市報第58集 1980
- 『有田・小田部第2集』市報第81集 1982
- 『有田・小田部第3集』市報第84集 1982
- 『有田七田前遺跡』市報第95集 1983
- 『有田・小田部第4集』市報第96集 1983
- 『有田・小田部第5集』市報第110集 1984
- 『有田・小田部第6集』市報第113集 1985
- 『有田遺跡群—第81次調査—』市報第129集 1986
- 『有田・小田部第7集』市報第139集 1986
- 『有田・小田部第8集』市報第155集 1987
- 『有田七田前遺跡の調査』九州文化史研究紀要32号 1987
- 『有田・小田部第9集』市報第173集 1988
- 『有田・小田部第10集』市報第212集 1989
- 『有田・小田部第11集』市報第234集 1990

第2章 遺跡の立地と調査の成果

- 『有田・小田部第12集』市報第264集 1991
『有田・小田部第13集』市報第265集 1991
『有田・小田部第14集』市報第266集 1991
吉良国光『小田部氏関係資料』福岡市博物館研究紀要創刊号 1991
『有田・小田部第15集』市報第306集 1992
『有田・小田部第16集』市報第308集 1992
『有田・小田部第17集』市報第339集 1993
『有田・小田部第18集』市報第340集 1993
米倉秀紀『那津官家？—博多湾岸における三本柱橋と大型総柱建物群—』福岡市博物館研究紀要第3号 1993
『有田・小田部第19集』市報第377集 1994
『有田・小田部第20集』市報第378集 1994



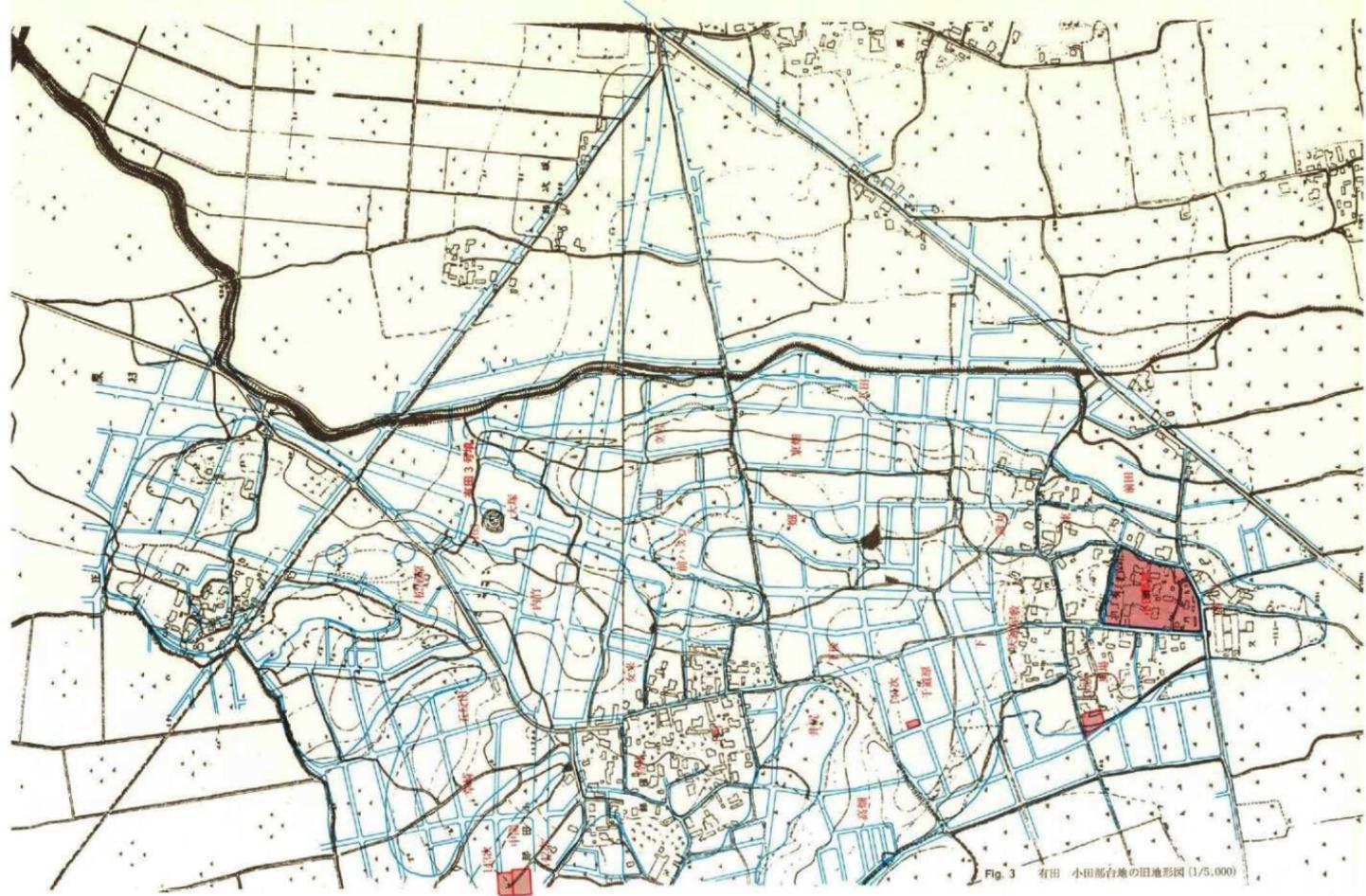


Fig. 3 有田 小田部台地の旧地形図 (1/5,000)

第3章 調査の記録

—有田地区の調査—



Fig. 4 有田地区調査地点位置図 (1/5,000)

1. 有田第136次調査（調査番号8803）

1) 調査区の地形と概要

調査区は早良区有田二丁目22-31に所在する。調査区は有田・小田部台地の基部の西側縁辺に位置する。旧状は宅地であった。

昭和62年度は当地に専用住宅建設の為の埋蔵文化財の事前調査願いが提出され、これを受け試掘調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵を確認し、建築予定範囲を中心に発掘調査を実施した。調査は昭和63年4月11～5月30日まで実施した。調査面積は申請面積1000m²中460m²である。

調査区周辺は、当遺跡群内では最も調査が行われていない地区で、遺構の状況はほとんど判っていないが、調査区東側は小田部城推定地であり、また西側には小田部城の外堀であったと言われる通称「ホカヤネ」と呼ばれた溝が昭和40年代の初め迄残っていたとされ、字名も「馬場」と言い、小田部城関連の遺構の存在が予想された。

当地点の調査では、遺構面は鈍い橙色の鳥柄ローム土上面で検出した。遺構面迄の深さは東側が表土10cm、西側が表土60cmで西側に向かって緩やかに傾斜している。標高は約9mを測る。遺構の残りは東側が旧家屋建設の為の搅乱・削平により不良、西側が斜面上の為比較的良好であった。検出した主な遺構は弥生時代中期堅穴住居址1棟、古墳時代前期堅穴住居址2棟、平安時代井戸1基、中世末～近世溝2条などである。また調査区西側に台地線に沿って上星状の高まりが認められ、2ヶ所試掘トレンチを設定し、土層の調査を行った。

出土遺物は溝状遺構を中心にコンテナ12箱程出土した。主な遺物として弥生中期土器や古墳時代土器、近世国産陶磁器、木質の鞘が残った鉄刀などが出土している。

2) 遺構と遺物

堅穴住居址（SC）

調査区南側で3棟検出した。いずれも残りは悪い。特にSC03は柱穴のみである。

SC01 (Fig. 6, PL. 6)

南側で検出したSC03と重複する、平面形が長方形を呈す住居址である。西半はSD01で消滅する。残存規模は東西長2.6m以上、南北長4.58mを測る。残りは悪く、残存壁高は最大で15cm前後、北側と東側はベッド状遺構で最大8cmと一段高くなる。その幅は60cm前後を測る。壁溝は南東隅に部分的に認められた。住居の主柱は2本と考えられ、P1(SP41)が相当する。柱穴規模25～30cmで、深さは46cmを測る。床面は汚れていたが、掘り下げるにSC03の柱穴が検出できた。床面にはがれと思われる焼土面は確認出来なかった。また床面には竹石76があった。

出土遺物 (Fig. 7・9, PL. 17) 墓土中、床面から弥生中期の土器や古墳時代の土器片が

1. 第136次調査



Fig. 5 第136次調査区遺構配置図 (1/200)

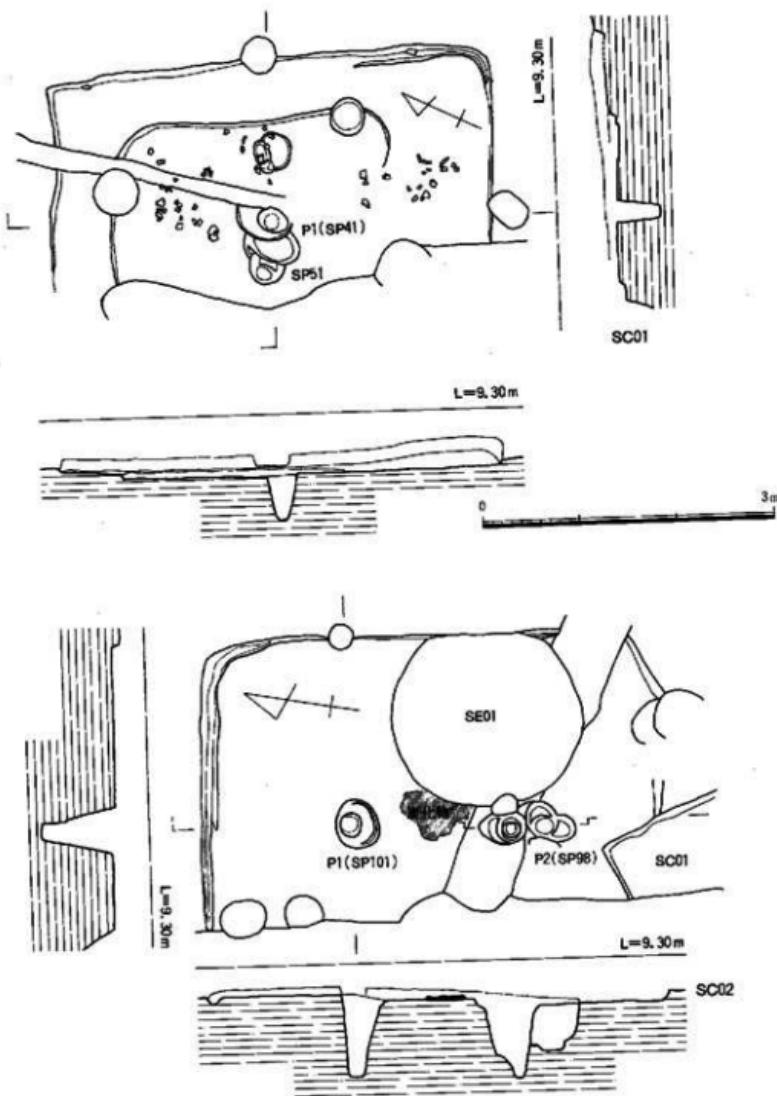


Fig. 6 SC 01・02 (1/60)

1. 第136次調査

多量に出土したが、圧倒的に弥生土器が多い。また陶器・磁器・須恵器・石白片・黒曜石剝片が少量出土したが、混入品である。図示したのは大半が弥生土器であるが、いずれも混入品である。

1～2は土師器。1は柄形の鉢で口縁部がやや欠失する。外面指おさえ痕が残る。外面色調は淡黄橙色、胎土に1～3mmの砂粒を多く含む。外面黒斑がある。2は大型の鉢の1/2片で、底部は尖り気味の丸底。外面ヘラナデ。内面粗い刷毛。外面色調は淡黄褐色、胎土に1～3mmの砂粒を多く含む。3～14は弥生土器。3～6は甕で、口縁部は逆L字形を呈す。3は1/8片で、復元口径31.1cmを測る。器壁は磨滅し調整不明。4は口縁部小片。全面ナデ。5は1/8片で復元口径38.0cmを測る。器壁は磨滅し調整不明。6は1/6片で、復元口径27.5cmを測る。外面はタテ刷毛。内面はナデ。指おさえ痕が残る。7は甕の底部1/2片。復元底部8.5cmを測る。内外面ナデ。外面色調は3・4が淡黄橙色、5が暗赤褐色、6が黄橙色、7が灰黒色を呈す。胎土は3・4・6・7が2～3mmの内外の石英紋を多く含み、5が粗砂粒を多く含む。8は無頸甕の口縁部片。復元口径26.4cmを測る。内外面ナデ。9はく字状に開く甕の口縁部1/6片か。外面刷毛のちヨコナデ。内面に指おさえ痕が残る。外面色調は8が灰黄色、9が淡黄橙色。胎土は8・9共1～3mm内外の砂粒を多く含む。10・11は高坏。10は鋸先状の口縁部片。11は脚部1/6片で、脚端部には浅い凹線が巡る。外面丹塗り、内面はナデ。外面色調は10が淡黄色で、11は丹塗りか。11は丹塗り。胎土はいずれも1～2mmの砂粒を含む。12は鉢の口縁部1/6片。復元口径19.2cmを測る。13は器台口縁部1/4片。復元口径8.5cmを測る。内外面器壁は磨滅し調整不明。外面色調は黄橙色、胎土に最大4mmの砂粒を多く含む。

15は石臼の下臼受け皿部。復元口径35cmを測る。石質は凝灰岩で、内外面丁寧な研磨。16は片刃石斧片か。現在長2.3cm、幅2.2cmを測る。各面は丁寧な研磨。石質は頁岩である。17は黒曜石の石器。四基式で、基部の抉りは深い。残存長2.2cm、最大幅1.3cm、厚さ0.3cmを測る。76は作業台石。上面は使用により擦り減り、平坦面を呈す。椭円形を呈し、長辺29.0cm、短辺23.2cm、厚さ6.9cmを測る。石質は玄武岩である。

SC02 (Fig. 6, PL. 7)

SC01北側で検出した方形の住居址。残りは不良で、SK06や基礎搅乱によって西半は消滅している。規模は南北長4.8m、東西幅3m以上を測る。遺存状況は最大で8cm程度である。住居の主柱はP1 (SP101) とP2 (SP98) が相当すると考えられ、その間に炉址と考えられる炭化物集中部がある。P1-P2間距離は1.66m、柱穴の深さは85～90cmを測り、2柱間距離は狭いが、壁からの関係で、主柱と考えた。壁溝は北側に部分的に認められた。床面はほぼ平坦であるが、南側、西側がやや低くなる。

出土遺物 墓土中から須恵器・土師器・弥生土器・黒曜石の剝片が出土している。いずれも細片で図示出来るものはない。時期的には形態的に見て古墳時代前期位であろうか。

SC01

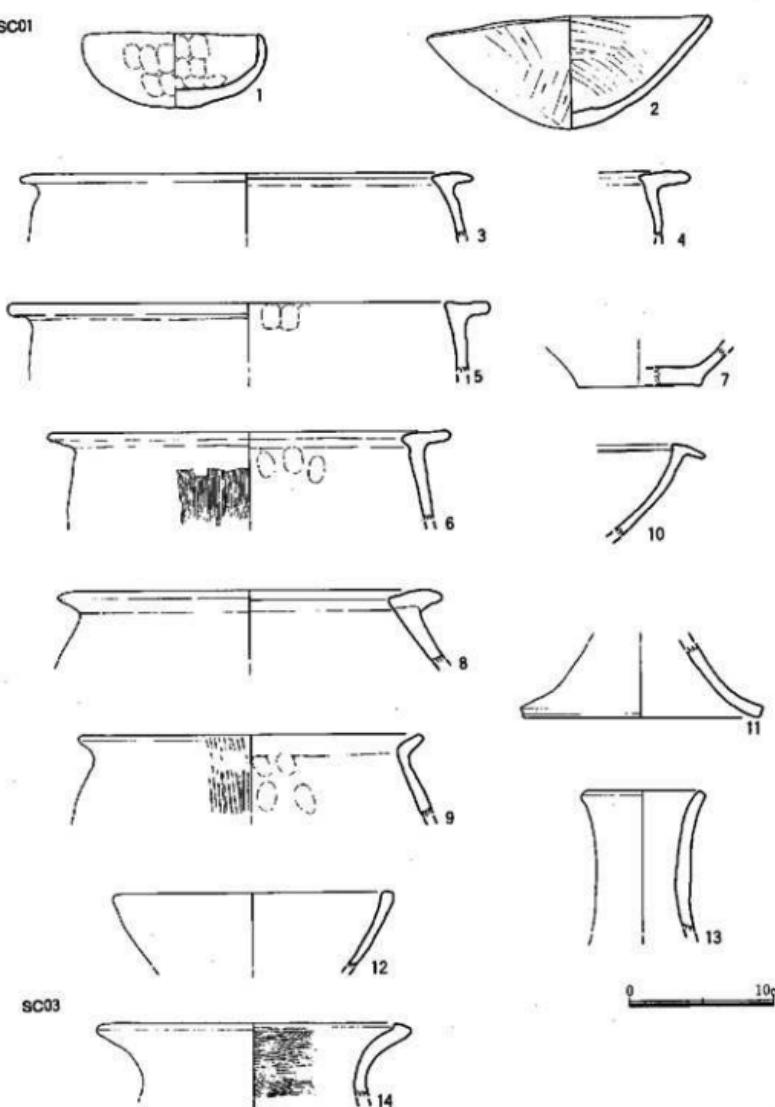


Fig. 7 SC01・03出土遺物 (1/4)

1. 第136次調査

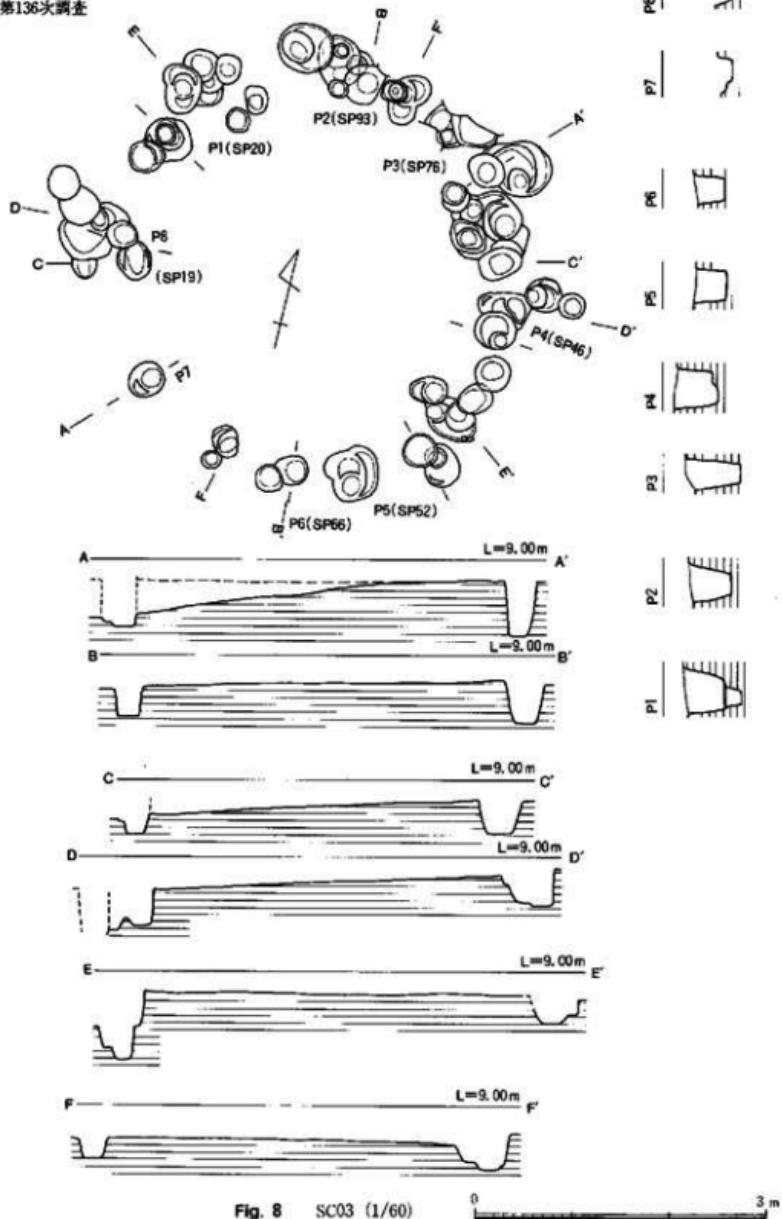


Fig. 8 SC03 (1/60)

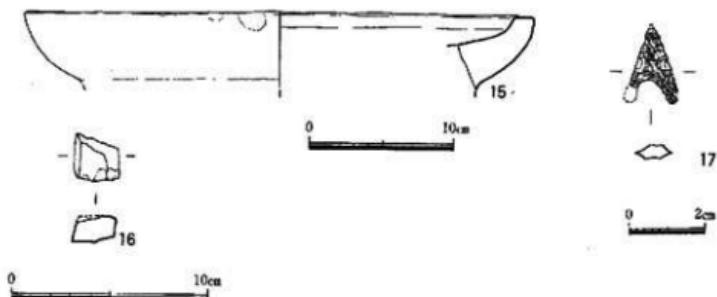


Fig. 9 SC01出土遺物 (1/3・1/4・2/3)

SC03 (Fig. 8, PL. 7)

SC01に切られる円形に巡る柱穴群である。壁が削平によって消滅した円形の堅穴住居址の柱穴である。切り合い関係から3回の建て替えが推定出来る。それぞれの住居址の柱穴は6～8本である。柱穴間の内径は4.2～4.5m、住居址中心点から各柱穴迄と、中心点から壁面迄の平均距離比率は第152次調査SC06では約1:2、第3次調査2号住居址でも約1:2であり、ここでも1:2の比率とすれば住居址の推定直径は6～7m位と考える。柱穴の深さは削平の具合にもよるが20～60cmで、一般的円形住居址の柱穴としては余り深くない。中央の土坑等は検出されなかったが、削平によって消滅した可能性がある。

出土遺物 (Fig. 7, PL. 10) 各柱穴から少量の遺物が出土している。

14は弥生土器の壺口縁部1/4片。復元口径20.6cmを測る。口縁部は内側に段がつく。外面はナメ、内面は粗い横刷毛、外面色調は橙色、胎土は粗砂が多く含む。

土坑 (SK)

番号を付けたものはSK07迄であるが、02・07については浅い落込み状のもので、明確ではないので報告しない。

SK01 (Fig. 10, PL. 9)

調査区北西境界地にかかる土坑。平面形は不整円形を呈すと思われる。規模は上面で南北長8m、幅1.8m以上、深さ約1.35mを測る。土坑断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は11層に細分出来るが大きくは上層（1～5層）、下層（6～11層）に分ける事が出来る。上層は褐色土、下層は灰黄色粘土又はオリーブ黒色粘土を主体とする。この土坑についても井戸とも考えたが、底面の形態が井戸のようではなく、断定は出来ない。埋土から見て中世以降の時期であろう。

出土遺物 弥生土器をはじめ、陶器・磁器の細片が少量出土しているが、図示出来るものはない。

1. 第136次調査

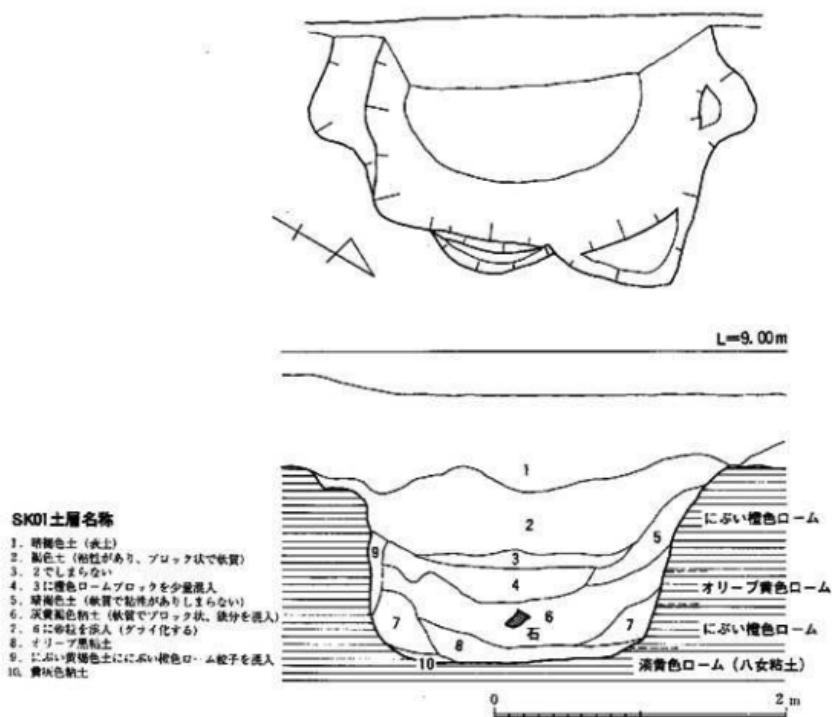


Fig. 10 SK01 (1/40)

SK03 (Fig. 11)

SD01に切られる大型の不定形土坑。残りの悪い竪穴住居址の可能性もあるが、確証がなく上坑とした。規模は南北長5.2m、東西幅1.84m以上を測る。壁面の残りは6cm程である。床面は西側にだらだらと低くなる。床面には多くのピットが切り込む。埋土は黒褐色土である。

出土遺物 (Fig. 12) 墓土中より弥生土器・須恵器・磁器の細片がやや多く出土している。量的には弥生土器が多い。石剣の破片も1点出土している。

60は磨製石剣の刃部片である。現存長4.6cm、刃部残存幅3.3cmを測る。刃部断面は菱形を呈すと思われる。表面はかなり磨滅するが斜めに研磨しているようである。外面色調は灰色を呈

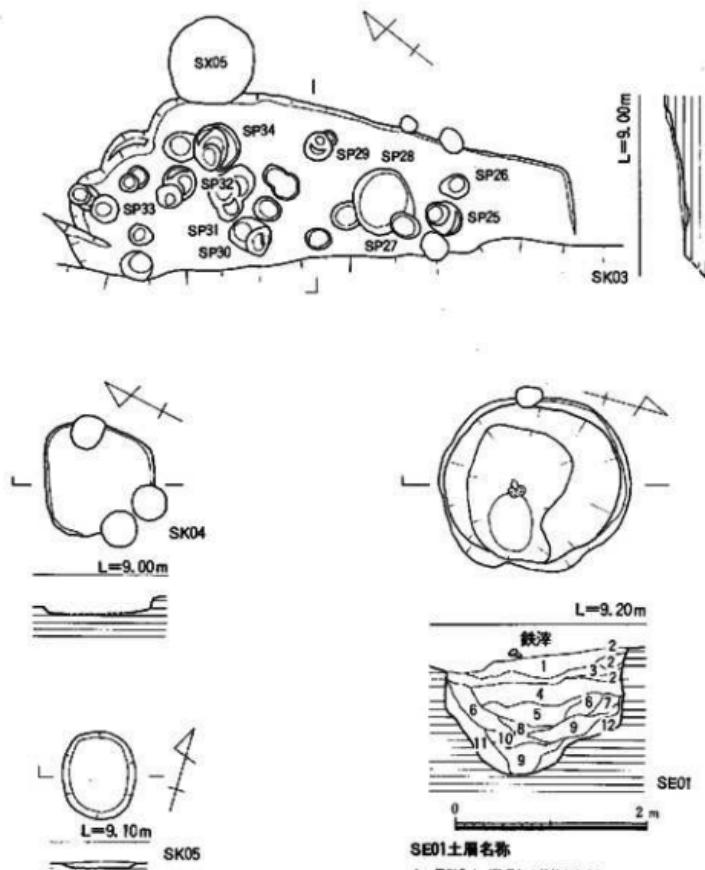


Fig. 11 SK03~05, SE01 (1/60)

- SE01 土層名稱
1. 黒褐色土 (砂混りで粘性がある)
 2. 黒色粘質土
 3. 黒褐色粘質土
 4. 鉄浮物を含む (浅黄褐色ロームノロック少量混入)
 5. 黒褐色粘質土 (ローム粒子を少量混入)
 6. 4でロームの混入が多い
 7. 浅黄褐色ロームブロック (黒褐色粘質土少量混入)
 8. 黒褐色粘質土 (ローム粒子を少量混入)
 9. 5より浅黄褐色ロームブロックの混入多い (粘性が強い)
 10. 浅黄褐色ロームブロック
 11. 10に鉄浮物粘質土ブロック少量混入 (粘性が強い)
 12. 浅赤褐色ロームブロック

するが、石質は安山岩質凝灰岩ホルンフェルスである。

SK04 (Fig. 11)

SC01東側で検出した不整方形を呈する浅い土坑で、ピットに切られている。規模は南北・

1. 第136次調査

東西長1.18mを測り、深さは6~10cm位と浅い。埋土は黒褐色土で橙色地山ローム土を少量混入する。

出土遺物 弥生土器片が7点出土しているが図示出来るものではなく、時期も明確でない。

SK05 (Fig. 11)

調査区南西隅で検出した土坑。平面形態は楕円形を呈し、規模は長さ0.9m、幅0.74mを測る。深さは5cmと浅く、断面は浅い皿状を呈す。埋土は褐色土に黄褐色ローム土を混入する。埋土から見て時期的に新しい。

出土遺物 陶器・磁器の細片や炭化物などが出土している。

SE01 (SK06) (Fig. 11, PL. 8)

調査区中央SC02を切る円形の土坑、埋土・底面の形態から見て井戸と考えられる。規模は長径2.0m、短径1.80m、深さは最深部で1.33mを測る。底面は漏斗状を呈し、東側に片寄って井筒状の落込みがある。埋土は黒褐色土から暗褐色粘質土を主体とし、下方に地山ロームブロックを多く含む。上面には鉄滓が一点出土している。

出土遺物 (Fig. 12, PL. 10) 弥生土器や土師器・須恵器片が多量に出土している。弥生土器が圧倒的に多い。又鉄滓・石錘などが少量出土している。

18~21は土師器である。18・19は壺である。18は2/3片、19は1/3片で、口径は18が13.4cm、19が復元で15.4cmを測る。器高は18が3.6cm、19が3cmを測る。19は18に比べ口径が一回り大きい。調整はいずれもナデ。外面色調は18が橙色、19が浅黄橙色、胎土は18が2~3mmの砂粒を多く含むが、19は精良だが焼きはやや不良。20は高台付壺の1/2片。復元高台径9cmを測る。内外面ナデ。外面色調は浅黄色で、胎土に径1~2mm程の粒砂を少量含む焼きはやや不良。21は瓶小片で、口縁直下に小さな把手が付く。外面刷毛のちナデ。煤が付着し、内面はヘラ削り。外面色調はにぶい赤褐色、胎土に径2~3mmの砂粒を多く含む。22は滑石片岩製の石錘で、筋

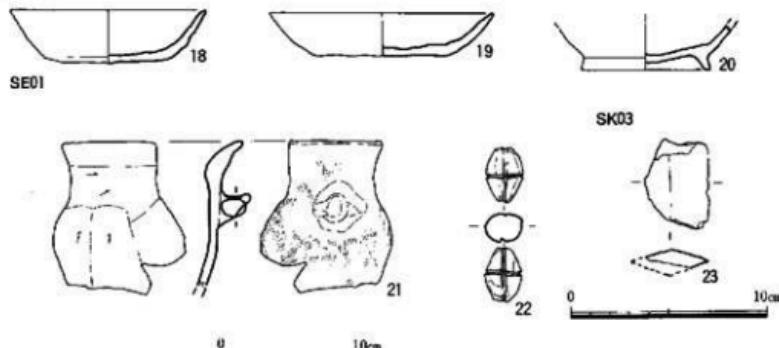
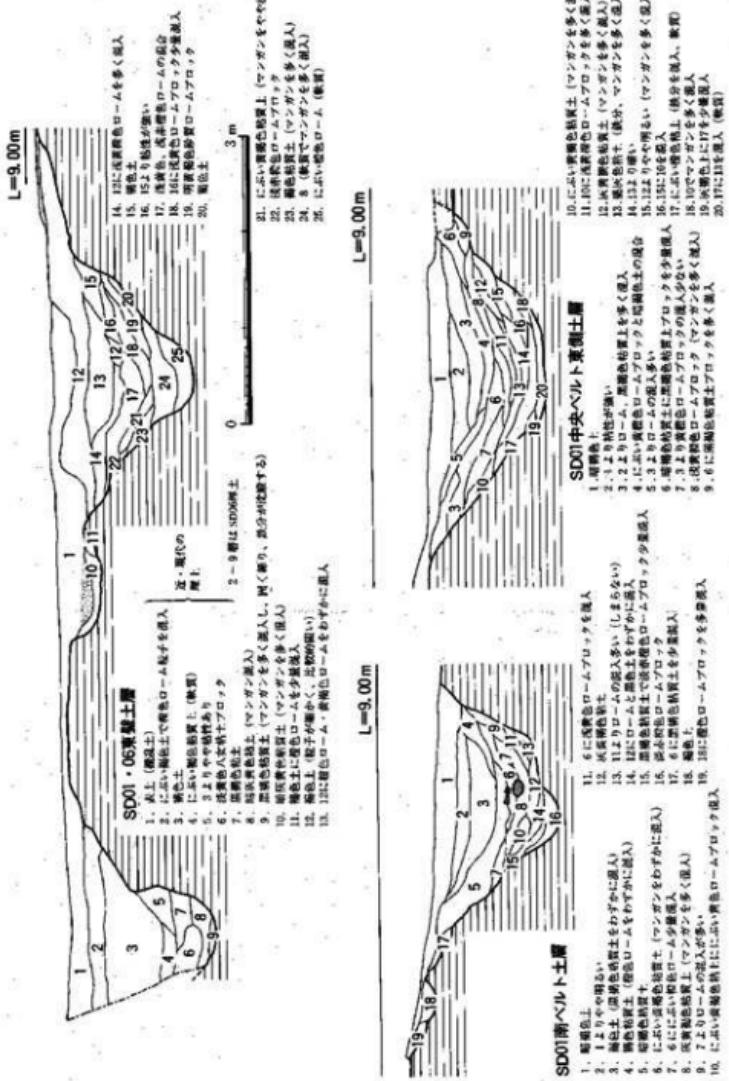


Fig. 12 SK03, SE01出土遺物 (1/3・1/4)



1. 第136次調査

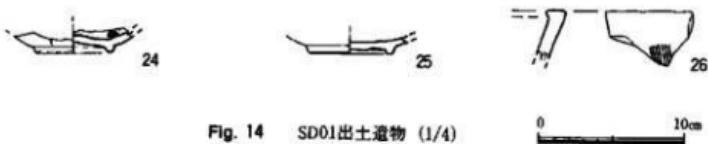


Fig. 14 SD01出土遺物 (1/4)

0 10cm

錐状の形態。断面は梢円形。十字の組かけ溝が切られている。長さは3.8cm、幅2.5cm、厚さ1.9cm、重さ23gを測る。1・5が上層、2~4が中層から出土。

溝状遺構

大小合わせて7条検出した。時期的にはいずれも中世末期以降である。

SD01 (Fig. 13, PL. 3・5)

調査区西側から北側をく字状に折れ曲がって延びる溝である。溝幅は2.8~3.5m、深さは1.2~1.3mを測り、断面は逆台形を呈する。溝は灰白色の八女粘土迄堀り込んでいる。埋土は上半部が暗褐色粘質土を主体とし、下半は粘性が強くなり、また黄褐色・赤橙色地山ロームブロックの混入が多くなる。溝南側の南壁ベルト近くには底より40~50cm程浮いて礫群が流れ込みのような形で検出された。埋土の状況から人為的に短時間に埋めた状況は感じられない。溝底のレベルは北東側が南西側より高くなり、水が流れるすれば台地高所部に近い東側から南西方向に流れたのであろう。

出土遺物 (Fig. 14~18, PL. 11) 弥生土器から古墳時代の土師器・須恵器、中世の青磁・白磁・陶器・瓦質土器片などが多量に出土している。他に鉄刀など鉄器や石製品なども出土している。量的には弥生土器が圧倒的に多い。

24は青磁碗底部1/6片。復元高台径15.3cmを測る。外面は鎌薺弁と思われる縞線が入る。胎土は灰色で精良、高台内面が露胎以外、他は灰オリーブ釉がかかり、氷裂が入る。25は瓦器碗底部片。復元高台径5.7cmを測る。器表は風化が著しいが、外面色調は灰白色で、胎土は細砂粒を若干含むが精良である。26は瓦質土器の擂鉢口縁部小片。外面はタテ刷毛。外面色調は暗

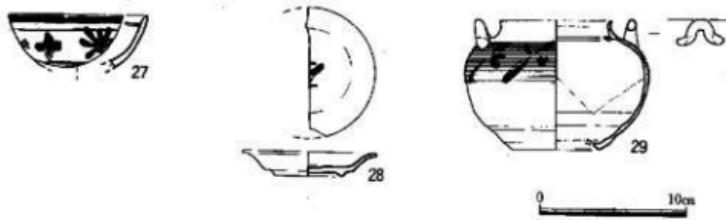


Fig. 15 SD02出土遺物 (1/4)

0 10cm

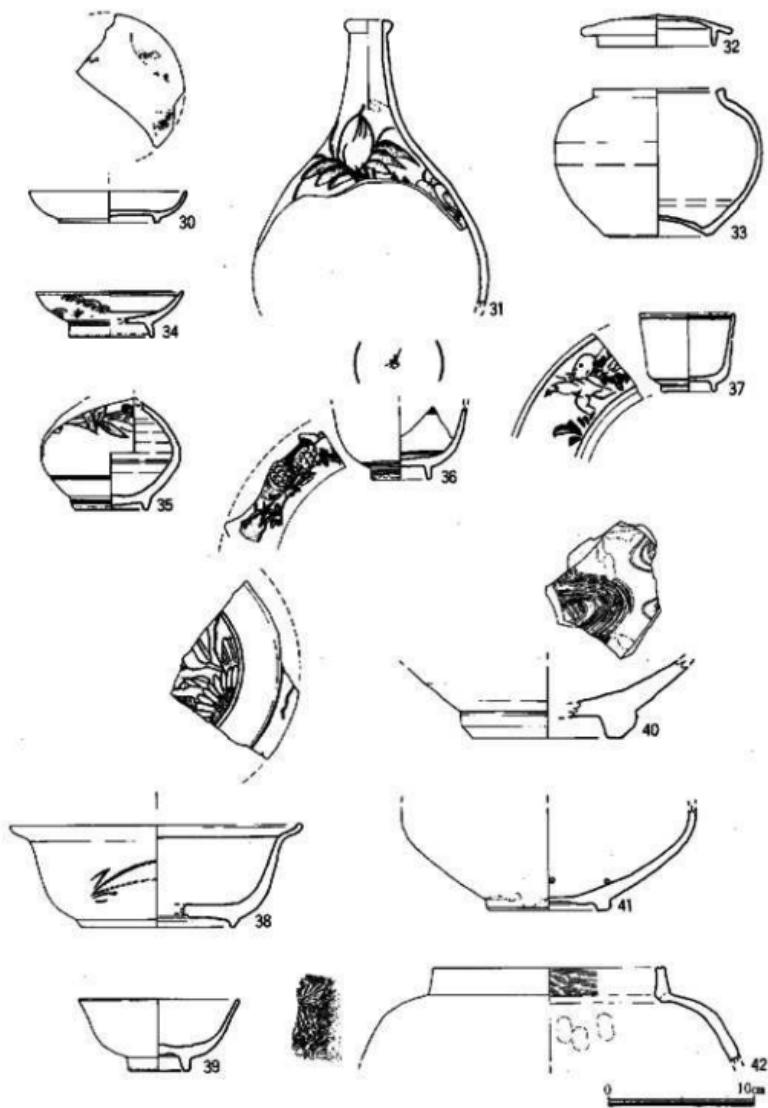


Fig. 16 SD06出土遺物 1 (1/4)

1. 第136次調査

灰色で、胎土に2mm程度の砂粒を含む。

58・59は鉄器、58は刀の刃部から茎片で、残存長12.1cm、刃部幅1.5~1.8cmを測る。闇の部分は銅製で漆の皮膜が残り、また刃部には木製の鞘が残っている。59は不明鉄片で、残存長4.5cm、幅4.0cm、厚さ2mmを測る。58・59いずれも南ベルトから出土。60は石劍の刃部片か、長さ5cm、刃部幅4cmを測る。表面は剥落が著しいが両側縁に刃部が残る。灰色で石質は安山岩か。77は北側中層から出土の叩石。長径6.7cm、短径5.8、厚さ4.6cmを測る橿円形状のもの。上面に使用痕が残る。色調は暗緑青色で、石質は緑泥片岩である。

SD02 (PL. 9)

調査区南東から北西に伸びる小溝。北西側は直角に曲がり、擾乱で消滅する。溝幅は南東側で約1m、北西側で約0.4mを、深さは南東側で20cm、北側で4cmを測る。溝底レベルは北西側に深くなる。埋土は上層が黒褐色土、下層が暗褐色粘質土で、地山ローム土を混入する。

出土遺物 (Fig. 15, PL. 10) 弥生土器・土簡器、近世の陶器・磁器・鉄滓・黒曜石剝片が出土している。

27は赤絵磁器の碗1/3片。復元口径9.5cm、器高8.9cmを測る。全面施釉後、赤・黄の2色で文様を描くが、部分的にはげる。28は染付の小皿で見込みに鮮やかな呂須がかかった印版文様が入る。29は陶器の土瓶1/3片。復元口径7.6cm、最大胴径12.3cm、器高8.9cmを測る。注口が付くと考えるが欠失している。1対の耳が付き、胴部上半に10本单位位の沈線が入る。器壁は全体に薄く、外面下半は削り、外面下半迄緑灰色の釉がかかり、上半には藍と白色の顔料で文様が描かれる。内面には鉄錆のようなものでにぶい橙色を呈す。

SD03

調査区東側にある南北方向の小溝。SD02に切られる。確認長9.5m、幅0.15~0.4m、深さ10~18cmを測り、断面は逆台形を呈す。埋土は暗褐色土で、地山ローム土を少量含む。

出土遺物 (Fig. 21, PL. 11) 弥生土器から近世の陶磁器片が少量出土している。

73は形態的に見て擬似鏡を兼ねた石鏡もしくは砥石か。全長4.9cm、最大幅3.0cm、最大厚1.5cm、重さ36gを測る。全面擦り仕上である。色調は灰白色で、石質は珪岩か。

SD04

SD01南側に並行する浅い落ち込み。埋土は褐色土。遺物は陶器片が1点出土。建物の基礎跡かもしれない。

SD05

北側 SD01と06の間で検出した確認長5m以上、幅1.2m、深さ34cm程の断面が丸底となる溝。西側は擾乱 SX03で不明。埋土は暗灰褐色粘質土であるが、東側境界地周辺は上部に灰層がある埋土は近世のもので、遺物も陶器片が3点程出土している。

SD06 (Fig. 13, PL. 4・5)

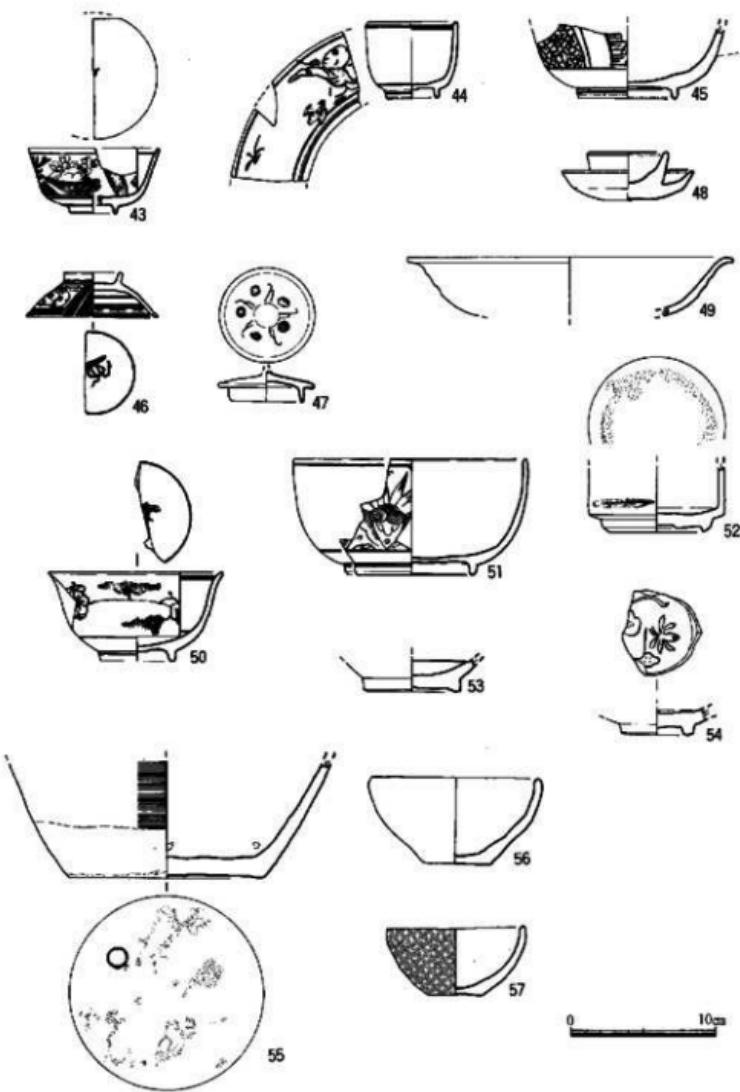


Fig. 17 SD06出土遺物 2 (1/4)

1. 第136次調査

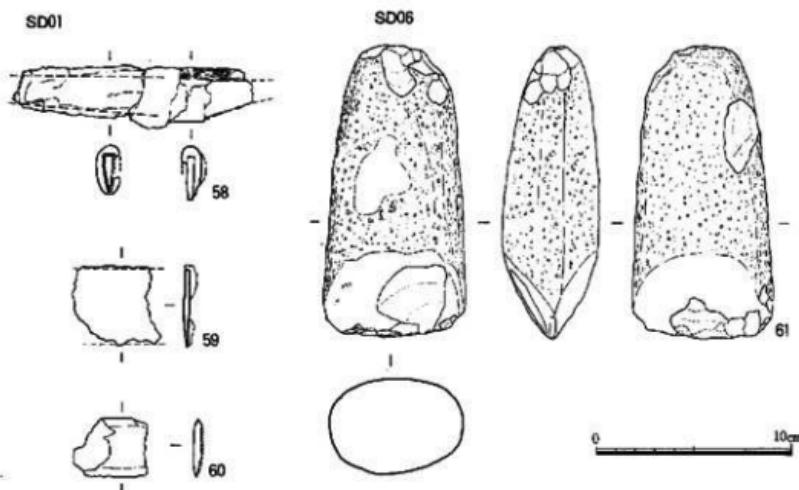


Fig. 18 SD01・06出土遺物 3 (1/3)

SD01に並行して東西方向に延びる溝で北側境界地にかかる為全容は不明。確認長は18m、幅は2.4m以上を測る。断面はU字形を呈すが、かなり流水によって壁は抉られている。西側は後世の搅乱等で乱され、はっきりしない。埋土は上層から中層迄近・現代の埋土、下層は黒色又は暗灰黄色の軟質ローム粘土である。溝は灰白色の八女士面迄埋り込み、湧水が激しい。SD01と並行する溝と考えるが、この溝は昭和40年代初め迄残っていたといわれる小田部城外濠のホカヤネに接続するものと考え、ホカヤネに生活廃水を流す為の溝として使用されていたものであろう。

出土遺物 (Fig. 16~18, PL. 11) 遺物の取り上げは深さを目安に上・中・下層で取り上げを行った。遺物は弥生土器を始め、近世・近代の陶

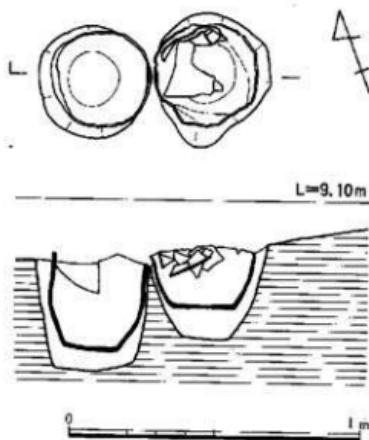


Fig. 19 SP05・06 (1/20)

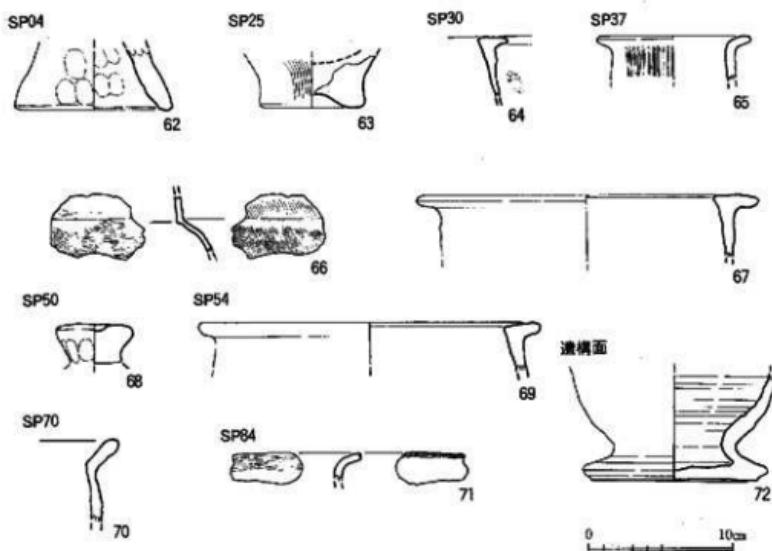


Fig. 20 ピット・造構面出土遺物 (1/4)

磁器、ガラス製品、鉄釘、板片、磨製石斧などが出土している。

30~33は西堀上層出土。30は白磁の色絵皿1/3片。復元口径10.8cm、器高2.2cmを測る。赤・黒・緑・青の顔料で文様を描く。31は染付磁器の壺利で、口径3.3cmを測る。口縁部は玉縁状を呈す。胴外面は草花文を濃紺の呉須で描く。内面は無釉で、胎土は灰白色、釉は明緑灰色を呈す。32は土師質の素焼きの蓋でほぼ完形。最大径10.5cm、受部径8cm、器高2.2cmを測る。天井部はヘラ削り。色調は黄白色。16は素焼きの無頸の壺。口径9.2cm、器高10.2cm、最大胴径14.4cmを測る。底部は上げ底、外面下半は削り、その他はナデ。色調は黄白色。法量的には32と一致し、31は32の蓋である。

34~42は中層出土。34~38は染付磁器である。34は皿1/3片。復元口径10cm、器高3.2cmを測る。外面は波濤文を呉須で描くが発色は悪い。胎土は灰白色で、黒色微粒子をわずかに含む。35は瓶で銚子か。外面に呉須で竹か籠を描く。内面は無施釉で水引痕が明瞭に残る。36は湯呑み碗2/3片で、高台径4.2cmを測る。外面に呉須で草花文を描く。37は湯呑み碗1/2片。復元口径6.6cm、器高5.5cmを測る。外面に呉須で手にたも網を持った唐子風の文様を描く。胎土は灰白色で釉の発色は良い。38は鉢1/4片で、復元口径20cm、器高7cmを測る。見込みに菊花、外面に秋草の文様を呉須で描く。外底部は蛇の目高台状を呈す。胎土は灰白色で、釉色は青味か

かった乳白色を呈す。39は磁器碗ではほぼ完形。口径11cm、器高5cmを測る。外面全体と口縁部内面直下迄褐色の釉が、見込みと高台内面には白色の透明釉がかかる。内底見込みは蛇の目状に釉をかき取る。疊付は露胎。40・41は陶器で、40は鉢形の大皿底部1/4片。復元高台径10.4cmを測る。内面見込みには白化粧土で三島手風に刷毛目文様を描きその上に灰釉をかける。外面は赤褐色を呈し、胎土には黒色微粒を少量含む。41は片口鉢と思われる。高台部を除いて淡いオリーブ釉がかかるが、見込み内に6ヶ所の目痕が残る。40・41とも高取系か。25は土師質土器の湯釜である。口縁部1/8片で、復元口径16cmを測る。肩部に三葉の印花を施し、口縁内面に10本単位の横刷毛を施す。色調は橙色。43~49は下層出土。43は色絵磁器の碗1/2片、復元口径8.8cm、器高4.5cmを測る。黄・青で草花を描く。疊付は露胎。鮮やかな発色で近代のものか。44・45は染付磁器。44は湯飲み碗1/2片。復元口径6.3cm、器高5.3cmを測る。外面は蝶を追いかける唐子風の絵柄を描く。高台疊付のみ露胎。37と同様の絵柄である。45は大型の碗で復元底径5.8cmを測る。釉には細かい氷裂が入り、胎土に気泡が入る。46は蓋1/2片。復元口径9cm、器高3cmを測る。異須で文様を描くが、文様はにじみ、ぼやける。釉面には氷裂が入る。47~49は陶器。47は急須などの蓋であろう。口径5cmを測る。内面は無施釉、天井外面は褐色と黄緑色の花文のような文様が描かれ、胎土は淡い褐色、釉色は茶色っぽい黄白色である。48は秉燭2/3片。口径5.7cm、受部径9cm、器高3.3cmを測る。外面削り、灰オリーブ釉がかかる。49は中皿の18片。復元口径22.6cmを測る。にぶい緑灰色の釉がかかる。胎土は茶褐色である。高取系か。50~52は層位不明でいずれも染付磁器。50は碗1/2片。復元口径12cm、器高6.2cmを測る。外面に牡丹唐草、見込みに昆虫文が入る。釉の発色が悪くオリーブ灰色を呈す。胎土は灰白色。肥前系か。51は大碗の1/3片で復元口径15cm、器高8cmを測る。外面にインディアンのような人物の絵が描かれているのである。52は筒形の碗2/3片で、復元底径7.5cmを測る。内底見込みに輪状の砂目痕が残る。53~57は下層出土。53は白磁碗IV類の底部1/2片。底径は復元で16.8cmを測る。高台は削り出し、内面には氷裂の入る緑がかった白色釉がかかる。54は青磁碗底部4/5片。復元高台径は5cmを測る。見込みに蓮華花文をヘラ描きする。高台部は削り。高台内面は露胎でその他はオリーブ灰色の釉がかかる。55は陶器壺の底部片で底径13.6cmを測る。底部には直径1.2cmの円孔がある。外底部には厚めに6ヶ所砂目痕が残る。胎土は灰白色で、オリーブ黄色釉が厚めにかかる。56・57は弥生土器の鉢。56は1/3片で、復元口径11.6cmを測る。57も1/2片で、口径は9.5cmを測る。外面色調は56が灰黄褐色、57が内外面丹塗りである。胎土はいずれも径2~3mmの砂粒を多く含む。53・54・55・57は下層、56は中層出土である。61は下層出土。今山産の太型蛤刃石斧で、ほぼ完形。全長15cm、刃部最大部7.1cm、厚さ4.9cm、重さ815gを測る。刃部と基部は使用により一部欠損する。全面敲打調整痕が残る。石質は玄武岩。

埋甕

SP05・06 (Fig.19・20, PL. 9)

1. 第136次調査

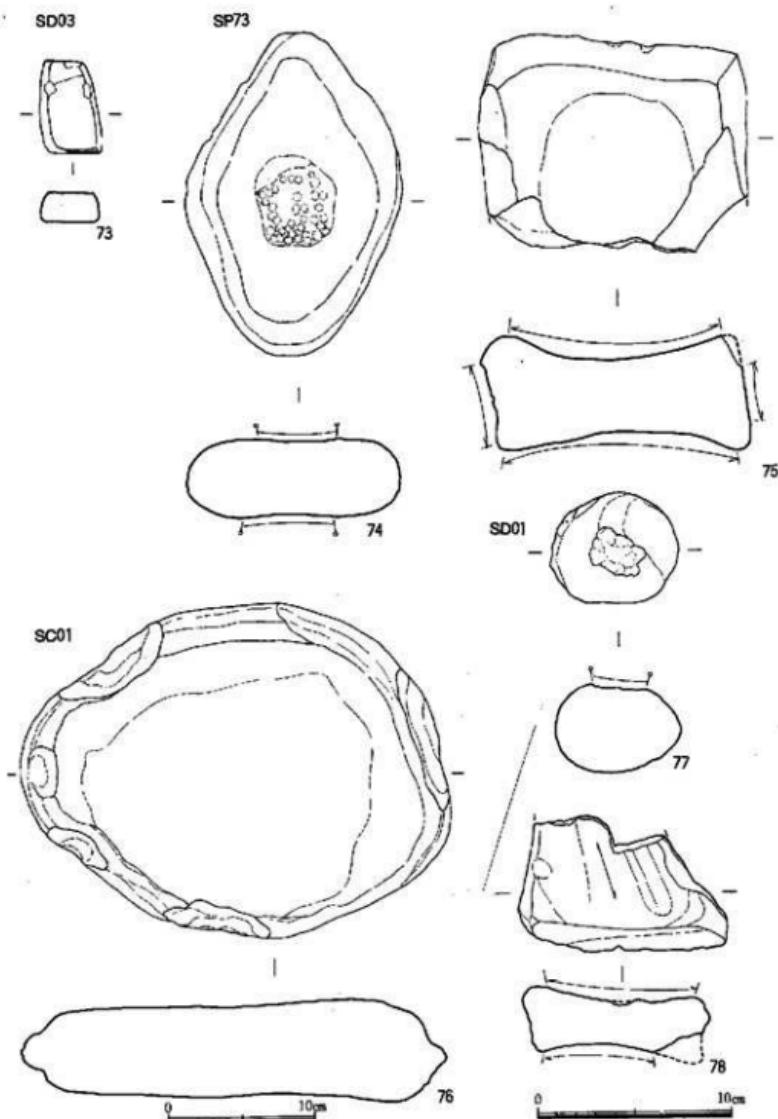


Fig. 21 溝・ピット出土遺物 (1/3 · 1/4)

1. 第136次調査

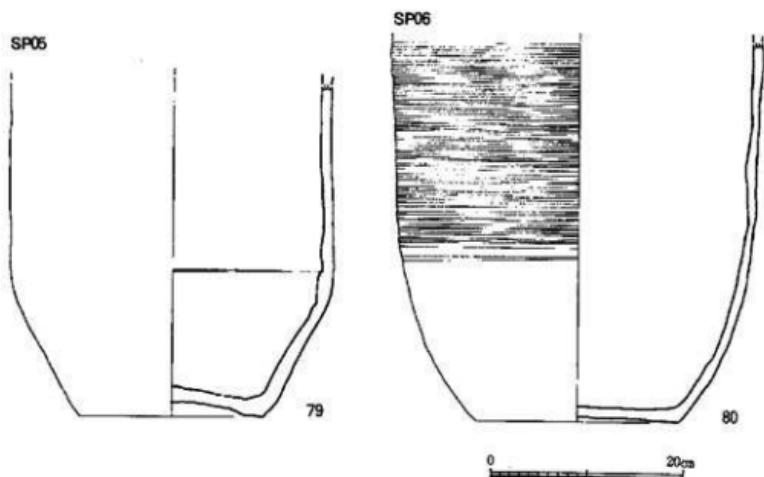


Fig. 22 SP05・06出土遺物 (1/6)

南側で検出した陶製の埋甕を2個並べたもの。当地点西側には調査前には納屋があり、それに伴っていたものであろう。

79は上半部を欠失した甕で、褐色釉が全面にかかる。器高は34cm以上、最大胴径32.4cm、底径19cmを測る。上げ底で縁辺に砂目が付く。胎土は灰白色で精良。70は素焼きの甕で上半部を欠失する。胴部面上半はかき目状の沈線が巡る。器壁は部分的に剥落する。器高は40cm以上、底径は21cmを測る。外面色調は淡黄橙色で胎土は精良、焼成も良い。

ピット出土遺物 (Fig. 20・21, Pl. 18)

暗褐色土、黄褐色ロームブロック、褐色土、黒褐色土を主体とする4種類の埋土のピットがある。柱痕跡の残るものもあったが、建物としてまとめえなかった。図示出来る遺物は弥生土器が多いが、必ずしもピットの時期を示すものではない。

62～71は弥生土器。62はSP04出土の器台底部1/4片。復元底径10.8cmを測る。内外面指おさえ痕が残る。63はSP25出土の甕底部1/3片。上げ底で中期前半のもの。64はSP30出土の甕口縁部細片。逆L字形の口縁部である。胎土に金雲母をわずかに含む。65～67はSP37出土。65は小形甕の1/5片。復元口径10.6cmを測る。外面にヘラによる暗文が入る。66は直口する甕の口縁部片。内外面刷毛。67は甕の口縁部1/6片。復元口径23.6cmを測る。全体に磨滅するが横ナテ。68はSP50出土。甕のつまみで径5.2cmを測る。頂部は凹む。69はSP54出土。甕の口縁部1/6片。器壁は磨滅し調整不明。70はSP70出土。く字状を呈す甕の口縁部小片。器壁は磨滅

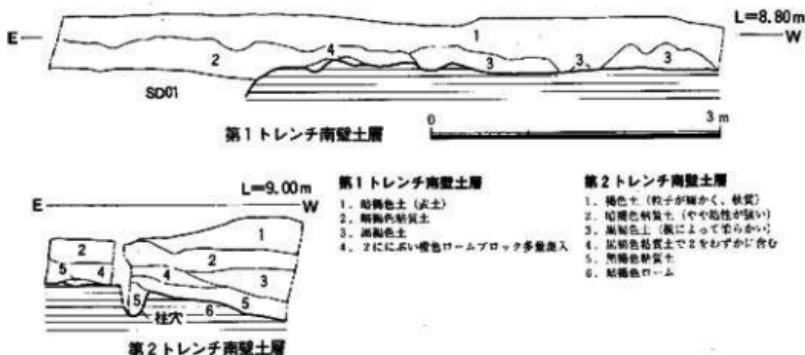


Fig. 23 第1トレンチ・第2トレンチ土層 (1/60)

し調整不明。71はSP84出土。甕の口縁部細片で、口唇部に刻目があり、内外面刷毛。弥生時代前期後半代のものか。72は遺構面出土。花生の底部片で、底径11.4cmを測る。外面は黒褐色の鉢軸が厚目にかかる。外底は削りで、窓道具痕が輪状に残る。高取系か。

73~78はピット出土の石器・石製品である。74・75はSP73出土。74は叩石で上下両面に使用痕跡が残る。最大長16.7cm、最大幅11cm、厚さ4.6cm、重さ1080gを測る。石質は花崗岩である。75は砥石。上下両側面を砥面として使用。最大幅14cmを測る。石質は暗黄褐色の砂岩である。

その他の遺構

防空壕 SX04 (PL. 8)

北西境界地で検出した長方形の土坑。規模は南北長4m、東西幅2.1m、深さ0.5mを測る。残りは余り良くない。台地の縁辺に沿って作られており、東西壁沿いに支柱を建てたピットがある。また北東隅には入口と思われる張り出しを掘り、階段を作っている。

3) 土壘の調査 (Fig. 23, PL. 9)

調査区西側台地沿いに最大比高35cm程の高まりがあったため、小田部城の外濠とされている「ホカヤネ」に伴う土壘の可能性も考えて、試掘トレンチを2ヶ所設定し調査を行った。

1 トレンチ 南側に設定したトレンチで全長2.6m、幅0.6mを測る。地山面迄の深さは50

1. 第136次調査

~55cm前後、にぶい橙色のローム土である。堆積状況は表土の暗褐色土(25~55cm)の下に凹凸を持って接合する黒褐色土(5~25cm)となる。遺構は地山面に直径20cm前後の円形ピットがあった。上層の状況から土壠等の存在を示す堆積層は認められなかった。

2 トレンチ 北側土壠状の高まり部分に設定したトレンチで、長さ2.7m、幅0.75mを測る。地山面は西側に緩やかに下傾するが、その上に上から褐色土、暗褐色土、黒褐色土、黒褐色粘質土の堆積土が堆積していた。版築等は認められず、土壠とは断定出来なかった。地山の遺構面には円形ピットが認められた。

4) 小 結

当調査地点で検出された遺構の時期は大きく4時期に大別出来る。Ⅰ期はSC03の弥生時代の時期、Ⅱ期はSC01・02の古墳時代前期、Ⅲ期はSE01の平安時代初め頃の時期、Ⅳ期は中世後半、戦国時代末頃の時期である。

Ⅰ期については、SC03は柱穴のみで時期は確定しにくいが柱穴から遺物14が出土しており、これから中前期半位が考えられる。ただ他遺構埋土中からは中期中頃から後半代の遺物がかなり多く出土しており、後世の削平で消滅したものの、本来は当地点一帯に弥生時代の集落が存在した可能性がある。

Ⅱ期はSC01・02でSC01の出土遺物から古墳時代前期である。SC01出土の鉢1・2の2点が時期を決めうる資料であるが、1は2に比べ口縁の立ち上りの様子とかやや新しい要素があり、前期でも新しい段階であろう。

Ⅲ期は井戸SE01で9世紀前半代のものか。これは当地点周辺では初めての発見である。

Ⅳ期はSD01・06の時期で中世末から近世にかけての時期である。SD01は時期を決める良好な遺物はないが、瓦質土器26の出土から16世紀代であろう。SD06は狭い調査範囲で、SD01と並行してコーナ部を形成するが明確ではないが西側に存在すると推定される外濠に接続すると考える。出土遺物は近世末から近代にかけてのものが多いが、これはこの溝がつい最近迄生活污水を排水する為の溝として使用されていた為であろう。

2. 有田第141次調査（調査番号8822）

1) 調査区の地形と概要

調査区は早良区有田一丁目33-6に所在する。ちょうど有田・小田部台地の一番広い平坦面を持つ有田地区台地の中央、やや西寄りに位置する。旧状は畠地であった。

調査は昭和62年度に当地に専用住宅建設の為の埋蔵文化財調査の事前調査願が提出され、これを受けて発掘調査を実施した。調査は昭和63年6月20日～7月18日迄実施した。調査面積は申請面積260m²中250m²である。

調査区周辺は有田遺跡群内で最も調査が行われており、調査ヶ所は30ヶ所を数える。従来の調査から、周辺では弥生時代前期の環壕や、古墳時代全般に亘る集落、古代の官衙的建物群、中世の郭状遺構などが検出されている。

当地点の調査では、遺構面は表土下10～20cmの褐色の鳥居ローム土上面であり、標高は遺構面で約13mを測る。遺構の残りは普通であるが、狭小な範囲の為、全容を把握した遺構は少ない。主な遺構は古墳時代前期～後期の竪穴住居址5棟、堀立柱建物1棟、土坑3基であり、また調査区中央部に農道らしき浅い溝状の底面がしまった窪みがあった。出土遺物は住居址を中心とする古墳時代前期の土師器や、中期・後期の住居址から土師器・須恵器などが出土しており、総量はコンテナで11箱を数える。

2) 遺構と遺物

竪穴住居址 (SC)

全部で5棟検出したが、いずれも境界地に一部がかかるもので、全容を把握したものはない。

SC01 (Fig. 25, PL. 13)

調査区北壁境界地で検出したSC05と切り合う住居址。先後関係はSC05が新しい。全容を把握していないが、4本主柱の隅丸方形のものと考える。規模は東西長5m、南北長4.5m以上、残存壁高は最大で10cm前後を測り、全体に残りは悪い。床面に炭火物や焼上ブロックが撒布しており、焼失家屋の可能性もある。床面は貼床されており、それをはがすと中央は橢円形状に浅く窪み、また小ピット、小溝なども見られた。南壁から東壁にかけて壁下に幅20～25cm、深さ15cm位の周壁溝が巡る。主柱は4本で、P1～4が対応する。いずれも直径は50～60cm、深さ70～80cmと大きく、しっかりしている。主柱間距離はP1-P2 2.63m、P2-P3 1.95m、P3-P4 2.50m、P4-P1 2.10mを測る。

出土遺物 (Fig. 26・36, PL. 17) 土師器、須恵器が出土している。外に混入品ではあるが黒曜石剣片、磁器片などが少量出土している。

2. 第141次調査

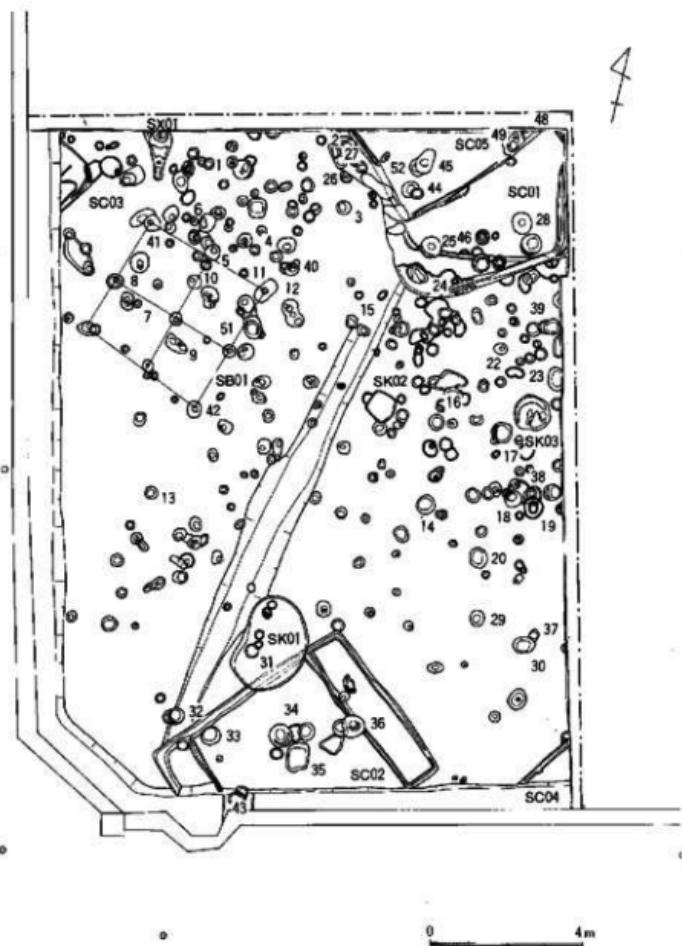


Fig. 24 第141次調査区遺構配置図 (1/150)

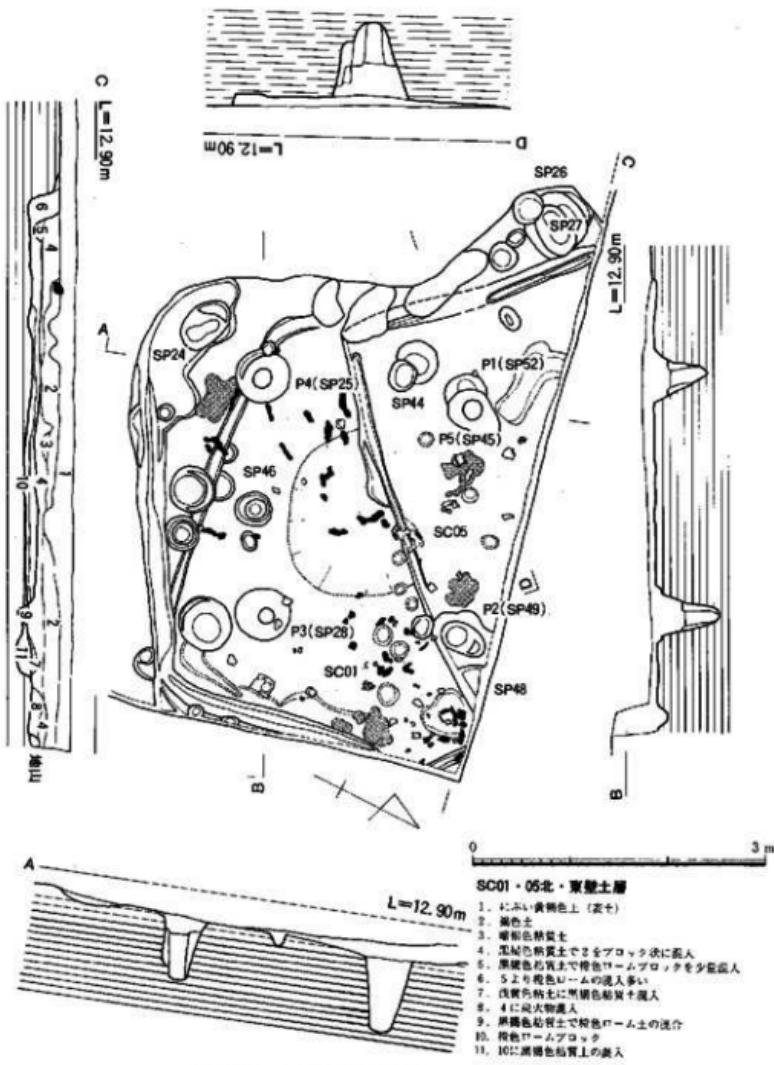


Fig. 25 SC01・05 (1/60)

2. 第141次調査

1～3は須恵器。1は壺身の小片で復元口徑に難がある。立ち上りは内傾するが長く伸びる形態。外面色調は青灰色を呈し、胎土は精良。2は壺と思われる口縁部1/10片。復元底径16cmを測る。口縁直下には三角突帯が一条巡り、8条の櫛描波状文が巡る。外面色調は青灰色を呈し、胎土は精良。3は高壺の脚部小片である。底径は推定で16cmを測る。壺部は丸く、三角の貼付突帯が付く。灰かぶりがある。外面色調は灰色、胎土は石英微粒を若干含む。4は土師器の高壺脚部片である。器縁は全体に磨滅がひどいが、内面にしづら痕が残る。外面色調は浅黄

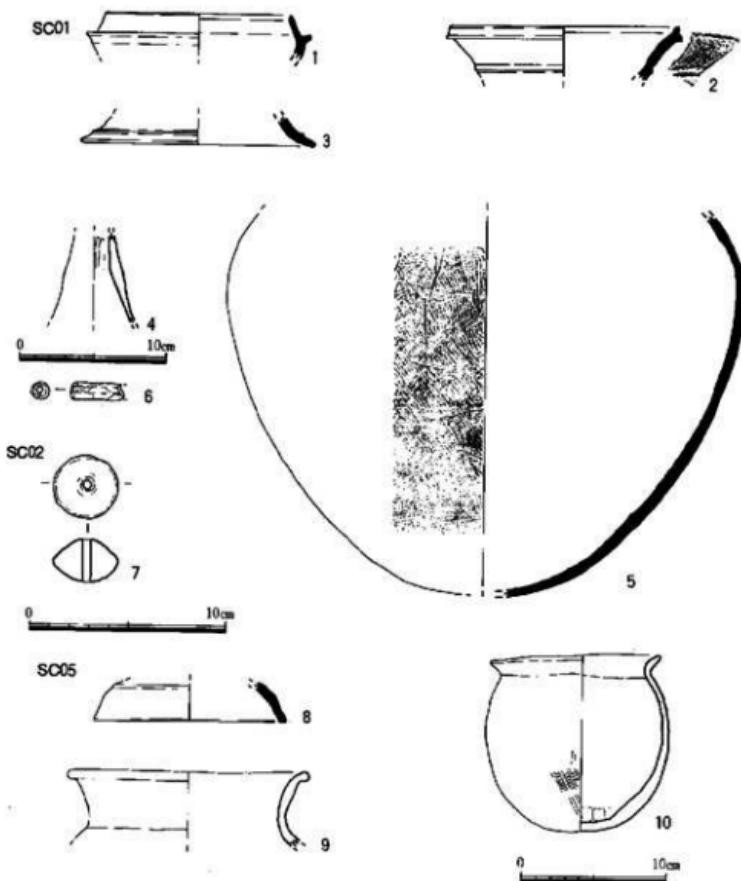


Fig. 26 SC01・02・05出土遺物 (1/3・1/4)

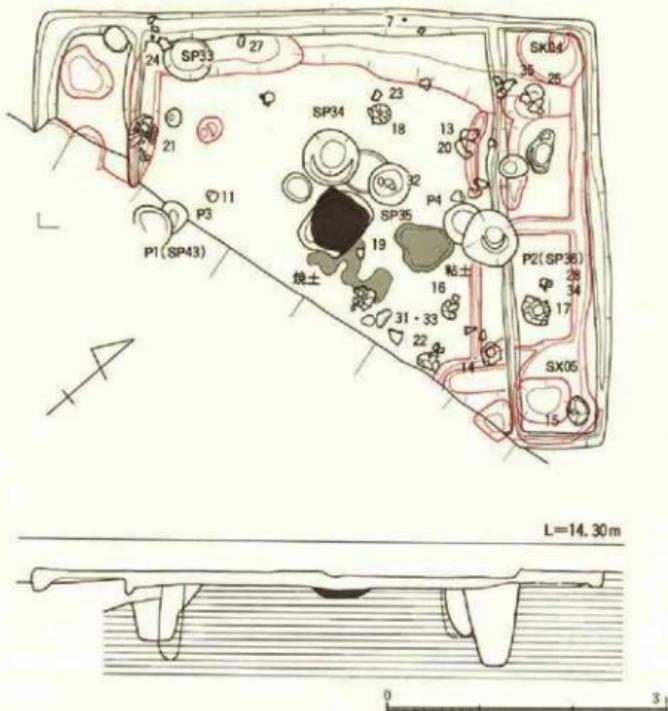


Fig. 27 SC02 (1/60)

橙色、胎土に石英微粒を若干含む。5は須恵器壺胴部1/3片。復元最大胴径35.2cmを測る。外面部目直交横位叩き、内面同心円状の當て具痕をナデ消す。外面色調は青灰色、胎土は精良。6は棒状の沈子片である。残存長2.7cm、直径0.9cmを測る。端部には紐ずれ痕が残る。色調は橙色を呈し、胎土には石英微粒を若干含む。43は凹石で石質は花崗岩、上面に使用による凹みが残る。二次的に加熱を受けた為かにぶい橙色を呈す。全体にもろい。長さ10.2cm、幅8.2cm、厚さ3.9cmを測る。

SC02 (Fig. 27, PL. 14・15)

調査区南側で検出した住居址であるが、南1/4は道路工事で消滅している。平面形態は長方形で両側に幅80cm程の地山粘土を貼付けたベッド状遺構を持つ。規模は東西長6.04m、南北幅4.62m、残存壁高は中央床面で16cm、ベッド状遺構部で10~14cmを測る。周壁下には溝が巡る。

主柱穴は2本で、P1、P2が相当する。いずれも床面から60~80cm程深くなり、大きくしつかりしている。P1、P2間距離は3.65mを測る。床面には炉と思われる直径70cm程、深さ10cm程の中凹んだ焼土面があり、中に炭化物が充満していた。床面からは炭化材、焼土塊、灰白色粘土塊、原位置を保っていると考えられる遺物が出土している。床面は貼床であるが、これを撤去すると、更にピット、及び溝、土坑が出土した。P3、P4はP1、P2のやや内側ではあるが、重複した位置関係にあり、これも主柱穴と考える。P3、P4間距離は3.1mを測る。SC02は1度建て替えられたものと考える。しかし炉は中央部のSP35のみで、全期間継続して使用されたのであろう。また出入口と考える壁下の屋内土坑は、住居址内で見られず、出入口は南壁中央あたりと考える。

出土遺物 (Fig. 26~28×30, PL. 17~18) 床面を中心に多量の土器器が出土している。器種的には壺・甕・鉢・器台などで、高坏が欠けている。外に黒曜石剝片などがあるが混入である。

11~17は壺。11は小型丸底壺ではば完形。広口のやや内傾して直立する形態。口径約6cm、器高7.8cmを測る。外面色調は橙色で、胎土は精良。12は中型壺で内傾する壺口縁部1/4片。復元口径9cmを測る。調整は外面ナメ又はヨコ刷毛。外面色調は黒色で、胎土に石英微粒を多く含む。13はLII縁部1/4片で、広口でやや外開きの形態。復元口径16.4cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。外面色調は橙色で、胎土は石英粒子を若干含む。14はやや頸部がしまる形態の口縁部片で、口径13.8cmを測る。外面に横方向の叩きを加える。外面色調は黄橙色で、胎土は石英粒子を多く含む。15は口縁部を一部欠失するので、大きく膨らむ長胴の胴部から短い口縁部が付く。調整は外面が細かい刷毛、内面はナデ。外面色調は赤橙色、胎土は石英粒子を多く含む。16は大きく広がる口縁部の1/8片である。口縁部はやや肥厚する。復元口径は30cmを測る。外面色調は橙色、胎土は石英粒子を多く含む。17は縦まり氣味の頸部に外へ開く口縁部が付く形態。頸部に一条の三角突帯が巡り、復元口径は17.4cmを測る。調整は外面刷毛、内面も口縁部は刷毛である。外面色調は黄橙色で、胎土は精良で、石英粒子を若干含む。

18~21は甕である。18は小型の甕で、復元口径15.2cm、器高16.2cmを測る。調整は外面叩きのち粗い刷毛、内面は刷毛のち板ナデ。外面色調は浅黄色~暗灰色で下半に黒斑がある。胎土は石英粒子を多く含む。19~21はく字状に口縁部が外折する形態。19は口縁部1/4片で、復元口径15.4cmを測る。調整は外面刷毛、内面に指おさえ痕が残る。外面色調は浅黄橙色、胎土は石英粒子を多く含む。20は口縁部1/4片で、復元口径は16.4cmを測る。器壁は磨滅がひどく調整は不明。器壁は全体に薄い。外面色調は黄橙色、胎土は石英粒子を若干含む。21は長胴の胴部を持つ形態で、復元口径21.0cmを測る。口縁部はやや肥厚する。調整は外面が叩きのち刷毛、内面が刷毛のちナデか。内面はやや磨滅する。外面に煤が付着する。外面色調はぶい赤橙色~橙色、胎土に大粒の石英粒子を若干含む。22~25は甕又は壺の底部片。22は内外面刷毛II調整で、外底部に黒斑が残る。23の器壁は全体的に荒れる。24は底部に若干平坦面を残し、器厚

2. 第141次調査

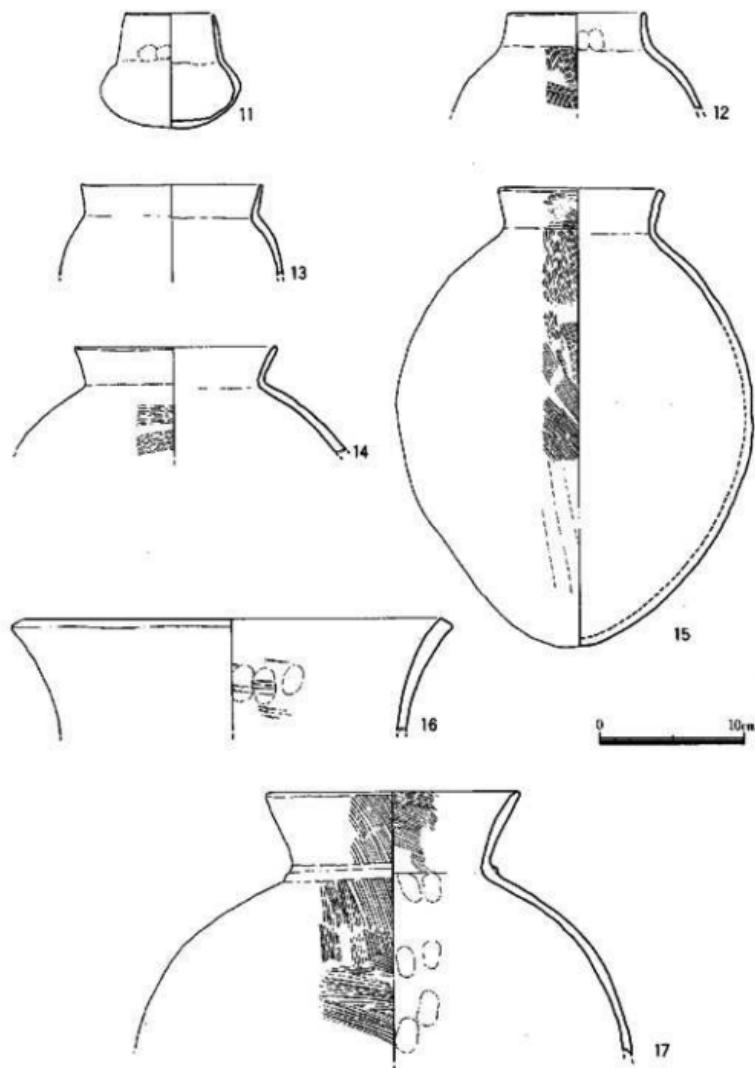


Fig. 28 SC02出土遺物 1 (1/4)

2. 第141次調査

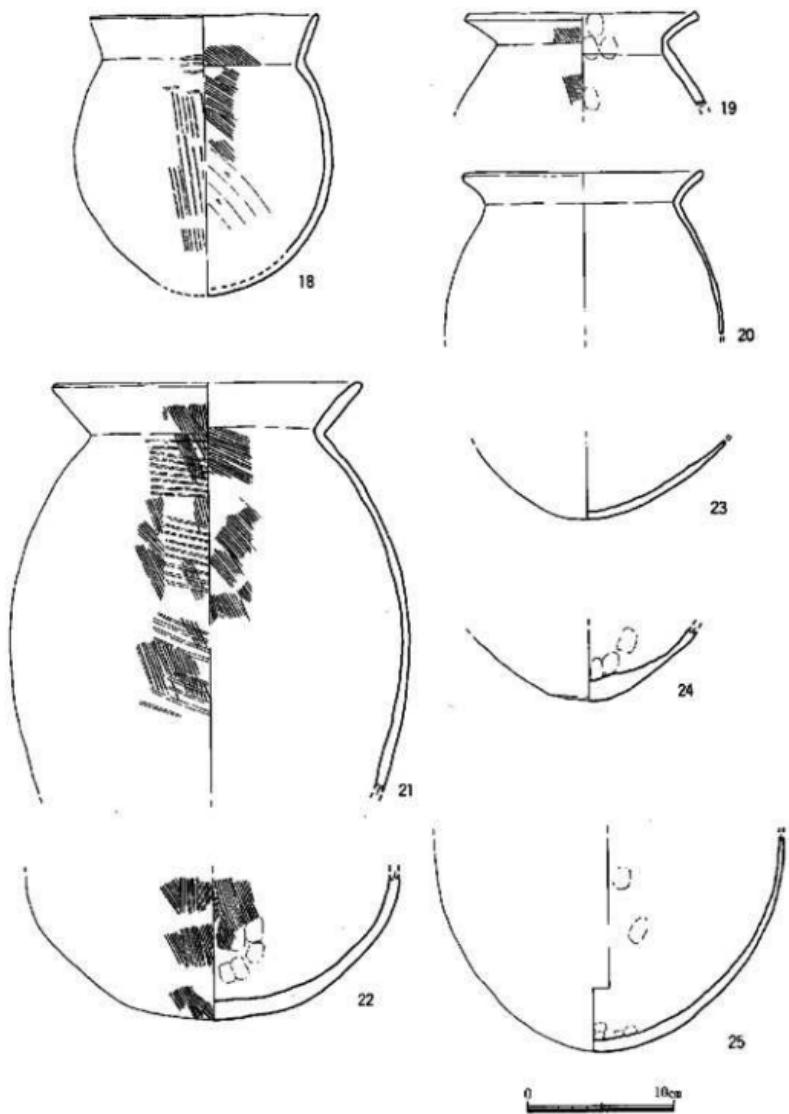


Fig. 29 SC02出土遺物 2 (1/4)

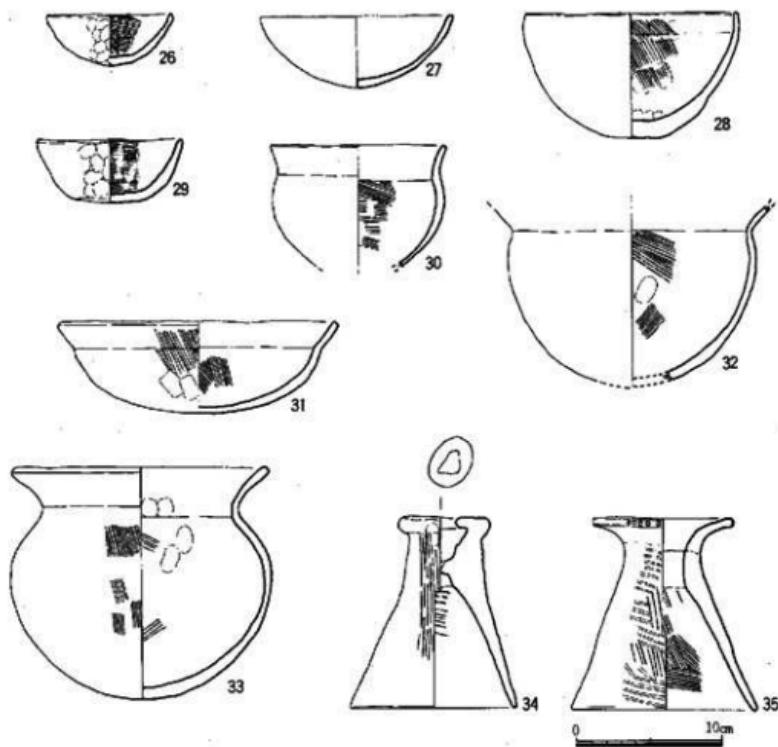


Fig. 30 SC02出土遺物 3 (1/4)

は1cm以上と厚目である。25は底部にわずかに平坦面が残り、内面に指おさえ痕が明瞭に残る。器壁は内外面荒れる。外面色調は22が黄橙色、23が橙色、24が浅黄色、25が黄橙色を呈す。胎土は22・24・25が石英粒子が多く含み、23が石英粒子を若干含む。

26~33は鉢である。26は小形の浅い椀形の形態。口径は8.5cmで、器高3.5cmを測る。手づくねで外面に指おさえ痕、内面に不整方向の刷毛を加える。外面色調はにぶい橙色、胎土に石英、黒雲母粒子を多く含む。27は1/2片で、復元口径約13cm、器高4.9cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。外面色調は橙色、胎土に石英粒子を多く含む。28は底の深いボール形の形態、底部は器壁が削がれたものかやや凹む。外面は荒れ調整は不明だが、内面に刷毛と内底に指おさえが

2. 第141次調査

残る。外面色調は黄橙色内面に黒斑がある。胎土は石英粒子を多く含む。29は底部が平底のもので、ほぼ完形。手づくねで口径は約10cm、器高4.5cmを測る。外面は指おさえ、内面は指おさえのち反時計回りの刷毛である。外面色調は橙色、胎土に石英粒子を多く含む。30は口縁部1/4片で、復元口径10.6cmを測る。頸部が屈折して口縁部を持つ形態である。磨滅がひどく調整は不明だが、内面に刷毛が残る。外面色調は灰黄褐色を呈し、胎土に石英粒子を多く含む。31は1/4片で、大形のもの。口縁部を持つ浅い皿状の形態で、復元口径19cmを測る。かなり器壁は磨滅するが、内外面刷毛、外底部は板ナデか。外面色調は浅黄橙色で、胎土に石英粒子を多く含む。32は1/2片で31より一まわり大きいもの。復元口径17cm以上、器高は10.7cm以上を測る。器壁の磨滅は全体にひどいが、内面は指おさえと刷毛が残る。外面色調は橙色、内面に石英粒子を多く含む。33は1/2片で、口縁部を持ち胴部が張る形態。復元口径17.4cm、器高約16cm、最大胴径17.6cmを測る。器壁はかなり磨滅するが、外面は刷毛のちナデ。内面刷毛のちナデ。外面色調は橙色で煤が付着し加熱を受けている。胎土は石英粒子を多く含む。

34・35は器台である。34は舟形器台に近いもので、口径6.0~6.5cm、器高13.1cm前後を測る。口縁部は内折し、平坦な受部を形成している。内面は貫通していない。器壁は磨滅がひどいが、外面は粗い報刷毛、内面に叩き痕が残る。外面色調は橙色調は橙色、胎土に石英粒子を多く含む。35は口縁部が大きく外反するもので、復元口径9.7cm、器高13.2cmを測る。全体に磨滅はひどいが口唇部に刻みを加え、外面は叩きのち粗い刷毛、内面は刷毛を加える。外面色調は橙色、胎土に石英粒子を多く含む。44は稍凹形状の石製品、石球ともいるべきもので、長径5.0cm、短径4.3cm、厚さ2.9cmを測る。全面擦られてツルツルする。石質は砂岩で、硬質な感じを受ける。45は工作台石ともいべき断面方形の細長い大形の石器である。長さ23.2cm最大幅9.3cm、厚さ7.4cmを測る。上面は使用により擦られツルツルしている。石質は玄武岩で、加熱を受けたのか赤味を帯びた灰白色である。

7は平面円形、断面算盤形の土錐である。完形品で、直径3.3cm、厚さ2.2cm、重量18gを測る。色調は橙色で、胎土は石英粒子を多く含む。

SC03 (Fig. 31, PL. 15)

調査区西隅で検出した住居で、一部のみで全体の形態は不明。残存壁高15cmを測る。

出土遺物 (Fig. 32, PL. 17) 須恵器、土師器の細片が少量出土している。固化出来るものは少ない。

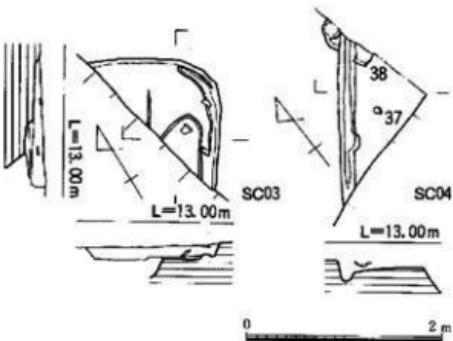
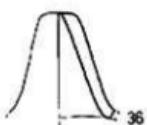


Fig. 31 SC03・04 (1/60)

SC03



SC04

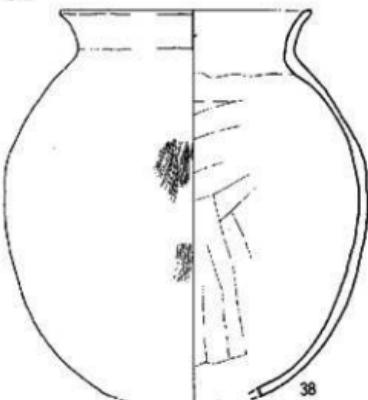


Fig. 32 SC03・04出土遺物 (1/4)

36は土師器の高壺脚部片。器壁は全体に荒れるが外面ヨコ刷毛か。外面色調は浅黄橙色、胎土に石英粒子・金雲母片を多く含む。

SC04 (Fig. 31, PL. 15)

調査区南東隅で一部を検出した。大半は道路によって消滅している。残存壁高は10cm程度であるが、壁下に溝が巡る。SC02と基準を同一方向に取るようである。

出土遺物 (Fig. 32, PL. 17) 土師器が少量出土している。

37・38は土師器で、床面よりやや浮いた状態で出土している。37は小形丸底壺の1/2片で、最大胴径7.4cmを測る。内外面指おさえ仕上。外面色調は褐色で、胎土に石英粒を若干含む。38は壺1/2片で、頸部はやや縮る。外面刷毛で、内面ヘラ削り。外面色調は浅黄橙色、胎土は石英粒子を多く含む。

SC05 (Fig. 25, PL. 13)

SC01を切る住居址である。大半が北側境界地外にかかる為全容わからないが、P 5を主柱とする4本主柱の古墳時代後期の堅穴住居址であろうか。規模は現状で東西長4.2m以上、南北長2.8m以上、残存壁高15cmを測る。壁下には廻溝が巡り、床面には2ヶ所の焼土ブロックが分布していた。

出土遺物 (Fig. 26, PL. 17) 土師器：須恵器の細片、黒曜石の剥片が少量出土している。

8は須恵器壺蓋1/8片。復元口径13.0cmを測る。天井部と口縁部の境に軽い段が付く。外面

2. 第141次調査

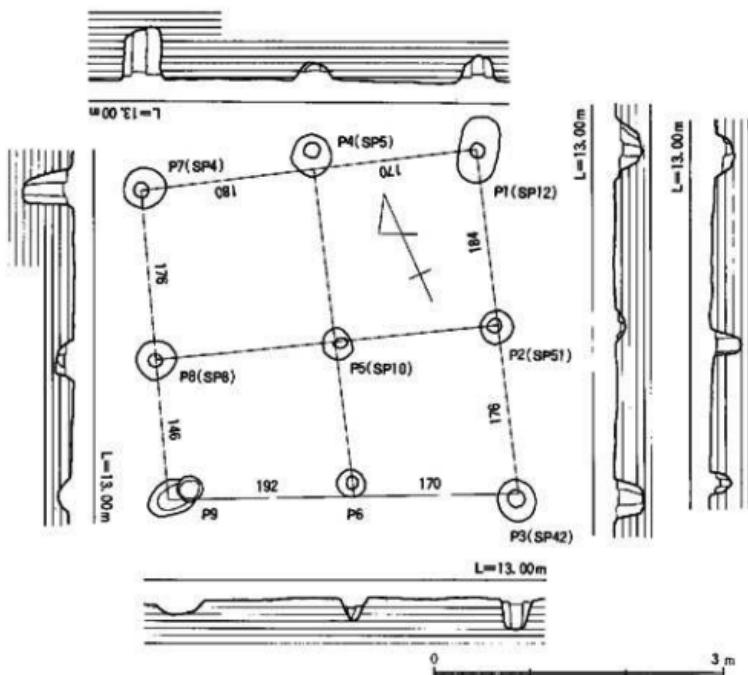


Fig. 33 SB01 (1/60)

色調は灰色で、胎土は黒色微粒子を若干含む。9・10は土師器である。9は壺の口縁部1/3片。復元口径16.4cmを測る。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる形態。調整は外面刷毛のちナデ消し、内面ナデ。外面色調はにぶい橙色、胎土に石英粒子を多く含む。10は鉢ともいえる小形の壺の1/2片。復元口径11.5cm器高12.1cmを測る。胴外面上半に斜めの木目直交の叩きが残る。内面はナデ。外面色調は橙色で内外面2次的加熱を受ける。胎土は石英粒子を多く含む。8・9は壠土中、10は床面直上である。

壠立柱建物 (SB)

SB01 (Fig. 33, PL. 16)

調査区北西側で検出した2間×2間の総柱建物である。規模は南辺3.60m、東辺3.60m、北辺が3.50m、西辺が3.22mを測る。かなりいびつである。柱穴はいずれも円形で、四隅の柱穴はP9を除いて深くなる。柱径は痕跡から12~15cm位であろう。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 5個の柱穴から土師器・須恵器の細片が少量出土するが、図化し時期を決める

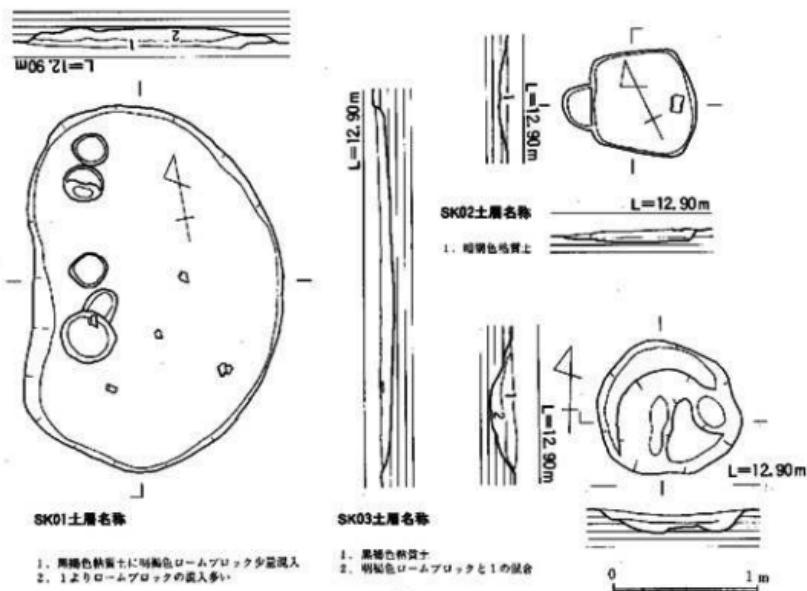


Fig. 34 SK01~03 (1/40)

ものはないが、時期としては古墳時代後期頃のものか。

土坑 (SK)

番号を付したものは5基あるが、SK04・05はSC02内土坑であり、それ以外について述べる。

SK01 (Fig. 34, PL. 16)

SC02を切る土坑で、平面形は不整橢円形を呈する。規模は南北2.32m、東西1.74m、深さ10cmを測る。残りは悪い。埋土は黒褐色粘質土で、下層に地山ローブロックを多く含む。

出土遺物 (Fig. 35) 古墳時代の土師器・須恵器の細片を少量と鉄滓、黒曜石剝片を各1点含む。

39・40は古墳時代の高坏脚部片である。39の内面はヘラ削り痕、40の内面にはしづり痕が残る。外面色調は39が淡赤橙色、40が橙色、胎土は39が石英粒子を多く含み、40は石英微粒を若干含む。

SK02 (Fig. 34, PL. 16)

2. 第141次調査

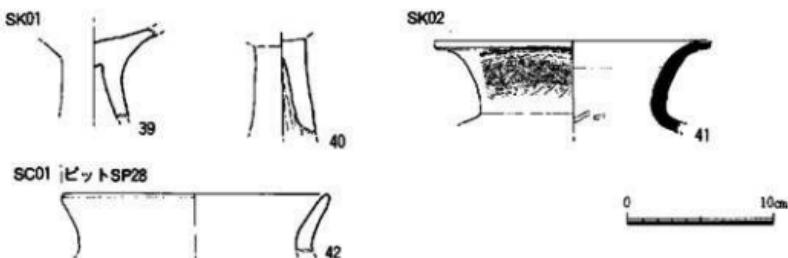


Fig. 35 SK01・02、ピット出土遺物 (1/4)

調査区中央で検出した略方形の土坑。規模は $0.72 \times 0.74\text{m}$ 、深さ6cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。底面は皿状に凹む。

出土遺物 (Fig. 35, PL. 18) 須恵器片が少量出土している。

41は底面よりやや浮いた状態で出土した。須恵器の壺口縁部1/4片で、復元口径18.8cm強を測る。口縁外側に輪描波状文が入る。外面色調は明青灰色、胎土は精良。

SK03 (Fig. 34)

不整円形の浅い土坑で、規模は東西長1.0m、南北幅0.92m深さ18cmを測る。床面は凹凸が激しい。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 少量の生焼けの須恵器・土師器片が出土している。古墳時代後期か。

ピット出土遺物 (Fig. 36, PL. 17)

黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色の埋土のピットがあった。時期差を表わすものであろう。遺物の出土は少なく、図示出来るものも少なかった。

42はSC01主柱穴P3 (SP28) 出土。土師器の壺口縁部1/8片で、復元口径は18cm強を測る。器壁は荒れ、調整は不明。外面色調は浅黄橙色、胎土に石英微粒を多く含む。46は軽石製の浮子でSP25出土。全長3.0cm、重さ約5gを測る。色調は黒褐色を呈す。半分を欠失する。

3) 小結

今回の調査区は狭小な調査面積の為、周辺の調査成果を踏まえて、若干のまとめとしたい。当調査区で検出した遺構の時期は主に古墳時代に集約出来るが、大きく前期と中期・後期の3時期の遺構がある。

前期についてはSC02住居址が該当する。この住居址は多量の出土遺物を伴っていたが、これらの上器群は古墳時代前期初頭の特徴を持つものであり、前期初頭の時期とする。該期の住

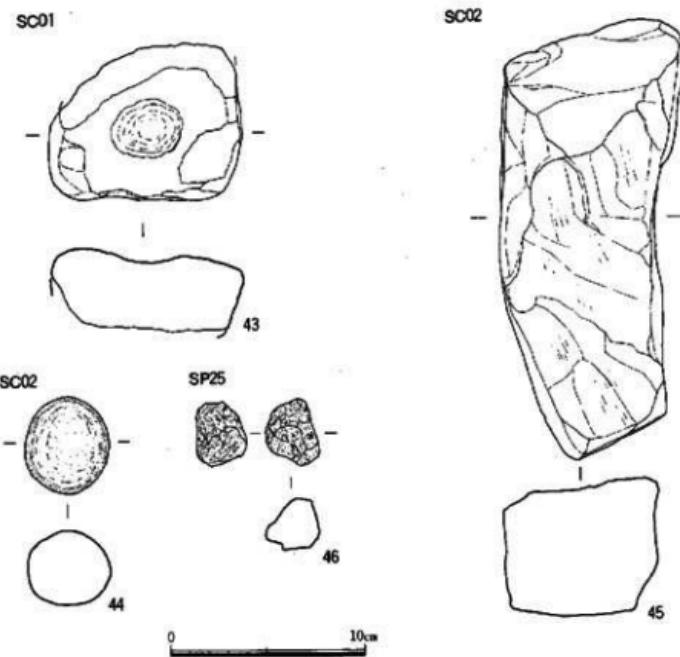


Fig. 36 SC01・02、ピット出土遺物 (1/3)

居址は第133次地区や第95次地区、第107次地区などでも検出されており、いずれも出入口は南東側に作られている。

中期のものはSC04・SK02であり、5世紀代のものである。SC04は壺の口縁の形態や、丸味の強い厚手の器壁、小型丸底壺の形態から5世紀前半位のもの。住居の形態は恐らく方形で4本主柱のものであろう。SK02出土の須恵器は、古式の須恵器の形態を持つものである。口縁部が外反し、口縁端部を上方につまみだす形態から陶邑編年でいうI型式の4段階から5段階でTK23型式に相当し、5世紀後半後葉位のものか。SC01については大壺5が内面のスリケン調整や外面平行叩きを加えるI型式の古段階の様相を備えており、また壺身1などは立上りが比較的高く内頸具合が小さいという形態や、口縁部片2・脚部片3の形態がいずれの古式の様相を持つものから5世紀代でSC04よりは新しくSK02よりは古い時期であろうか。SC01は住居址の中で一番新しく須恵の壺蓋の形態が小田富士雄氏による九州編年のⅢb期に相当する事から6世紀後半位であろう。

2. 第141次調査

掘立柱建物 SB01は図示出来る遺物がないので、時期は決めかねるが、第146次調査区の横列や第31次調査区の6世紀中頃の住居址とほぼ平行するような方向関係にあり、それらとほぼ同様の時期の可能性がある。

当地点では有田台地上で通常見られる中世時期の造構は確認出来なかった。有田台地最高所を方形の郭状巡る空堀状造構の外側にあたるためかも知れない。

— 小田部地区の調査 —

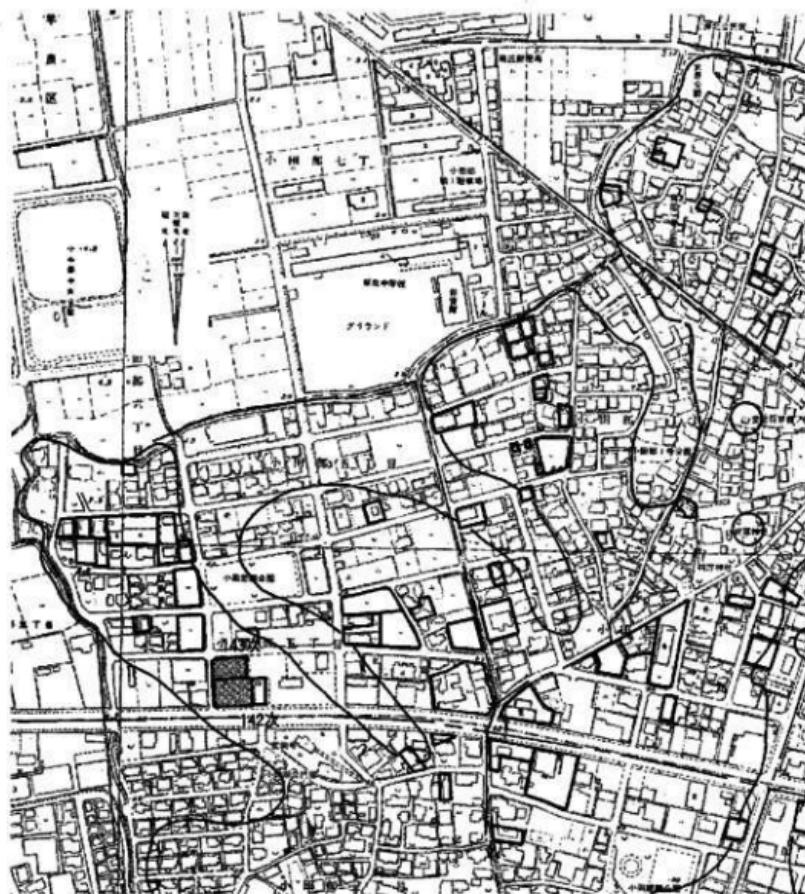


Fig. 37 小田部地区調査地点位置図 (1/5,000)

3. 第142・143次調査区（調査番号8836）

1) 調査区の地形と概要

調査区は早良区小田部5丁目72番地他に所在する。第142次調査区は南側、第143次調査区は北側である。当地点は北へ大きく八手状に拡がる有田・小田部台地の最も西寄りの台地の尾根上に立地する。現況は畠地であった。

第142次調査区と第143次調査区は申請者が異なるが、同一の開発事業のため、一連の調査と見做して発掘調査を実施した。調査は昭和63年9月12日～11月25日迄行い、調査面積は申請面積1363m²（第142次795m²、第143次568m²）中1353m²である。排土は申請者の協力を得て場外持ち出しで調査を実施した。

調査区周辺は小田部地区では比較的調査が多く行われており、これまでの調査から弥生時代前期末から後期前半にかけての壇棺墓群や集落址、古墳時代全般に亘る集落址、古代の大型建物群などや、中世末の塹状遺構などが、検出されている。

今回の調査では、遺構は表土（耕作土）30～50cm下の褐色鳥居ローム土上面で検出した。遺構面は南西から北東側に緩やかに傾斜し、標高は7～6mを測る。主な遺構は弥生時代中期前半の円形竪穴住居址2棟、貯蔵穴1基、古墳時代竪穴住居址13棟、壠立柱建物4棟、土坑17基、溝8条、中世末期の塹1条、近世～近代の畝状遺構、溜池状遺構などである。溜池状遺構は調査区北東境界地にあり、ちょうど、谷部に位置する所にあり、護岸用の杭などもあった。

出土遺物は弥生時代から近世にかけてのものがある。総量としてコンテナ28箱程である。特に中世末の塹からは古代の瓦類や越州窑青磁などが出土しており、興味が持たれるところである。

2) 遺構と遺物

竪穴住居址（SC）

番号を付したのは16番迄だが、住居址と確定したのは15棟。SC12は欠番である。

SC01・02 (Fig. 39・40, PL. 21・22)

南側境界地にかかり、南半分は国道工事により消滅し、東側はSD05にきられている。SC01・02は建て替え重複状況を示すもので、新しい時期のものがSC01、SC01床面下で検出した古期のものがSC02である。SC01は長方形プランで長辺が5.9m、短辺が4.5mを測る。SC02は方形に近くなり、長辺が4.85m、短辺が4.5m以上を測る。床面迄の深さはSC01で14～20cm、SC02はSC01床面より更に20cm程深くなる。SC01の埋土は暗灰褐色土が主体で、地山ローム土や灰白色粘土ブロックを少量含み、SC02の埋土は暗褐色粘質土に灰白色粘土ブロックや地山

ローム土ブロックを多く混入する。主柱はいずれも4本と考えられ、SC01についてはP1~3、SC02についてはP4~6が相当する。周壁溝はSC01では壁下に確認したが、SC02についてはSC01と北壁・東壁が共有する事により不明。竈はいずれの住居も西壁に灰白色粘土で造り付けられている。SC01は西壁中央よりやや南寄り、SC02はほぼ中央にあり、その規模はSC01で幅1.1m、長さ約0.8m、SC02は幅1m、長さ0.9mをはかる。SC01の竈内の焚き口には焼土面が残る。またSC02の竈内には支脚に用いられたか土師器の高坏16が伏せた形で据えられており、竈の西側には張り出したような揮道状の焼土面があった。

出土遺物 (Fig. 41~42, PL. 35) 当初は2棟の重複に気付かなかった為、上層をSC01として取り上げたが、SC02を検出した後はそれぞれ分けて取り上げた為、各住居の遺物が混在している可能性もある。遺物としては弥生土器や土師器・須恵器片が多量に出土した。

1~10はSC01出土。1~7は須恵器。1~2は壺身で口縁の立ち上りの内傾具合が小さく高い。1は1/4片で復元口径11.2cm、2は小片である。調整はいずれもナデ。3~5は壺蓋の小片。3・4は天井部と口縁部の境に明瞭な段と、口唇内面にも明瞭な段がつく。調整はナデで、天井部は回転ヘラ削り。胎土はいずれも砂粒をあまり含まず精良。6は長頸の壺口縁部1/6片。復元口径22.4cmを測る。11頸部中央には3条の浅い凹線とそれを抉んで上下3段、下2段の構造波状文を施す。外面色調は黒灰色で、胎土は石英粒を多く含む。7は赤焼けの高坏壺部小片。内外面ナデ。胎土に石英粗粒を含む。8~10は土師器。8は壺口縁部1/4片で、竈南側で検出した。復元口径19.3cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。色調は黄橙色で、胎土は粗砂を多く含む。焼きはやや甘い。9は壺の口縁部小片で、復元口径は不正確である。磨滅がひどく調整は不明。外面色調はにぶい褐色で、胎土に粗砂粒の外、赤色粒子をわずかに含む。10は瓶の底部片。径5mm程の10個の蒸気孔がある。外面色調は橙色、粗砂を多く含む。

11~22はSC02確認部分からの出土である。11~15は須恵器。11~13は埋土中出土の壺身。11は口縁1/6片で、復元口径12.8cmを測る。外面ナデで、外底は回転ヘラ削り。外面色調は黒灰色、胎土は細砂を含む。12は1/6片で、立ち上りの内傾具合は弱い。口径は推定で12cmを測る。内外面ナデで、外面色調は青灰色、胎土に細粒と黒色粒子を含む。13は口縁部細片で、胎土は精良。14・15は壺蓋。14は埋土上出で1/2片。復元口径14.2cm、器高4.4cmを測る。口縁内面に段を持つ。天井部2/3片は回転ヘラ削り、その他のはナデ。ろくろ回転は時計回り。胎土に石英・長石などの粗砂粒、黒色粒子を多く混入。15は灰白色粘土出土。14とほぼ同形態の1/6片で、復元口径14.4cmを測る。胎土は精良細砂粒を多く含む。16~21は土師器。16はほぼ完形の高坏で、竈内出土。支脚として用いられたか火力を受けており、器表は荒れている。形態は須恵器に似る。口径は12.3cm、復元脚径9.4cm、器高7.5cmを測る。外面色調はにぶい橙色、胎土は石英などの粗砂を多く混入。17~19は壺。17は小型壺の口縁部1/3片。復元で10cmを測る。かすかに外面刷毛が残り、内外面ナデ。18は竈粘土中出土の底部片で、外面は刷毛、

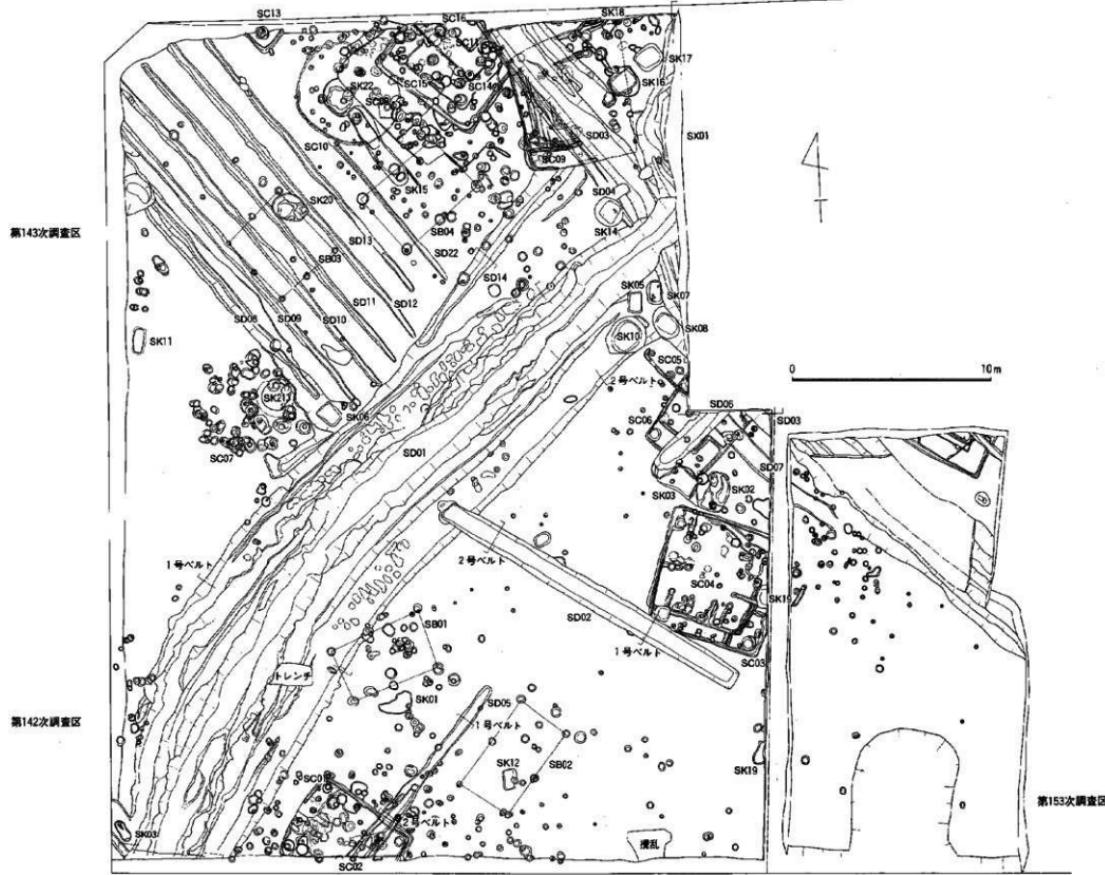


Fig. 38 第142・143次調査遺構配置図 (1/200)

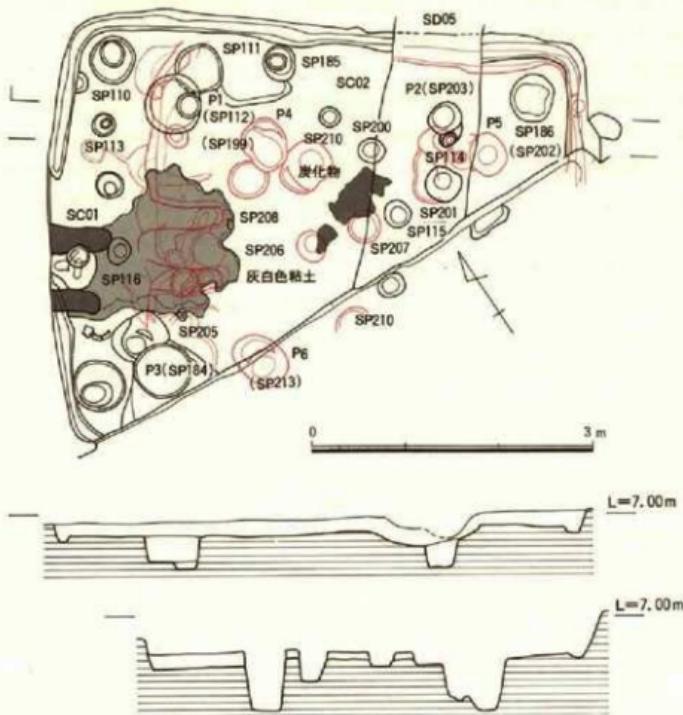


Fig. 39 SC01・02 (1/60)

内面ヘラ削り。19は埋土出土の中型壺底部片。外面刷毛、内面ヘラ削り。外面色調は17がぶい橙色、18は明黄褐色で19が浅黄橙色で、胎土は17が細砂粒を含み、18・19が $\leq 5\text{ mm}$ 以下の粗砂粒を多く含み、19は赤色粒子も含む。20は鉢1/2片で、復元口径12.2cm、器高11.0cmを測る。器壁は荒れるが、外面刷毛、内面ナデ。外面色調は2次の加熱を受けたのか、にぶい赤褐色から黄橙色を呈し、胎土に石英などの粗砂を多く含み、焼成はもろい。21は高坏壺部片。口径17cmを測る。器壁は磨滅し調整不明。外面色調は橙色、胎土に石英と赤色粒子を含む。

22はSC02北西側埋土中から出土した滑石製白玉。23は焚口周辺から出土。法量は22が直径5.5mm、孔径2mm、厚さ2mm、23が直径6mm、孔径2.5mm、厚さ4mmを測る。

3. 第142・143次調査

51は住居址内ピットSP176で出土した棒状の磨石。上下両面に磨耗痕が残る。長さ8.5cm、幅3.7cm、厚さ2.6cmを測り、石質は玄武岩である。

SC03・04 (Fig. 43, PL. 22・24)

調査区南西境界で検出した住居址。南側コーナ部はSD02に、東側は境界地にかかるが、平面形態はほぼ方形を呈す。2棟の住居址が重複しており、立て替え状況を示している。遺構検出状況から新期のものをSC03、古期のものをSC04とする。遺存状況は非常に悪く、壁はほとんど残っていない。住居址の確認規模はSC03が東西・南北長共6.2m、SC04が東西長5.35m、南北長5.45mを測り、SC03がSC04より南・東側に0.8~1m程張り出して大きくなる。主柱はそれぞれ4本でSC03がP1~4、SC04がP5~8を位置関係、規模、深さから見て妥当と考える。SC03についてはP1~4の外側四隅に直径60~80cm、深さ50~60cmを測る大型の円形ピットがあり、これも建物の柱穴としてよいのかも知れない。明瞭な炉はないが、床面には焼土面が6ヶ所ある。明瞭な貼床は確認出来なかった。腰溝は腰下を全周し、北側腰溝はSC03・04共有し、間仕切りの溝も残る。

東壁中央部には屋内土坑SK09がある。不整長方形で、長径1.2m、短径0.65m、深さ25cmを測るが、遺物の出土具合や、底面の形態から出入口用の土坑とは考えにくい。

出土遺物 (Fig. 42・44~46, PL. 35・36) 遺構の残りが悪い為、遺物は主に床面から出土した。古墳時代の土師器・須恵器片・叩石などの石器、滑石製玉類などである。住居址は重複しているのでSC03・04を一括して報告する。

28~30は須恵器。28・29は壺。28は口縁部1/2片で、復元口径21.8cmを測る。頭部から肩にかけてかき目に入る。内面は同心円状のあて具痕が残る。29は1/8片で、復元口径23cmを測る。外面平行叩きで口頭部にはかき目を加える。外面色調は28が黒灰色、29が暗灰色を呈し、いずれも自然釉がかかる。胎土にいずれも細砂粒を含む。30は胴部1/2片。胴部上半に直径1.3cmの円孔がある。内外面ナデ底部は削りのちナデで。ヘラ記号がある。色調は黒灰色を呈し、胎土は細砂を若干含むが精良。31~41は土師器。31は口が大きく開く小型の鉢1/3片。復元口径8.8cm、器高5.0cmを測る。器壁は磨滅し調整不明。32は軟質土器の平底の鉢底部1/5片。復元底径6cmを測る。外面は黒色を呈し、表面は剥落が著しい。5mm内の粗砂粒を多く含む。33~37は壺。33は口縁部を消失した壺で、残存器高22.3cm、最大胴径24.8cmを測る。内面は削りで、外面は表面がやや磨滅するが、刷毛目が残り、外面色調は黄褐色~黒褐色で、胎土に赤色粒子を含む。34は頭部が縮まり口縁が大きく開く器形。1/6で復元口径16.4cmを測る。調整は器表が荒れ不明。外面色調はにぶい橙色、胎土に粗砂と赤色粒子を多く含む。35~36は胴頭部1/6片。いずれも外面は刷毛、色調は浅黄褐色。37は中型壺の口縁部1/4片。復元口径21cmを測る。口縁はやや複合口縁気味である。外面色調は明黄褐色、3mm以下の砂粒を含む。38~41高杯。38は坏部1/2片で、口径20.6cmを測る。器壁は磨滅が著しく調整不明。39は坏底部片で、全体に磨滅が



ひどく調整不明。40・41は脚部片。40はチューリップ状に湾曲して開く器形。41は1/4片で外へ大きく開く器形である。復元脚径は40が11cm、41が11.2cmを測る。調整は40が外面刷毛、41が内面ヘラ削り、外面色調は38~40が橙色、41が淡赤橙色を呈す。

42~50はSC03・04内ピット出土。42はSP78出土。土師器の高坏部片で、口径は17.5cmを測る。坏部の底部と口縁部に段が付く。器壁は剥落が著しいが、外面は刷毛目が残る。色調は赤橙色で、胎土に粗砂粒を含む。43はSP85出土の土師器の高坏脚部1/2片。復元脚径12.8cm、大きく開く形態。外面色調は橙色、胎土に赤色粒子を少量含む。44はSP87出土の壺か壺の口縁部1/6片。復元口径12.6cm。全体に磨滅が著しいが、外面色調は橙色、胎土は細砂粒と赤色粒子を含む。45~47はSP89出土。45・46は高坏部片。45は1/4片で復元口径19.3cm、46は2/3片で復元口径18.4cmを測る。器表面はいずれも磨滅がひどいが、45は外面刷毛目が残る。外面色調は45が暗褐色、46が赤橙色、45の胎土は金雲母・赤色粒子をわずかに含む。47はミニ

3. 第142・143次調査

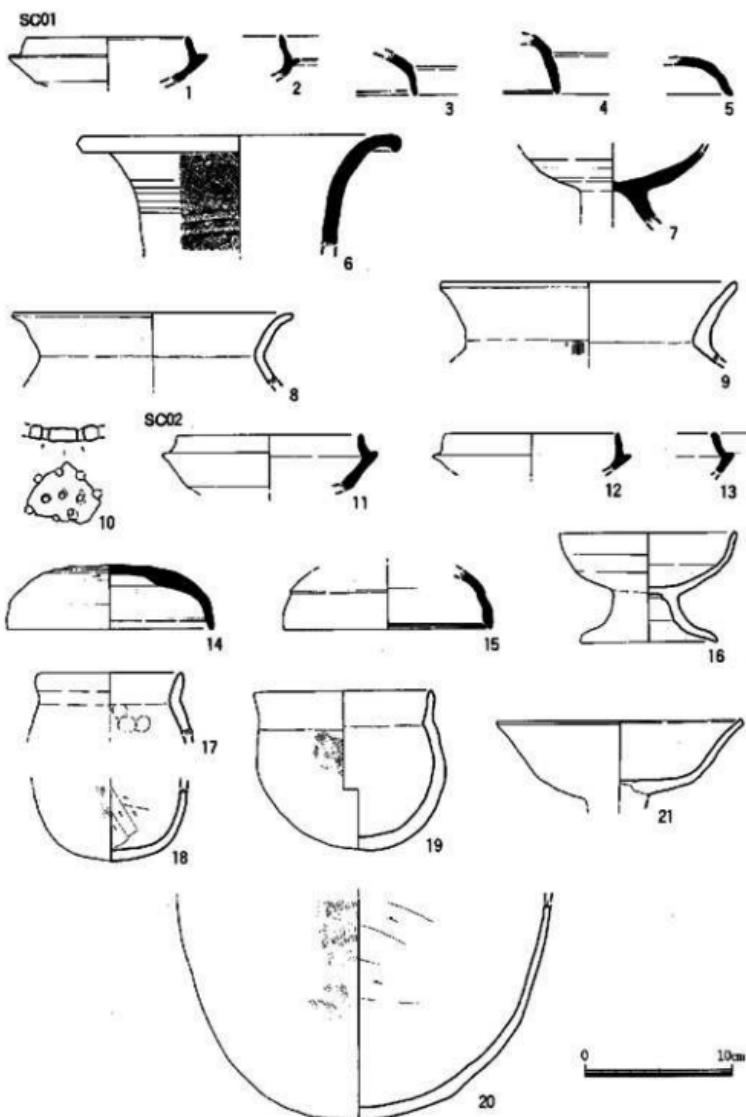


Fig. 41 SC01・02出土遺物 (1/4)

チュア土器で口径2.5cm、器高2.7cmを測る。色調は明褐色で、胎土に砂粒を多く含む。48はSP124出土。台付鉢の脚台部か。脚径10.5cmを測る。器壁は磨滅し調整は不明だが、指おさえ痕が残る。色調は浅黄褐色で、胎土は粗砂粒を多く含む。49はSP189出土。楕円の鉢3/4片で、復元口径8cm、器高5.9cmを測る。内外面指おさえ痕が明瞭に残る。外面色調はにぶい橙色から黒褐色を呈し、胎土に3mm以下の砂粒・赤色粒子を含む。50はSC04間仕切り溝内出土。ミニチュア土器の鉢で完形。口径2.4~2.6cmを測る。色調は明褐色で、胎土は砂粒をわずかに含む。

52・53は凹石。52はSP79出土。石質は花崗岩で、直徑7.7×8.2cm、厚さ3.4cmを測る。上下両面の中央が凹む。53はSP89出土。長さ10.2cm、幅8.9cm、厚さ2.9cmを測る。玄武岩の風化の著しい剥片を内利用したもの。上下両面と左側邊が凹んでおり、使用面か。54はSP81出土。紙石で長さ7.8cm、幅6.1cm、厚さ3.3cmを測る。上面が使用擦痕と凹面がある。石質は砂岩。55はSP81出土。小型の磨製石斧の刃部破損品。石質は玄武岩。刃部幅4.5cm、厚さ2.1cmを測る。混入品である。

24~26は滑石製の双孔の有孔円板。24はSC03出土か、直徑1.2×1.0cm、厚さ2mm、孔径1~2mmを測る。25はSP181出土。直徑2cm、厚さ4mm、孔径3~5mmを測る。26はSC03内SK04出土。直徑2.8~3.1cm、厚さ3~4mm、孔径5~6mmを測る。27はSP81出土の大型の凹基の黒曜石の石鏡。鏡身長3.1cm、残存幅2cmを測る。59はSC03床面出土。長方形を呈す叩石で、全長13cm、最大幅5.5cm、厚さ3.8cmを測る。砂岩系の石材を用い。上下左右側面に敲打痕と擦痕が残る。

57~58は屋内土坑SK09出土。57は上部器の壺口縁部片。口径15.5cmを測る。器壁は磨滅がひどく調整は不明だが、内面指おさえ痕が残る。外面色調は橙色で、胎土は砂粒を多く含む。58はコップ形の壺ではほぼ完形。把手がついていたと思われる接合部痕が残る。口径6.5cm、底径4cm、器高8cmを測る。外面色調は黄褐色で、胎土に細砂粒・赤色粒子を多く含む。

SC05 (Fig. 47)

調査区東側境界、SC06の北側で検出した。周壁溝が一部残るのみで全体の形状は判らない。溝の確認長は3.1mを測る。出土遺物は土師器の細片が2点出土しているのみである。

SC06 (Fig. 47, PL. 24)

SC05南側、SD06・07に切られる住居址。一部が境界にかかり全容は不明だが、長方形プランで規模は長軸方向で4.3m以上、短軸方向で4mを測る。南西壁中央には、出入口と思われる屋内土坑SK13がある。このSK13は不定形を呈し、規模は0.65×0.65m、深さ36cmを測り、北西側が一段深くなる。このSK13を挟んで左側に幅1m余のL字形を呈すベッド状の高まりがあり、本来は両側に相対して存在すると考えられる。主柱は2本で1つはP1が相当する。床面は明確な貼床は確認出来なかった。

出土遺物 (Fig. 48, PL. 36) 埋土中から多量の土師器片が出土している。青磁片が1点あるが混入品である。

60はSK13左側ベッド下周溝上で検出した。土師器の甕で布留式の形態を持つ口縁部の1/6片。復元口径19.6cmを測る。外面は刷毛で上半部に波状の沈線が巡る。外面色調は橙色、胎土に細砂を含む。他に別個体の甕の口縁部片がある。

61は磨石もしくは凹石。扁平な梢円形で、長径11.2cm、短径7.1cm、厚さ2.4cmを測る。上下両面は擦りで、上面に叩石に用いた使用痕の凹みが残る。側面には敲打調整痕が残る。石質はにぶい黄褐色の砂岩。

SC07 (Fig. 49, PL. 23)

調査区西側中央部で検出したが、著しい削平を受けており、円形に巡る柱穴群しか検出出来ていない。恐らく弥生中期頃の円形住居址であろう。柱穴群は切り合関係の組み合わせから3群にまとめる事が出来、3回の建て替えが考える事が出来る。柱穴群の中心部には直径0.6~0.7mを測る大型のピットSP107・108があり、これらの住居址の中央ピットと考える事が出来る。これらのピットを中心に、円形に巡る柱穴群の直径を測ると約4.2mを測り、円形住居址の直径は復元で約6m強と推測する。3群の柱穴群の主柱は各々6本であり、深さは40~80cmと深くしっかりとしている。中央ピットには柱痕跡が残っていた。

出土遺物 各ピットから土器。黒曜石の剝片が少量出土するが、岡化出来るものはない。

SC08 (Fig. 50, PL. 26)

調査区北側で検出したSC10・11を切る方形の住居址。造存状況は悪く壁高は最大で10cm位しかない。規模は切り合部分の範囲がはっきりしない為正確でないが、約4.5m×4.7m余りである。主柱は1本でP1~4が相当する。北壁中央付近を中心に竈の残れと思われる灰白色粘土・炭化物・焼土塊が分布しており、竈内の焚口部の焼上面が残っていた。また住居址中央には65×45cmの不定形の焼土面があった。

出土遺物 (Fig. 51~52, PL. 36・37) 古墳時代後期の土師器・須恵器片が出土するが、弥生土器・陶器・染付などがわずかに混入する。

62~67は須恵器。62・63は壺蓋で1/6片と1/2片で

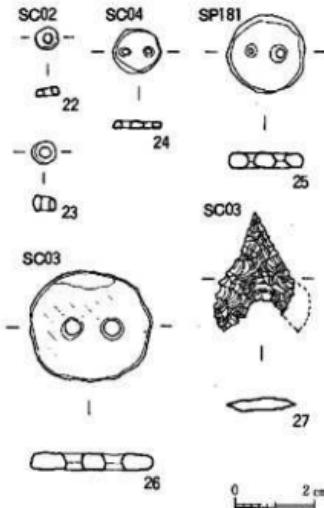


Fig. 42 各住居址出土遺物 (2/3)

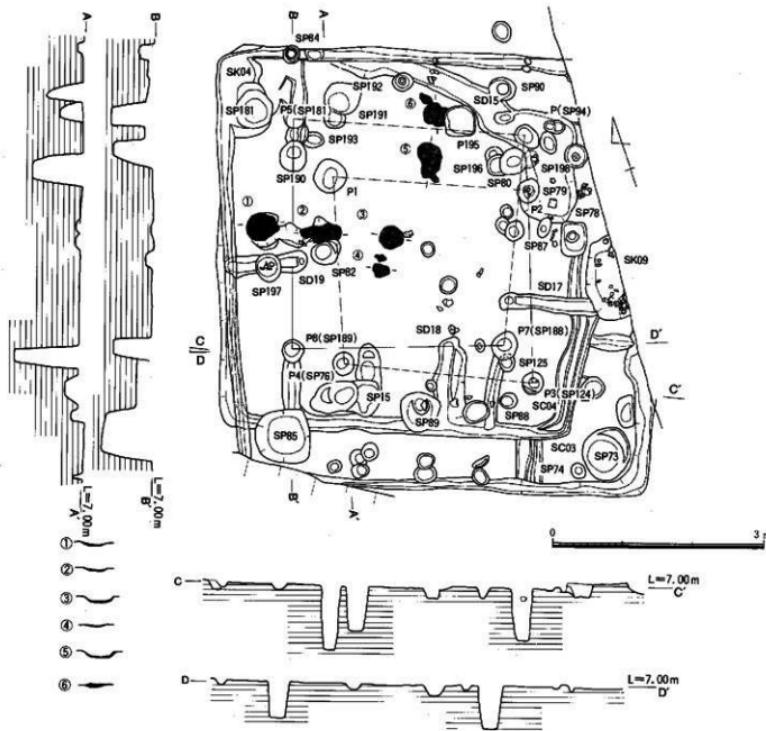


Fig. 43 SC03 · 04 (1/60)

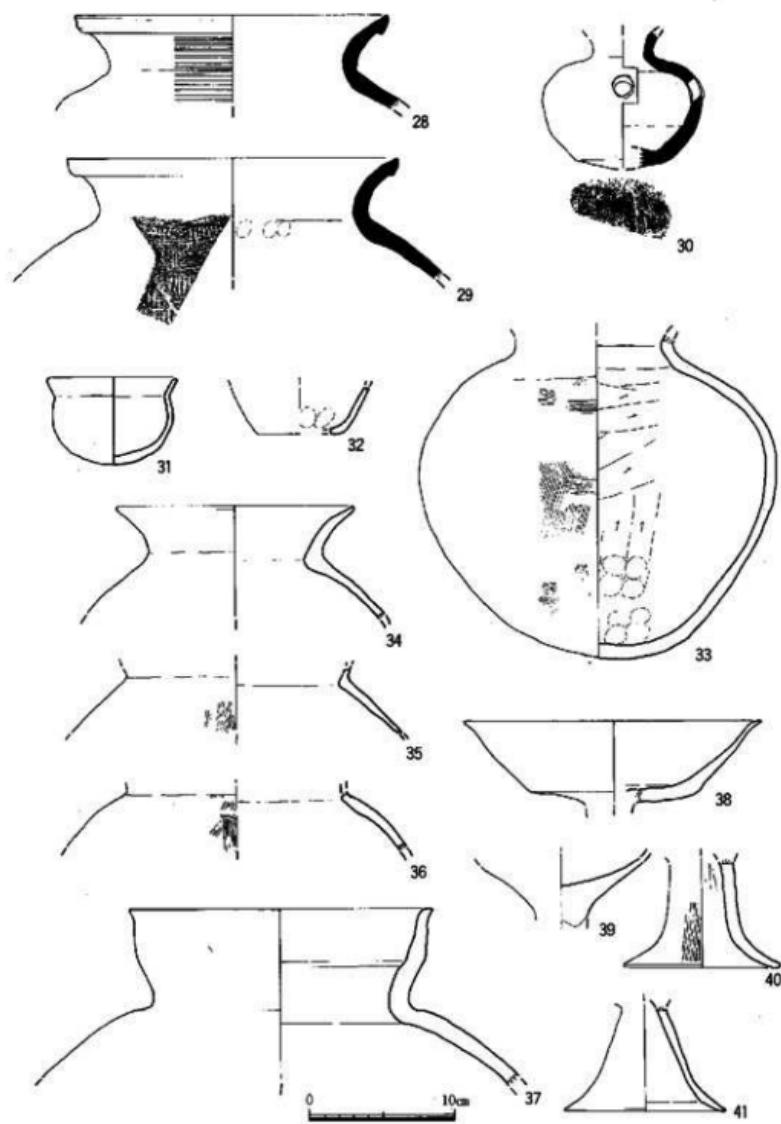


Fig. 44 SC03・04出土遺物 1 (1/4)

3. 第142・143次調査

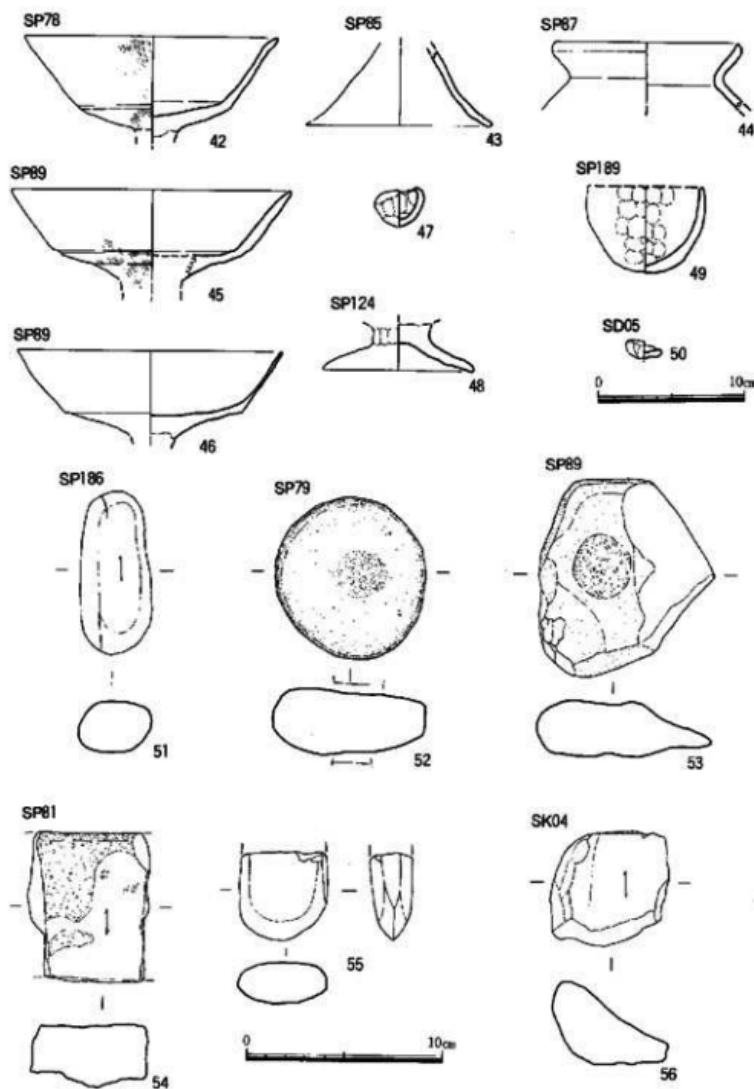


Fig. 45 SC03・04出土遺物 2 (1/3・1/4)

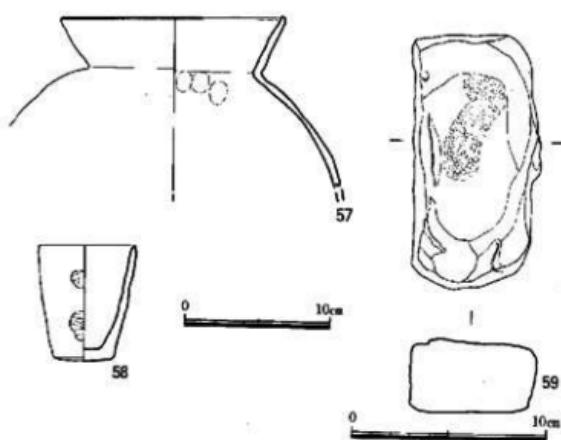


Fig. 46 SC03内・SK09出土遺物 (1/3・1/4)

ある。復元口径は62が12.4cm、62は天井部と口縁部に軽い段を有する。63の天井部回転ヘラ削りで、ろくろ回転は時計回り。ヘラ記号がある。いずれも胎土は精良。64～67は坏身。64は2/3片で、復元口径12.4cm、器高4.3cmを測る。底部は時計回りの回転ヘラ削り。65は竈粘土周辺出土。口縁部1/6片で、復元口径10.6cmを測る。66は

1/3片で、復元口径12cmを測る。67は細片である。いずれもⅢ bからⅣ a期位のものか。68～71は土師器の甕。68は小型で、口縁部1/6片で復元口径14cmを測る。頸部の縮りが緩く、外へ開く形態。器壁の磨滅がひどく調整は不明。色調は橙色で砂粒を多く含む。69は比較的頸部がしまる1/4片。器壁は磨滅し調整は不明。70・71は胴部片で、外面木目直交の叩きで、内面に平行叩き状の当其痕がわずかに残る。72は把手で、長さ3.5cm、径1.5～1.8cmを測る。全面指おさえ痕が残る。胎土は68が砂粒を多く含むが、他は比較的精良。69・70・72は床面出土、68・71は竈粘土周辺出土。

73～77は石器である。73は床面出土の砥石で全長12.3cm、厚さ3.8cmを測る。暗灰色の細粒砂岩で木目が細かく、仕上げ砥石か。各縁辺は緻密に擦られており、金属利器を研いだものか。74は床面出土の卵形の扁平な門石。石質は灰白色の玄武岩で、上下両面に凹んだ使用痕が残る。全長16cm、最大幅9.6cm、厚さ4.4cmを測る。75は両端が丸っこい長方形状の断面が梢円形を呈する磨石。石質は玄武岩で、全面擦られ、長さ8.6cm、厚さ2.3cmを測る。76は丸石で長径3.9cm、短径3.4cmを測る。全面擦りで石質は青灰色の安山岩か。77は柱状片刃石斧の砥石か。明灰褐色の頁岩質で全長6.6cm、最大幅2cm、厚さ3.2cmを測る。97は小玉で埋土中出土。色調は黒色で軽く素材は不明。直径5mm、厚さ4mm、孔径2mmを測る。

SC09 (Fig. 53, PL. 25)

北東隅で検出した住居址であるが、東側はSD04・03に切られ全容は不明。しかし残存部からやや台形気味の長方形の住居址である。推定規模は南北長6.6m、東西幅5.5m、残存壁高は最

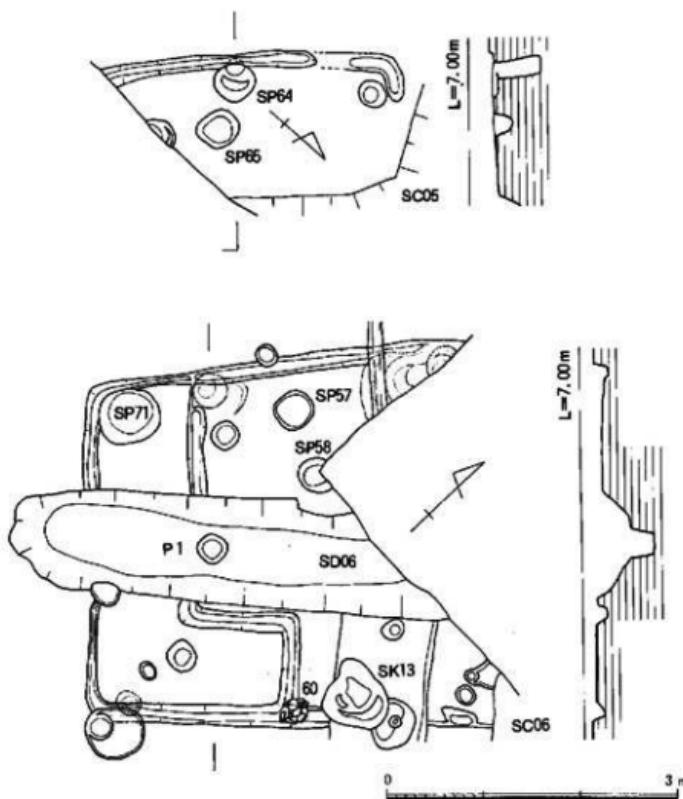


Fig. 47 SC05・06 (1/60)

大で25cm程を測る。壁溝は西側壁下を巡り、西側部分には幅1.1m前後を測る地山粘土を貼り付けたベッド状遺構がある。それを撤去し床面を掘り下げ調査すると小溝などが検出された。当初これらから住居址の重複を考えたが、明確に出来なかった。主柱は2本でP1・P2が相当する。P1・P2間距離は3.7mを測る。明確な炉址は検出出来なかったが、P2寄りに長径25cm程の弱い焼土面が残っている。

出土遺物 (Fig. 54・60, PL. 36・37) 古墳時代の土師器片が出土していたが、須恵器片が若干出土している。これらは混入品である。床面密着のものではなく、残りの良い遺物もない。

78・79は土師器。78は床面出土の皿状の鉢1/6片。復元口径11.4cm、器高3.2cmを測る。全体に磨滅がひどく輪郭不明。色調はにぶい橙色で、胎土に粗砂を混入する。79は上層出土の鉢口縁部1/6片。復元口径は15.6cmを測る。器壁は磨滅がひどいが外面刷毛がかすかに残る。色調はにぶい橙色で、胎土は細砂粒を多く含む。80は上器の細片で竹管文を施す。庄内系の土器であろう。橙色で貼床内より出土。103はSC09内SP264出土、土頭の鐵錐。錐彫れがあるが残存長9.8cm、幅4.1cmを測る。茎部には桜の樹皮のようなものが巻いてある。

SC10 (Fig. 55, PL. 23・24)

143次調査区北側で検出したやや楕円形の堅穴住居址で、SC08・SK15・22に切られる。規模は長径5.4m、短径で4.7mを、壁の残りは8~15cmを測る。床面中央には楕円形を呈す0.55×0.66m、深さ16cmを測る中央土坑があり、その両側には直径30cm前後の1対の対応する円形ピットがある。住居址の主柱は5本で、柱穴掘方埋土は固く締られている。1ヶ所のみ柱穴が2つ重なり、立て替える可能性がある。南西側床面には作業台石が据えられていた。

出土遺物 弥生上器から土師器・須恵器の細片が出土しているが、量は少なく、図示出来る遺物もない。古墳時代の遺物は混入品である。また工作台石は大形の卵形のもので、長径40.5cm、短径27cm、厚さ15cmを測る。上面は使用痕跡なのか凹凸がある。石質は安山岩で灰色を呈す。

SC11・15 (Fig. 50, PL. 26)

SC08床面下で検出した方形の住居址。検出時、2棟の重複が判らず掘り下げた。北壁周辺にある灰白色粘土集中部を精査し、2棟分の竈を検出した事から2棟の切り合いと判断した。一心内側の竈を持つ住居址をSC11、外側のものをSC15とする。SC15は長軸長6m、短軸長5.1m以上、SC11は長軸長4m以上、短軸長3.7mを測る。形態的に見ればSC15がほぼ方形、SC11が長方形に近い。壁の残りはいずれ悪い。竈は北壁中央沿いで検出した。灰白色粘土を用いて造り付けたもので、周辺には灰白色粘土・焼土・炭化物が散布していた。竈の残り悪く基

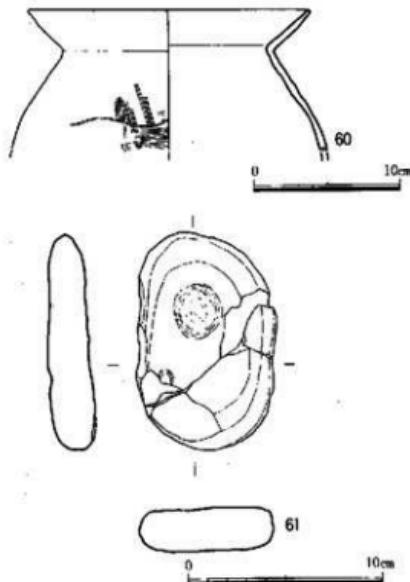


Fig. 48 SC06出土遺物 (1/3・1/4)

3. 第142・143次調査

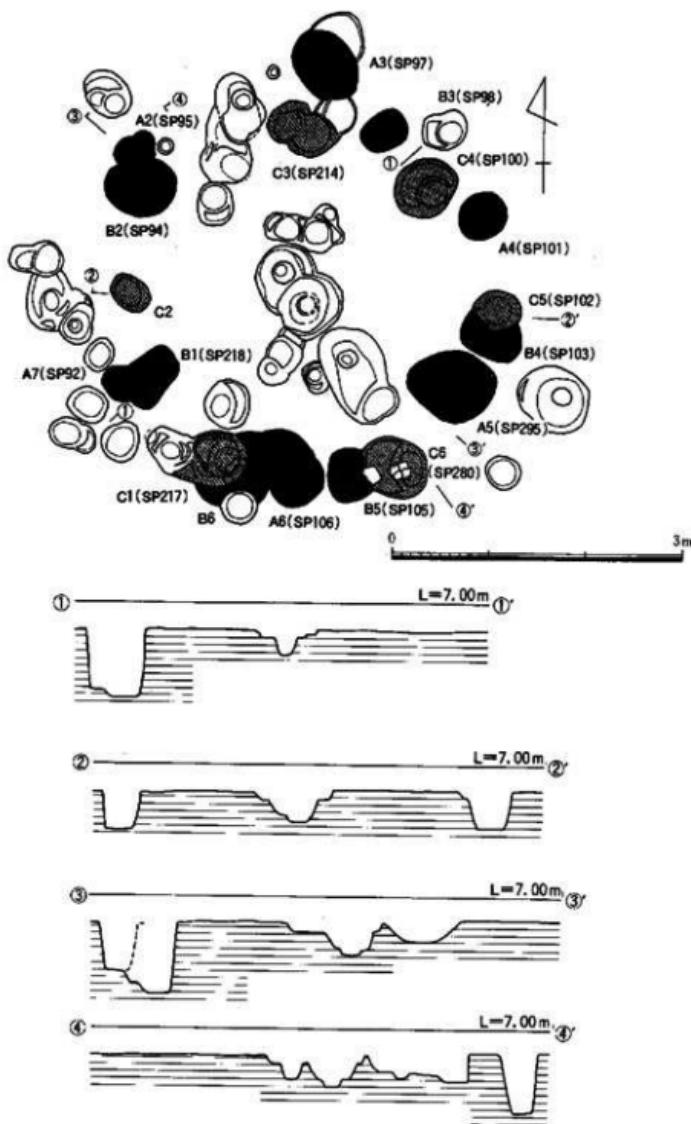


Fig. 49 SC07 (1/60)

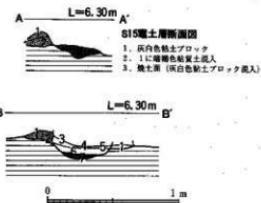
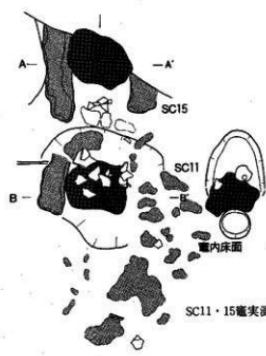
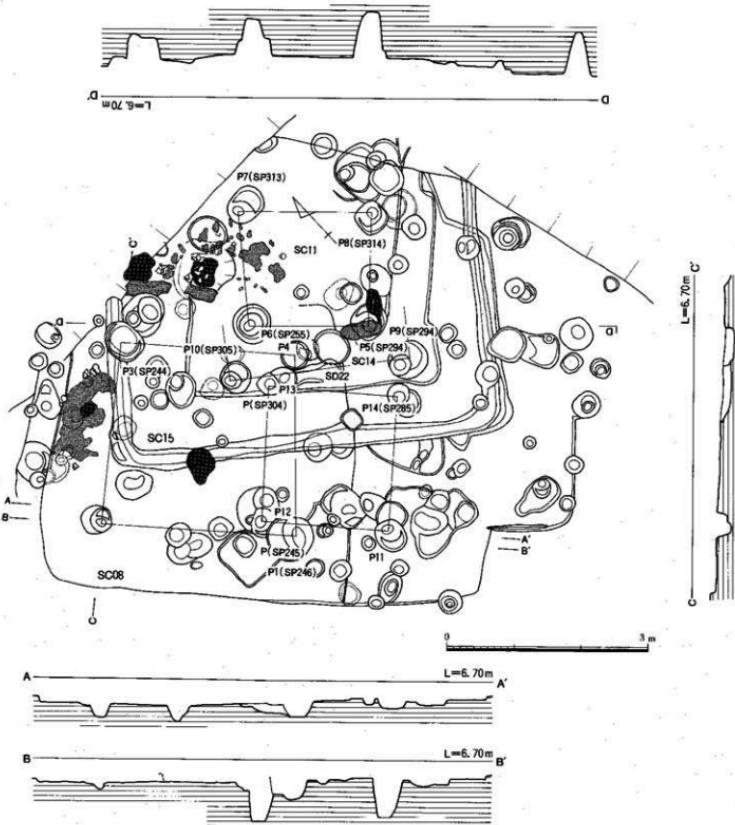


Fig. 50 SC08・11・14・15 (1/60)



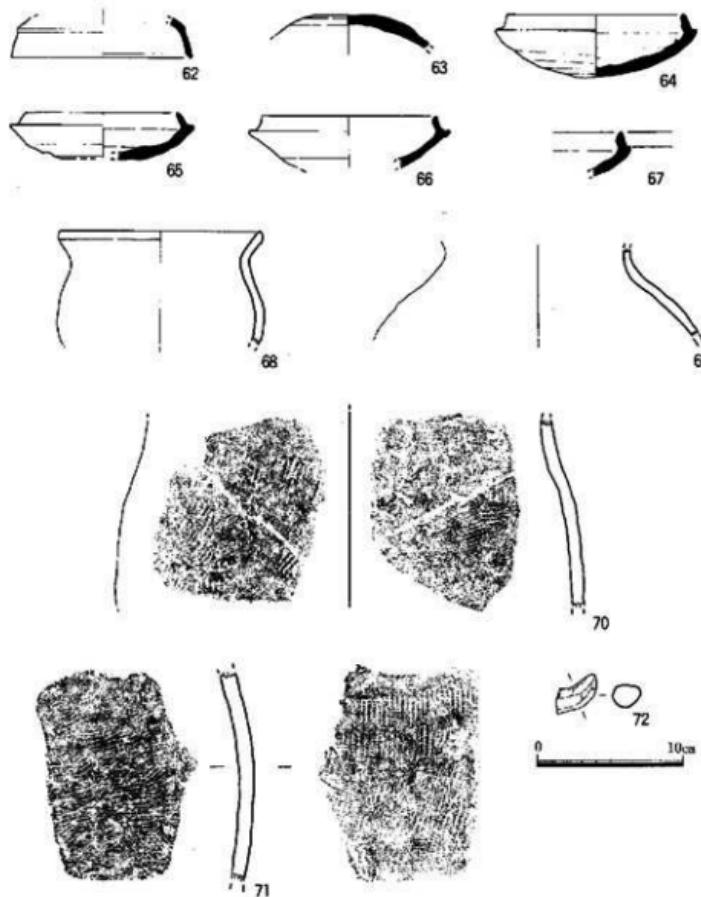


Fig. 51 SC08出土遺物 1 (1/4)

部しか残っていない。SC11は煙道部を突出させたようで、竈内には土師器の高壊脚部片⁸⁵を倒立させた支脚があり、焚口床面は厚く焼けていた。主柱はいずれも4本柱であるが、SC15については西側の2本のみ確認したが、東側の2本については特定出来ていない。またSC15壁下には清が巡っている。また床面はSC16を切る部分を中心に地山ロームを用いて貼床して

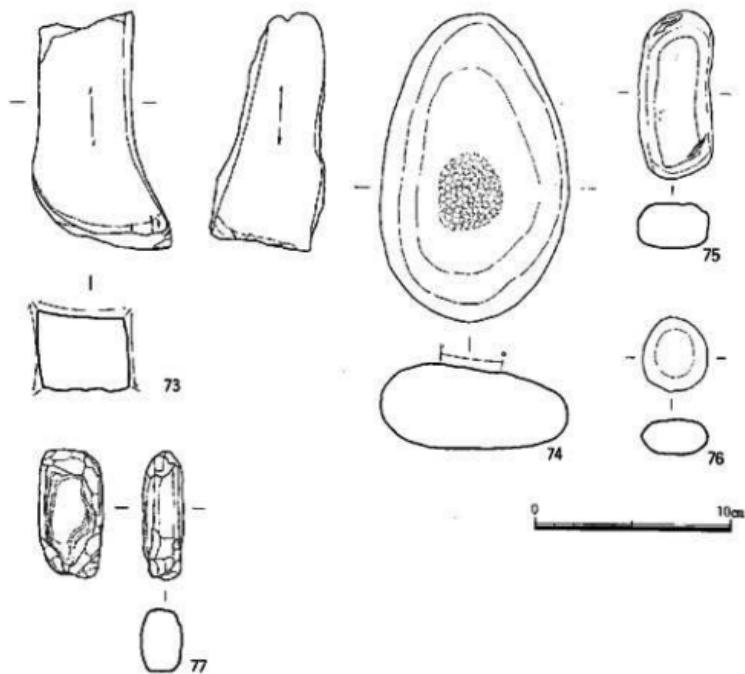


Fig. 52 SC08出土遺物 2 (1/3)

いた。

出土遺物 (Fig. 56・59・60, PL. 36・37) 調査時はSC11として遺物を取り上げたため、SC11・15の遺物は混在しているが、住居の重複を確認してからは分離して取り上げた。遺物は古墳時代後期を中心とする土師器・須恵器が出土している。

83はSC11・15北側出土。須恵器の坏身1/8片。復元口径13.2cmを測る。色調は灰色で胎土は細砂粒を多く含む。84はSC11竈下より出土。土師器の高坏1/4片で、器壁は磨滅が著しく、色調はにぶい橙色で、胎土は1.2mmの砂粒を多く含む。85はSC11竈内の支脚に使用されたもの。上師器の高坏脚部片。復元脚径13.4cmを測る。器壁は磨滅が著しいが、内面に水引き痕が残る。色調は橙色で、胎土は石英・金雲母細粒を多く含む。86は小型壺の口縁部1/4片。復元口径10.2cmを測る。外側はヘラミガキ、内面刷毛のちミガキ。色調は明橙色、胎土は精良。87~89は土師

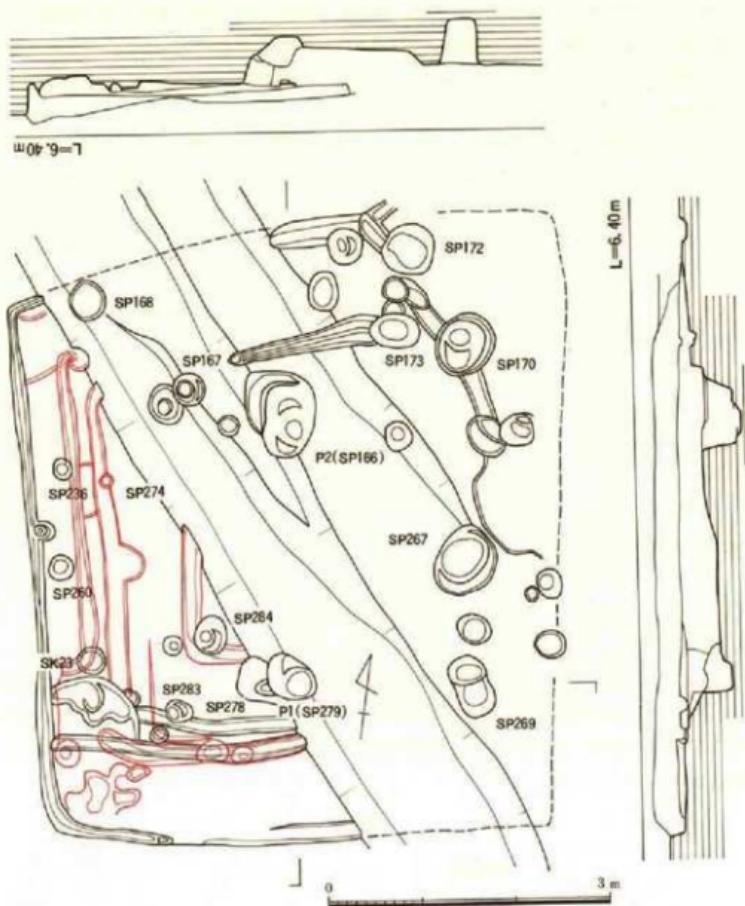


Fig. 53 SC09 (1/60)

3. 第142・143次調査

器の壺。87・89はSC11・15北側埋土中。87は底部片。外面タテ刷毛のちナデ、内面は磨滅するが指おさえ痕が残る。色調はにぶい橙色、胎土1~3mmの砂粒を多く含む。88は頸部1/6片。器壁は磨滅が著しく調整不明。色調はにぶい橙色で、胎土に砂粒を多く含む。89はSC11竈内出土。脚部片で外面タテ刷毛、内面ヘラ削りである。色調は明灰褐色を呈し、胎土は1~4mmの石英粗粒・雲母片を含む。

94~96はSC15出土遺物。94は竈内より出土、土師器の壺1/4片で復元口径11.1cmを測る。外面粗い刷毛、内面はヘラ削り。色調はにぶい橙色で、胎土は最大5mmの砂粒を多く含む。95は床面出土の須恵器壺蓋1/5片。天井部は回転ヘラ削り、その他はナデ。色調は浅黄橙色で、胎土は良いが、焼きはあまり。96は青磁碗か灰釉陶器の碗1/6片、復元口径16.2cmを測る。胎土は灰色で精良。灰オリーブの釉がかかる。これは混入品であろう。

98はSC11より出土した滑石製の平玉か。縁辺を削り仕上で、直径1.0cm、厚さ0.4cm、孔径1mmを測る。暗灰色。

SC13 (Fig. 57, PL. 24)

調査区北側境界地で検出した。コーナー部分のみが調査区にかかっている。廻壁溝とSC03と同様に、四隅のピットを検出している。ピット内には焼土塊と炭化物、まとまった遺物が出土している。

出土遺物 (Fig. 58, PL. 36・37) 上師器片がSP320を中心に出上している。図示しているのはSP320出土のものである。

90は小形丸底壺で口径7.3cm器高6.3cmを測る。器壁は磨滅するが、外面には指おさえ痕が、内面にはヘラ削り痕が残る。外面黒斑があるが淡灰橙色を呈す。胎土は粗く雲母片を含む。91は壺か壺の頸部片。器壁の磨滅はひどく調整不明。色調は明淡橙色で、胎土は粗砂を多く含む。92・93は高壺の脚部片。92は脚径11.5cmを測る。内面にしばり痕が残る。外面色調は淡灰橙色で黒斑がある。胎土は粗砂を多く含む。93は接合部片。全体に磨滅がひどいが、しばり痕が残る。色調は淡橙色で、砂粒を多く含む。99は滑石製白玉で灰色を呈し、直径4mm、厚さ3mmを測る側面は削りでやや影む。

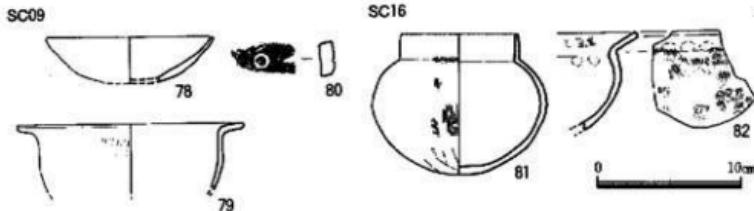


Fig. 54 SC09・16出土遺物 (1/4)

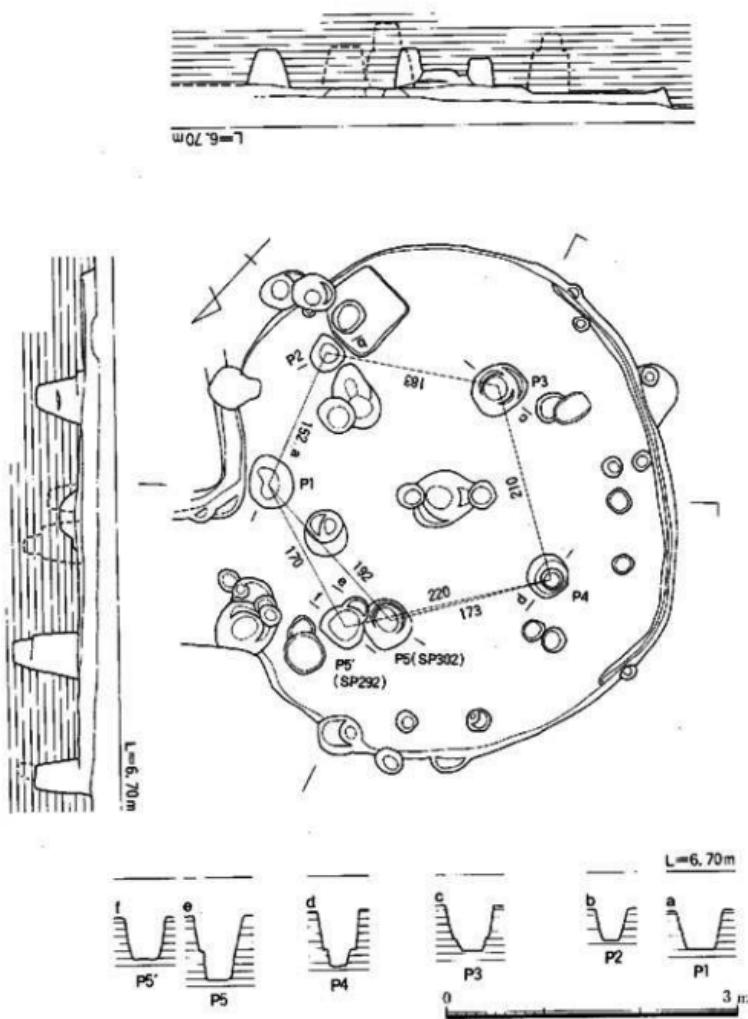


Fig. 55 SC10 (1/60)

3. 第142・143次調査

SC14 (Fig. 50)

SC11・15上面で検出した埴粘土と焼土面から古墳時代後期の甕を持つ住居址であろうと推定した。しかし削平がひどい為か全体のプランと主柱は確定出来なかった。SC08・11・15など甕を持つ住居址の甕の位置関係から、この甕が北側として南側に展開する方形の住居址であろう。

出土遺物 他造構と重複している為、明瞭な遺物はないが、埴粘土から上師器口縁部片が1点出土している。

SC16 (Fig. 57, PL. 25)

SC11・15床面下で検出した古墳時代前期の住居址である。住居址の大部分は北側境界地にかかるが、形態は長方形プランであろう。確認規模は長辺が4m以上、短边が2.5m以上を測る。壁沿いには幅1m前後のベッド状造構が巡り、壁下及びベッド下にも周壁溝が巡る。この周壁溝はまず大きく基礎状の溝を掘り、その中壁下に板を立てて溝を埋めて板で壁を補強している状況が読み取れる。主柱はP1が相当する。床面は明確な貼床ではないが、かなり汚れている。

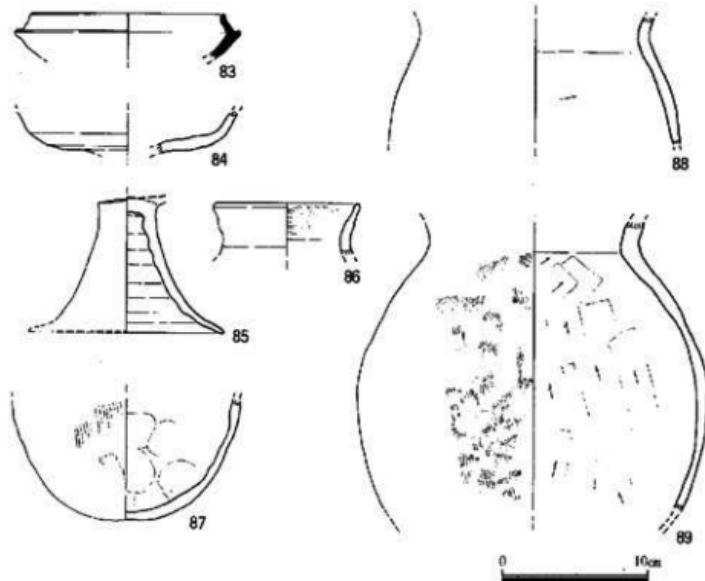


Fig. 56 SC11出土遺物 (1/4)

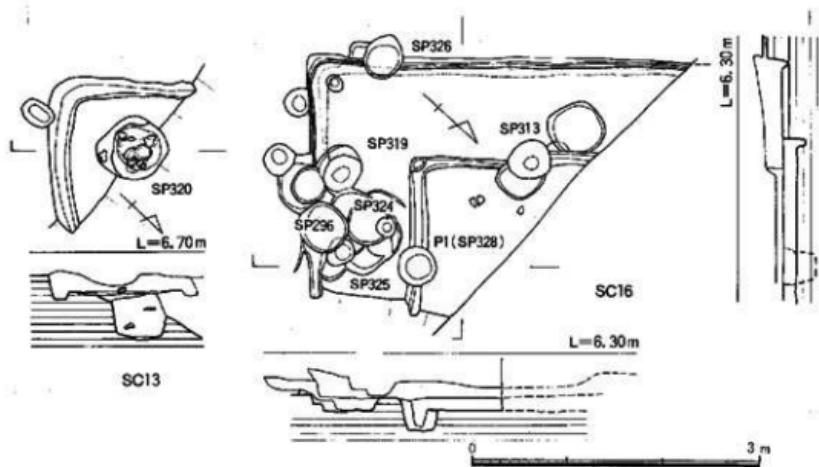


Fig. 57 SC13・16 (1/60)

出土遺物 (Fig. 54, PL. 37) 墳
土中から弥生土器をはじめ土師器・
須恵器片が出でている。弥生土器・
須恵器は量が少なく混入品であ
る。

81・82は土師器。81は小型丸底壺
1/2片。復元口径8.0cm、器高8.3cm
を測る。全体に磨滅がひどいが、外
面細いタテ刷毛と底部はヘラナデで
ある。色調は橙色で、胎土は細砂粒
を含む。82は鉢の口縁部小片。内面
はナデ、外面は細かいタテ刷毛が残
る。色調は明赤褐色で、胎土は細砂
と赤色粒子を含む。

獨立柱建物 (SB)

4棟確認したが、調査時では1棟 (SB04) のみで残り3棟は図上復元した。

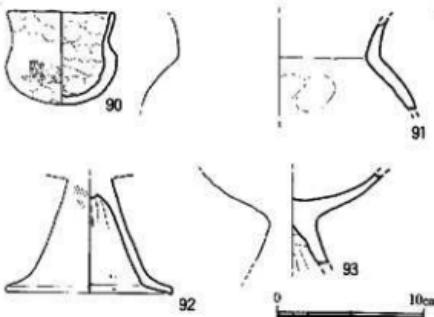


Fig. 58 SC13出土遺物 (1/4)

3. 第142・143次調査

SB01 (Fig. 61)

調査区南側で検出した1間×2間の建物、主軸方位をN-68°-Eに取り、梁間全長2.78m・3.12m、桁行全長4.55m・4.85mを測り、ややいびつである。床面積13.86m²で、柱穴埋土は暗褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig. 62) 各柱穴から遺物が出土している。

104はSP40出土の土師器の鉢。磨滅が著しいが、内面は細い刷毛、外面はナデ。色調は橙色で、胎土に赤色粒子を含む。

SB02 (Fig. 61)

調査区南側で検出した1間×2間の建物。主軸方位をN-40°-Eに取る。建物規模は梁間全長2.83m・2.87m、桁行全長5.08m・5.30mを測り、わずかに歪む。床面積は14.82m²を測る。柱穴は円形であるが、直径は25-40cmと余り大きくなかった。柱径は痕跡から12-14cm位か。埋土は暗褐色土を主体とする。

出土遺物 少量出土しているが、図示しうるものはない。

SB03 (Fig. 61)

調査区中央や北側で検出した2間×2間の建物。主軸方位を北西から南東方向に取る。規模は梁間全長3.62m・3.70m、桁行全長3.90m・4.10mを測る。床面積は14.64m²を測る。柱穴はいずれも円形で、直径は25-35cmと小さい。埋土は黒褐色土・暗褐色土を主体とする。柱で倉庫の可能性がある。

出土遺物 (Fig. 62) 各柱穴から出土しているが、図示出来るものは少ない。

105は高壊壊部小片。内外面ナデ。形態的に見て古墳時代前期のものか。外面も色調はぶい橙色で、胎土は精良。

SB04 (Fig. 61, PL. 27)

調査区北側で検出した1間×2間の建物。主軸方位をN-52°-Eに取る建物。梁間全長3.35m・3.40m、桁行全長4.68m・4.85mを測り、やや歪んでい

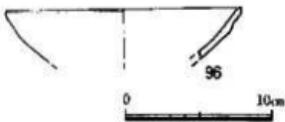
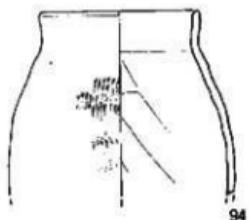


Fig. 59 SC15出土遺物 (1/4)

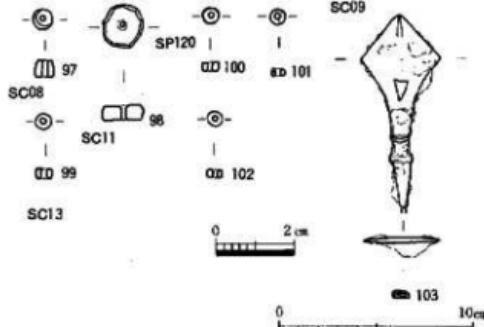


Fig. 60 各遺構出土遺物 (2/3・1/3)

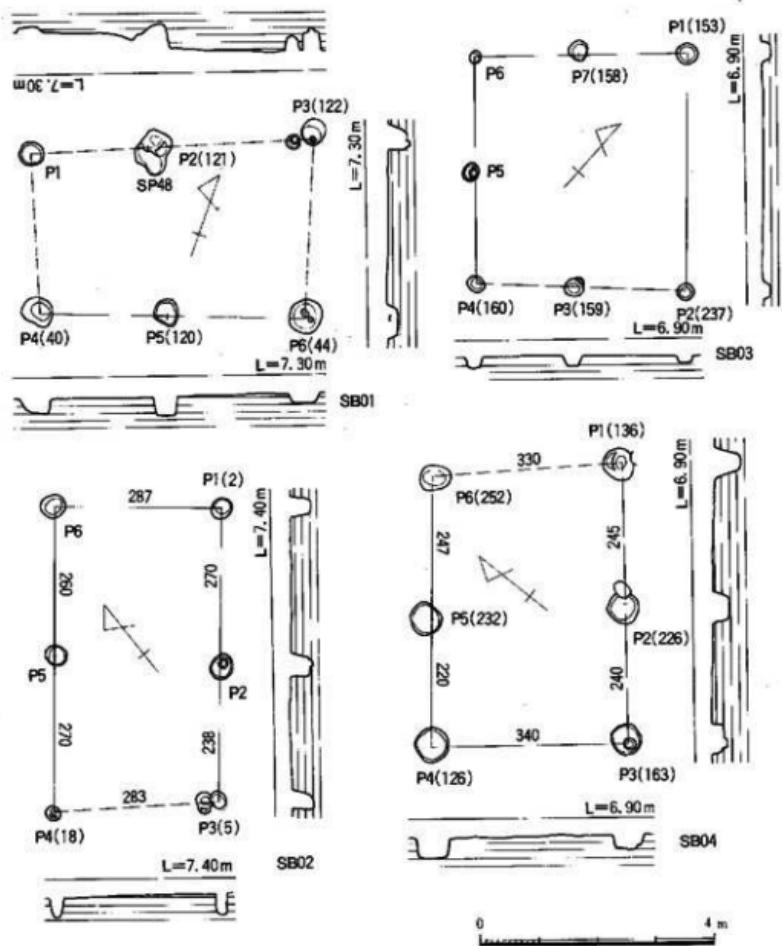


Fig. 61 SB01~04 (1/100)

る。床面積は15.90m²を測る。柱穴は円形又は方形気味の略円形で、直径は50~60cmを測る。直徑は痕跡から12~18cm位か。埋土は暗褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig. 62) 各柱穴から遺物が出土している。 SB01

106は須恵器の壺蓋1/8片で、口縁内面に段を有す。Ⅲ b
期位のものか。色調は灰褐色で、胎土は精良。

土坑 (SK)

SK01 (Fig. 63, PL. 32)

調査区南側で検出した不定形土坑。長径1.75m、短径1.04mを測る。残りは悪く、深さは4~8cm程度しかない。

埋土は黒褐色土と地山ローム土を混合である。

出土遺物 土器の細片が6点出土した。

SK02 (Fig. 63)

SC06東側で検出した不整梢円形の土坑。規模は長径

2.02m、短径1.16mを測る。床面迄の深さは最大で14cm前後、東側が一段深くなる。埋土は灰褐色土に黒褐色土を混入する。

出土遺物 量は少ないが、大半が土師器で須恵器片を少量含む。

SK03 (Fig. 63)

SK02西側の不定形の浅い土坑。長径2.06m、短径1.64m、底面は中央部が深くなり、深さは最大で20cmを測る。埋土は時期的には新しい灰褐色土である。

出土遺物 土師器・須恵器の細片が少量であるが出土している。

SK04

SC03北西コーナー部分で検出した浅い落ち込み。SC03の一部と考える。

SK05 (Fig. 63, PL. 32)

調査区東壁近く、SD01に切られる長方形の土坑。規模は長径1.05m、短径0.70m、深さは最大で38cmを測る。土坑断面は逆台形を呈す。埋土は灰褐色土を主体とし、底程暗くなる。

出土遺物 土師器・須恵器の細片が少量出土している。

SK06 (Fig. 65, PL. 32)

調査区中央 SD01の北側で検出した長方形を呈す土坑。規模は長径1.18m、短径0.90m、深さ30cm程度を測る。土坑断面は逆台形で、中央がやや凹む。埋土は暗灰褐色土である。

出土遺物 土師器・須恵器の細片が1点出土しており、埋土の色と合せて考えれば中世のものであろう。

SK07 (Fig. 65, PL. 33)

SK05の東側で検出した長方形の土坑。規模は長径1.25m、短径0.75m、深さ55cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は暗灰褐色粘質土を主体とする。南側から疊が流れ込んでいた。

出土遺物 (Fig. 64, PL. 37) 廉溝の碗1/2片107が1点出土している。復元底径5cmを測る。

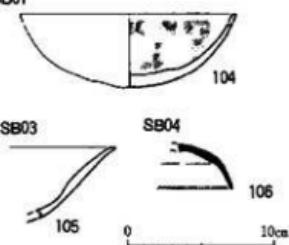


Fig. 62 掘立柱建物出土遺物 (1/4)

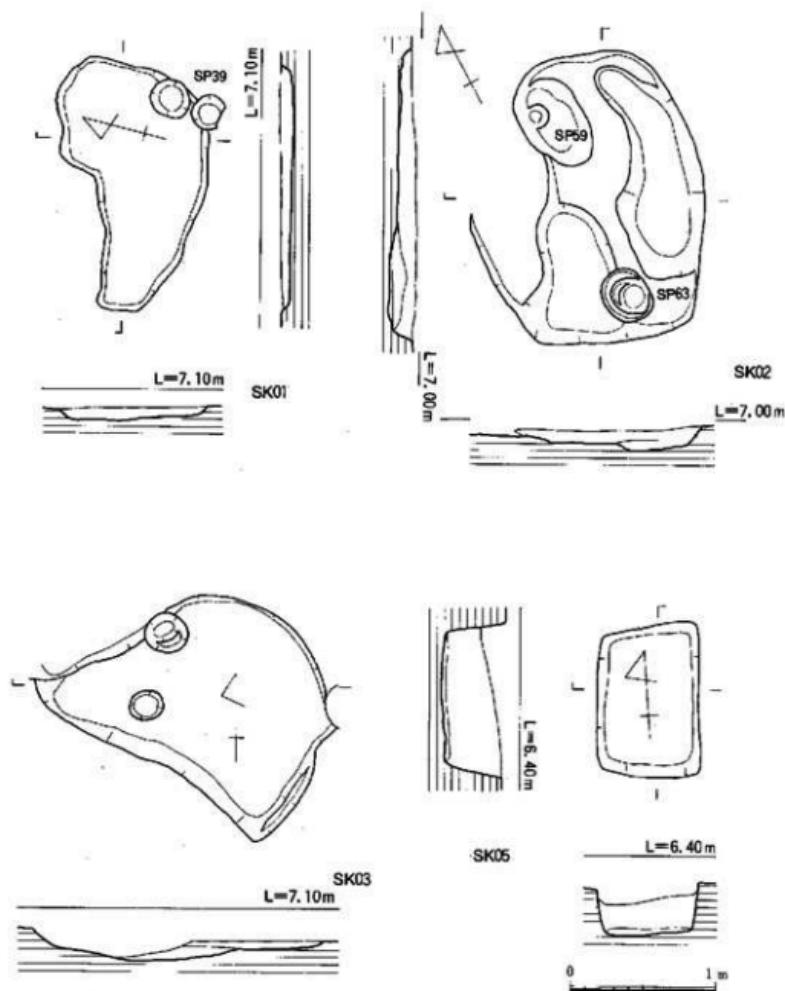


Fig. 63 SK01~03・05 (1/40)

3. 第142・143次調査

内外面緑味が強いオリーブ灰色釉が薄目にかかり、見込みに砂目跡が残る。疊付きにも目痕が残る。胎土は灰色で精良。17世紀前後か。

SK08 (Fig. 65, PL. 33)

SK07南側で検出した楕円形の土坑。規模は長径1.65m、短径1.13m、深さ83cmを測る。断面は逆台形で、中央がやや深くなる。埋土は暗灰褐色土で地山ローム土を混入する。

SK09

SK09は SC03の屋内土坑である。

SK10 (Fig. 65, PL. 33)

SK08西側で検出したSD01床面で検出した楕円形の土坑。規模は長径2.2m、短径1.8m、深さ115cmを測る。断面は逆台形を呈し、中央がわずかに深くなる。埋土は暗灰褐色粘質土を主体とし、底層には脆弱な動物骨片を含む。

出土遺物 土器・須恵器・瓦質土器・白磁・青磁・陶器の細片を含むが量は少なく、図化出来るものもない。

SK11 (Fig. 66, PL. 33)

調査区西側で検出した隅丸長方形状の土坑。断面はオーバーハングした台形状を呈す。規模は底面で長径1.35m、短径0.68m、深さ42cmを測る。埋土は灰褐色土と地山ブロックの混合土である。

出土遺物 土器らしきものが、10片あるが、図示出来るものはない。

SK12 (Fig. 66, PL. 33)

調査区南側で検出した長方形土坑。規模は長径1.05m、短径0.75m、深さ20cmを測る。断面は逆台形で、埋土は黒褐色土を主体とする。出土遺物はなかった。

SK13

SK06の屋内土坑である。

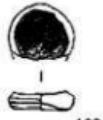
SK07



SK15



SK17



SK21

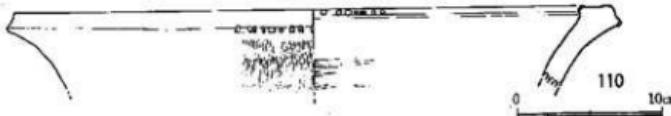


Fig. 64 各土坑出土遺物 (1/4)

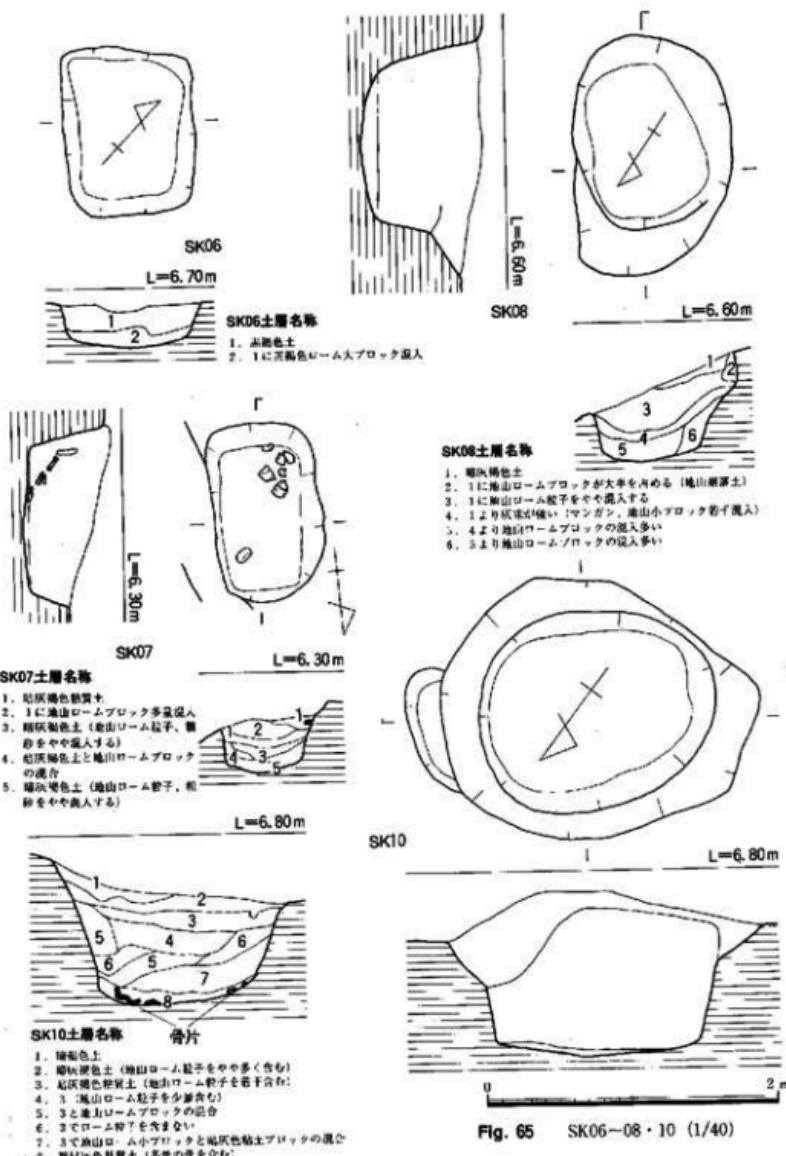


Fig. 65 SK06-08-10 (1/40)

3. 第142・143次調査

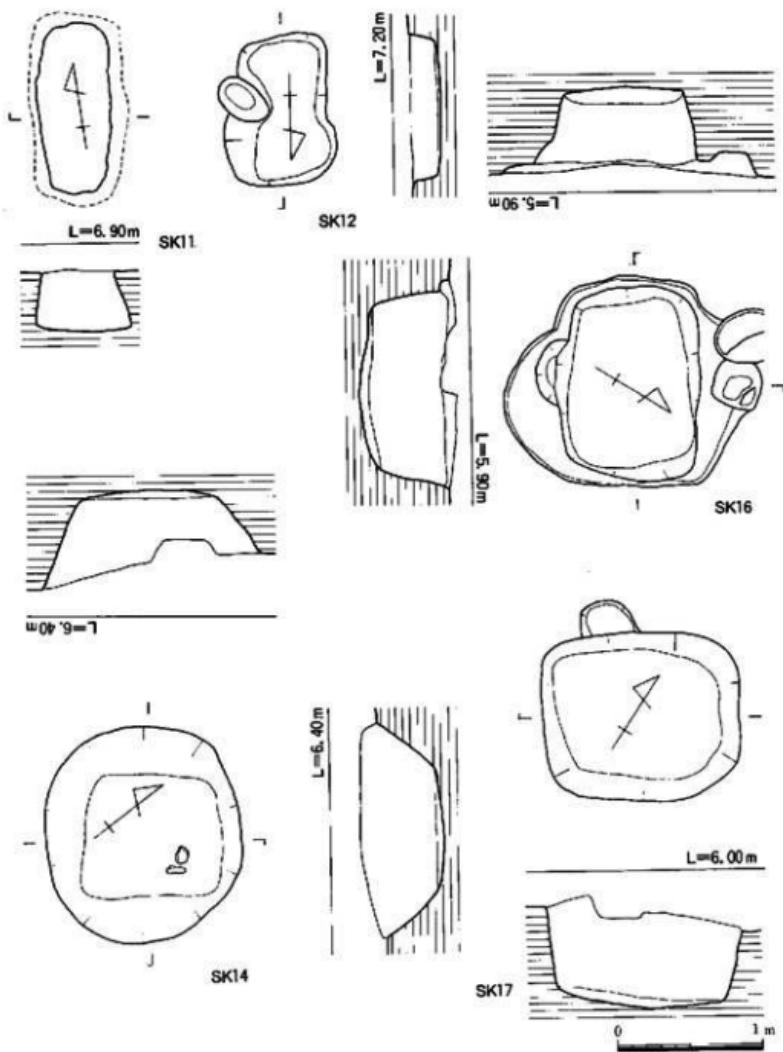


Fig. 66 SK11・12・14・16・17 (1/40)

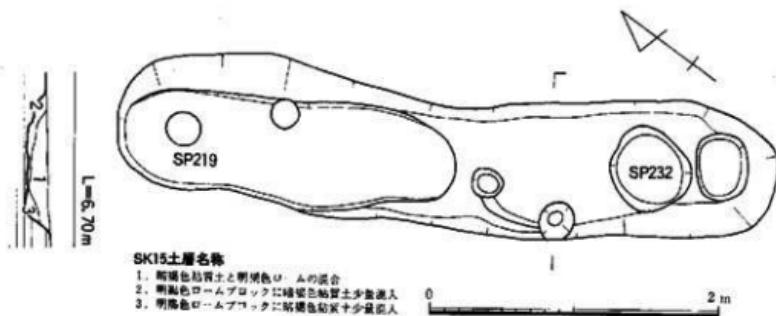


Fig. 67 SK15 (1/40)

SK14 (Fig. 66, PL. 33)

SD01床面で検出した上面が円形で下面が方形を呈す土坑。規模は長径1.5m、短径1.3m、深さ58cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は暗褐色土を主体とする。

出土遺物 土師器・瓦質土器・陶器・青磁・染付磁器片が出土しているが、図示出来るものはない。

SK15 (Fig. 67, PL. 30)

SC08・SK22を切る溝状の土坑。長さ4.55m、幅1m、深さ7~14cmを測る。埋土は暗褐色土を主体とし、大量に地山ローム土を多量に含む。

出土遺物 (Fig. 64) 須恵器・土師器の細片を少量含む。

108は壺蓋口縁部細片で、須恵器の形態を模倣したもの。色調は浅黄橙色を呈し、胎土に砂粒と赤色粒子を含む。

SK16 (Fig. 66, PL. 34)

調査区北東側で検出した長方形の土坑。規模は長径1.33m、短径1m、深さ53cmを測る。断面は逆台形を呈し、底面は中央わずかに深くなる。埋土は5層に分層出来るが、黒褐色粘質土を主体とし、地山ローム土を少量含む。

出土遺物 弥生土器から土師器、瓦質土器、青磁・白磁や炭化物片などが少量出土している。中世の遺物が主体である。

SK17 (Fig. 66, PL. 34)

SK16の北側で検出した長方形の土坑。規模は長径1.35m、短径1.55m、深さ70cmを測る。断面は逆台形を呈し、中央がわずかに深くなる。埋土は黒褐色土を主体とする。

出土遺物 (Fig. 64, PL. 37) 土師器・須恵器・陶器・染付磁器・白磁などが少量出土して

3. 第142・143次調査

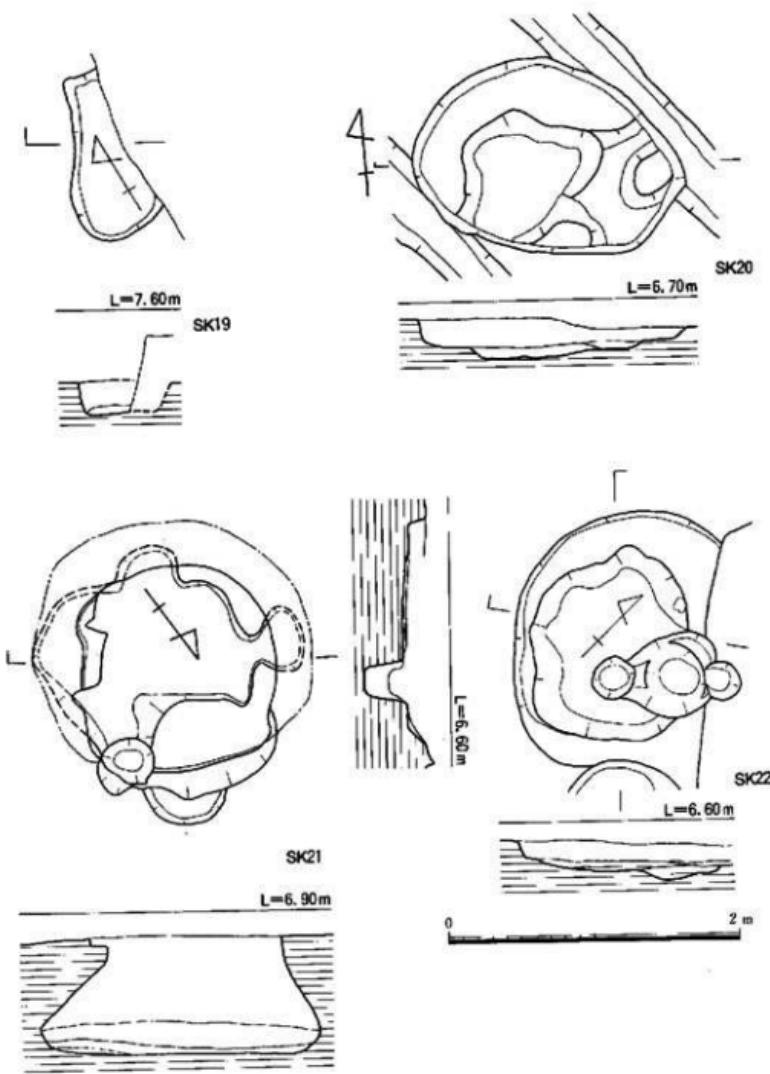


Fig. 68 SK19~22 (1/40)

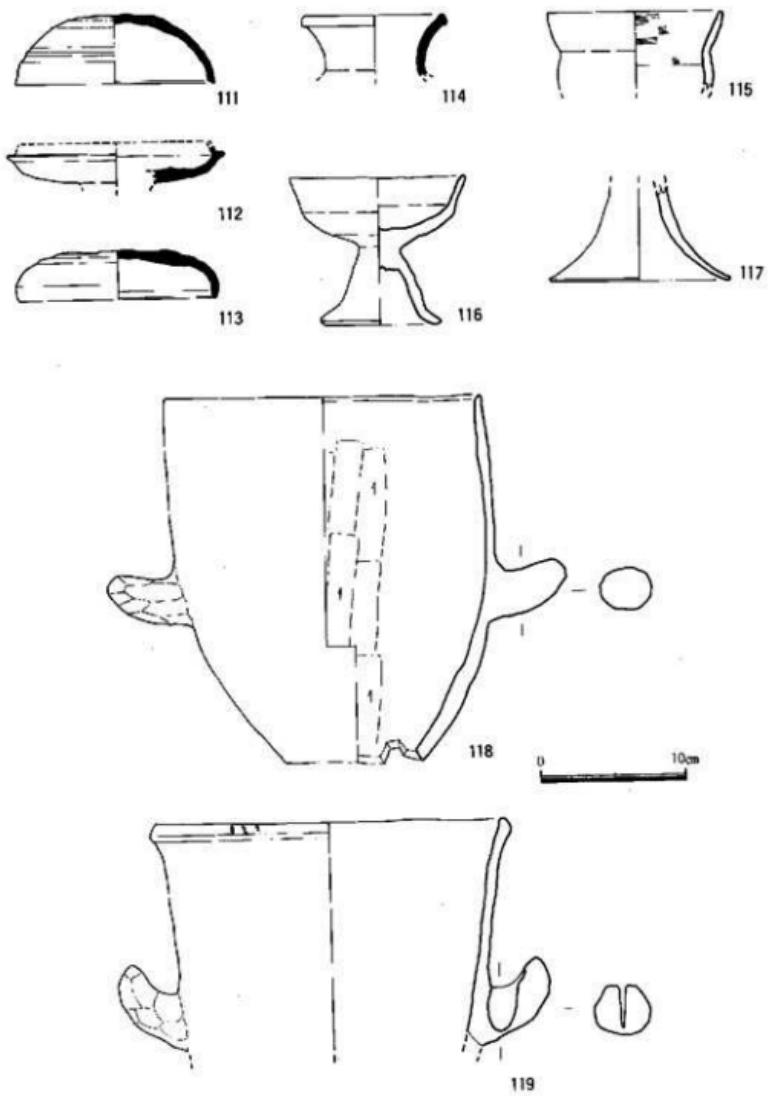


Fig. 69 SK22出土遺物 I (1/4)

3. 第142・143次調査

いる。

109は天目碗の底部片を利用した瓦玉である。底径4cmを測る。外底は露胎で、内面見込みには黒色の釉が厚くかかる。胎土は浅黄橙色で、細砂粒を含む。瀬戸美濃系か。

SK18

図示していないが調査区北側境界地で検出した浅い椭円形状の土坑。規模は長径0.70m、短径0.63m、深さ9cmほどで浅い。埋土は黒褐色土である。

出土遺物 土器片が少量出土しているが、図示出来るものはない。

SK19 (Fig. 68, PL. 34)

調査区東境界地にかかる不整長方形状の上坑。確認規模は長径約1.30m、短径0.65m以上、深さ20cmを測り、断面は逆台形である。埋土は黒褐色土で出土遺物はなかった。

SK20 (Fig. 68, PL. 34)

調査区北西隅で検出した不整椭円形状の土坑。規模は長径1.90m、短径1.35m、深さ27cmを測り、底面は南側が一段深くなる。埋土は褐色粘質土又は黄褐色地山ローム土を主体とする。出土遺物はなかった。

SK21 (Fig. 68, PL. 34)

SC07に切られる袋状の貯蔵穴である。平面は不整円形で規模は上面で1.35×1.62m、下面で1.75×1.95m、深さは約80cmを測る。底面は地山の汚れか中央部を中心に一段低くなっている。埋土は暗灰褐色土で地山ローム土を混入する。

出土遺物 (Fig. 64, PL. 37) 弥生土器片・黒曜石片が少量出土しているが図示出来るものは少ない。

110は弥生土器の大型壺の口縁部小片。復元口径約41cmを測る。口縁端部内面及び外面に工具による刻み目が入る。外面はタテ刷毛、内面は刷毛のち研磨。弥生時代中期初頭か。

SK22 (Fig. 68, PL. 34)

調査区北側中央のSC10を切る椭円形状の土坑。SC08・SK15に切られる。規模は長径1.65m、短径1.35m以上、深さ15~18cmを測り、中央部が一段深くなる。埋土は黒褐色土で地山ローム



Fig. 70 SK22出土遺物 2 (1/3・2/3)

をやや含む。また岡示してはいないが、多量の土師器・須恵器の破片が出上している。

出土遺物 (Fig. 69・70, PL.37) 多量の土師器・須恵器片と、砥石・円石などの石器が出上している。

111～114は須恵器。111～112は壺蓋で、111は1/3片で、天井部がやや高い。112は1/2片で器高が低く、天井部が平坦である。復元口径はそれぞれ13.5cm、13.7cmを測り、また天井部は回転ヘラ削りで、その他はナデ。113は有蓋高杯1/4片で、復元口径13.0cmを測る。114は口縁部小片で、復元口径10.0cmを測る。平瓶の口縁部か。115～119は土師器。115は壺または小型丸底壺の1/6片。復元口径12.2cmを測る。磨減が著しいが、刷毛のちナデか。色調は橙色で、胎土に細砂粒と赤色粒子を少量含む。116・117は高杯1/3片で、復元口径12.2cm、復元脚径8.5cm、器高10.1cmを測る。器壁は磨減がひどく調整不明。色調は明黄褐色で脚部に黒斑がある。胎土に赤色粒子・黒雲母を多量に含む。117は脚部1/3片。復元脚径は12.2cmを測る。内外面ナデ調整。色調は浅黄橙色で、胎土に粗砂。赤色粒子を多く含む。118・119は盤。118は3/4片。口径22.0cm、復元底径9.5cm、器高25.0cmを測る。器壁は磨減がひどいが内面は削り、外向は不明。色調はにぶい黄橙色で黒斑があり、胎土に粗砂・赤色粒子を多く含む。119は1/2片で、復元口径24.0cmを測る。口縁部に3ヶ所刻目が残り、内外面調整はナデが残る。把手上面には切り込みが入る。色調は黄橙色で、胎土に細砂と赤色粒子を多く含む。

120は砥石の破片。目の細い砂岩製で、現存長13.0cm、最大幅7.9cm、厚さ3.8cmを測る。砥面としては上面と左側面を利用しており、下面と右側面は未調整である。121は円形の凹石で、石質は玄武岩。一部欠損するが、直径7.2cm、厚さ2.8cmを測る。各面擦られている。122はまゆ形を呈す不明石製品。残存長は3.2cmを測り、黒灰色を呈す。123は上製の丸玉で直径1cmを測る。浅黄橙色を呈し、胎土も良好。

溝状造構 (SD)

番号を付したものは24迄であるが、その内 SD08～13・23については灰褐色砂質土を呈し、近世以降の畑の痕跡。SD15～20は SC03、SD22は SC09、SD24は SC11内の小溝である。

SD01 (Fig. 71, PL. 28・31)

調査区中央南西隅から北東隅にかけて北方に弧状を呈して延びる溝である。両側に大走り状のテラスを持つ。溝幅は南西側で8.5m、北東側で10mを測りテラスを除いた溝幅は2～3.5mを測る。溝の深さは上面から西南端で1.4m、北東端で1.9mを測り、北東側にかけて深くなる。溝の断面はU字形または逆台形を呈すが、両側の壁は流水等による浸蝕で崩落したような状況で、本来は2号ベルト土層のようなV字形（薬研堀）を呈したものと考える。溝は八女粘土を掘り込んでおり、若干の湧水があった。溝の埋土は2号ベルトの土層を例にとれば、上・中・下・最下層の4層に大別出来る。上層は1～3層、中層は5～9層、下層は10～12層、最下層は13～15層で、底の方程粘性が強く、砂を含んでいる。上層は近世の染付磁器などを含み、近

世頃に埋没した事が考えられる。また1号ベルトや南西壁土層から溝が掘り直されている状況が看取出来る。下層には礫が流れ込んでいたが、礫群としてまとまりを得なかったので、取り上げ掘り下げている。

出土遺物 (Fig. 72-78, PL. 38) 上～最下層の4層で取り上げた。大よその層序は前述したとうりである。上・中層については日程の都合上、人力掘り下げでなく、大半を機械掘りで行った。

124-129は中層出土。124・125は白磁碗底部片。124は2/3片で、復元高台径5.8cmを測る。125は1/3片で、復元底径4.6cmを測る。124の高台は露胎、外面は透明釉がかかる。125は李朝で、内底、高台疊付に目模（6ヶ所位か）が残る。くすんだ乳白色釉がかかる。127は李朝の三島手の青磁底部片。高台径5.8cmを測る。内底見込みには化粧土による刷毛目が入り、その上に暗い黄緑色釉をかける。胎土は暗灰褐色で、やや不良。127は須恵器質の擂鉢底部1/8片。ナデで色調は灰色。胎土に黒色粒子又は石英粒子を多く含む。東播系であろうか。128は土師器の碗1/2片。器壁は磨滅が著しいがナデか。色調は淡黄橙色を呈し、胎土は良好。129は土師器の鍋の口縁部片。口径は復元で約30cmを測る。口縁部上面には粗い刷毛、縁部外面には煤が厚く付着し、暗褐色を呈す。胎土は1～3mmの砂粒を含む。130～151は下層出土。130・131は土師器の皿で130は1/6片。復元口径7.8cm、131は1/6片で復元底径7.6cmを測る。いずれもナデ調整で、底部は糸切りである。132は壺1/6片で、復元口径14.4cmを測る。器壁は磨滅し調整は不明。胎土は良好で金雲母を含む。133～138は白磁。133は輪高台の底部3/4片。高台径7.2cmを測る。高台から外底は露胎で、他は乳白色の釉がかかる。134は底部片。高台径は5.4cmを測る。高台部は削りで露胎。疊付きは擦っている。外面薄目の乳白色釉がかかる。胎土は白色で精良。135は白磁碗の底部片を利用した瓦玉か。縁辺は打ち欠いている。直径7.5～7.6cm。見込みは乳白色の光沢を持った透明釉がかかる。胎土は白色で精良。136は暗青緑色の釉がかかる底部の形態から見て白磁である。1/3片で復元高台径5.4cmを測る。疊付きから高台内面は露胎。137は碗の底部片。底径5cmを測る。高台は削り出し、疊付きは擦っている。高台以外光沢のある乳白色の透明釉が薄目にかかる。138は小碗口縁部1/3片で、復元口径10.4cmを測る。外面くすんだ乳白色釉が厚目にかかる。胎土は白色で精良。139・140は青磁続。139は同安窯系の底部1/6片。高台は削りで露胎。内外くすんだオリーブ釉がかかる。胎土は灰色で精良。140は1/3片で復元高台径5.1cmを測る。内外にくすんだ黄緑色釉が厚目にかかるが、高台内面は蛇の目状に釉をかき取る。見込みには印文が入る。141～143は陶器。141は壺口縁部1/4片。復元口径6.4cmを測り、暗緑色釉がかかる。胎土は黑色細砂粒を含むが精良。142は底部1/3片の皿か。復元底部9.4cmを測る。高台内は露胎だが、その他は褐釉がかかる。143は無釉陶器の盤1/10片。色調は暗褐色で胎土に粗砂を多く含む。144～147は瓦質土器。144は湯釜胴部片で復元口径21.4cmを測る。外面ナデで、外面下半に刷毛が残る。色調は暗灰色で、胎土は精良。

3. 第142・143次調査

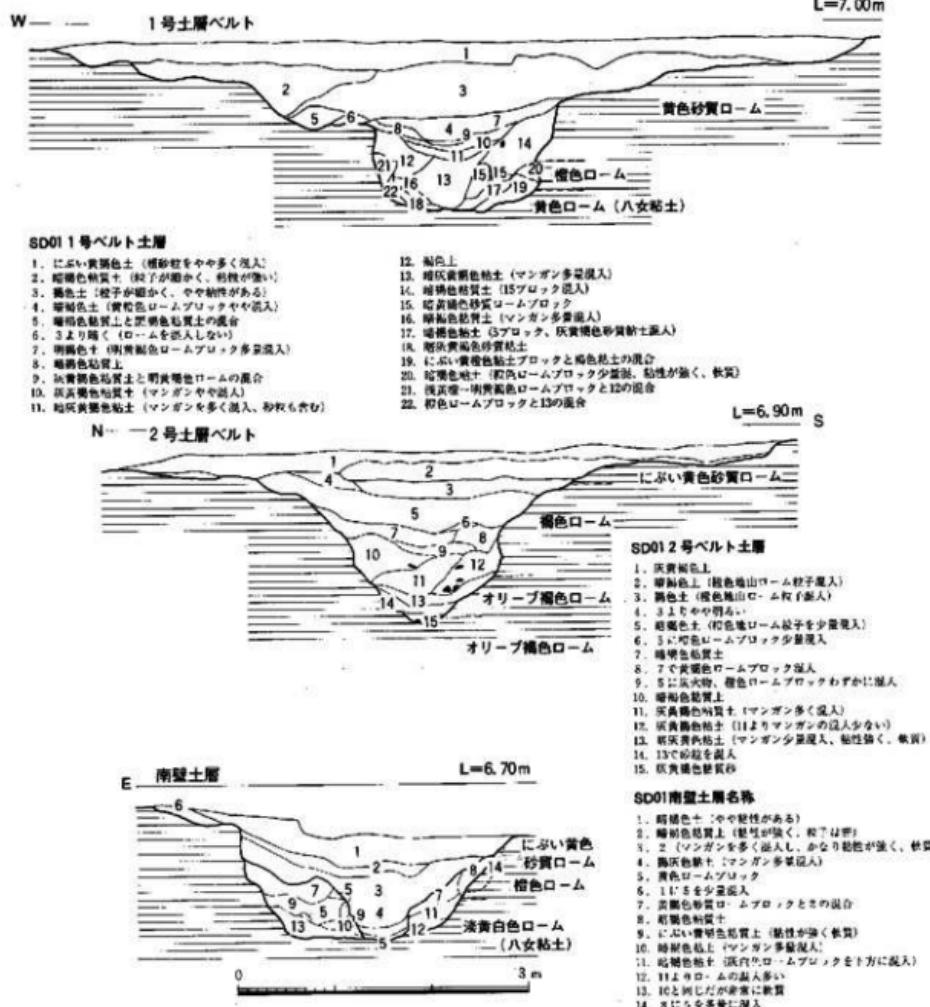


Fig. 71 SD01十層断面図 (1/60)

3. 第142・143次調査

145～147は瓦質土器擂鉢。145は底部片。146は口縁部1/8片で復元口径27.6cmを測る。147は口縁部1/8片で、復元口径26.8cmを測る。色調は145が暗灰色、146が灰色、147が暗青灰色である。胎土は145が細砂粒を多く含む外、精良である。148～151は土師質上器。148・149は擂鉢は口縁部小片で内面に148は8本、149は5本の条線が入る。色調は148が暗褐色、149が明淡橙色である。胎土は148が細砂粒を少量含み、149は細砂を混入する。150は鍋口縁部1/8片で復元口径27.8cmを測る。内面は細かい横刷毛、外面に煤が付着し黒色を呈す。胎土に細砂を多く含む。151は支脚で、手捏ねである。断面は稍円形である。

152～193は最下層出土である。152・153は上師器の小皿。152は1/4片で復元口径7.8cm、器高1.4cm、153は1/3片で復元口径9.2cm、器高1.5cmを測る。152の底部には板目圧痕、153は回転糸切りである。色調は152が橙色、153は明橙色で、胎土は共に精良。154～166は白磁碗である。154は2/7片で復元口径15.2cm、器高6.6cmを測る。口縁端部がわずかに端反る。155は底部片で、高台径6.5cmを測る。口縁部は端反りか。156は口縁部小片である。157は玉縁口縁のものの1/8片で、復元口径14.3cmを測る。釉は厚目にかかる。158は口縁部小片である。159・160は同形態の底部片。159・160共は1/2片で、高台径は共に5.7cmを測る。160はやや暗緑色気味の乳白色釉がかかる。161は底部1/2片。復元底径6.8cmを測る。162・163・165・166は底部片。164は青白磁。瓶の底部片。復元底径7.8cmを測る。167～172は青磁碗、167は1/4片で、復元口径16.0cmを測る。竜泉窯系か。169は1/5片で、復元口径17.6cmを測る。170は口縁部小片で、口縁直下に白色粘土の象嵌が入る。李朝青磁か。171～172は同安窯系である。171は皿1/2片。横線M形と雷光文が入る。172は底部2/3片で、高台径5.0cmを測る。外面と内面に横描文が入る。暗黄緑色釉がかかり、胎土は白色で精良。173～176は越州窯系青磁碗の底部片。176は陶器の碗2/3片。復元底径5.0cmを測る。全面にクリーム色の白色釉が施釉で疊付きは釉をかき取る。李朝の白磁か。177～180は瓦玉である。いずれも縁辺を打ち欠いて整形している。177は李朝の白磁碗底部を利用している。直径5.9cmを測る。178は青磁片で見込みに印花される。直径6.4cmを測る。179は無文の青磁片で、直径5.9～7.1cm、疊付きは接着している。180は竜泉窯系碗の底部片を利用したもの。直径8.5～8.6cmを測る。

181は備前系の陶器の擂鉢口縁部片。15世紀代の備前Ⅳ期のもの。182・183は須恵質の捏鉢か。183は底部片で復元底径9.6cmを測る。内面はナデ。183は口縁部細片。184・185は瓦器模ではほぼ同形態と考える。185の高台は小さく貼付けである。184の復元口径は15.6cmを測る。185は外面灰白色で、内面は煤が付着し黒灰色のヘラ研磨であり、一見、内黒土器の感じを与える。186・187は瓦質土器である。186は片口の捏鉢1/3片。復元口径20.0cm、底径10.0cm、器高7.5cmを測る。内外面刷毛であるが、内面は使用による磨滅が著しい。187は擂鉢口縁部細片。色調は186が明灰色、187が暗灰色を呈す。いずれも胎土は精良だが187は細砂粒を若干含む。188は土師器碗底部片。全体に磨滅が著しい。外面色調は暗灰橙色。胎土は精良。189・190は瓦質土

3. 第142・143次調査

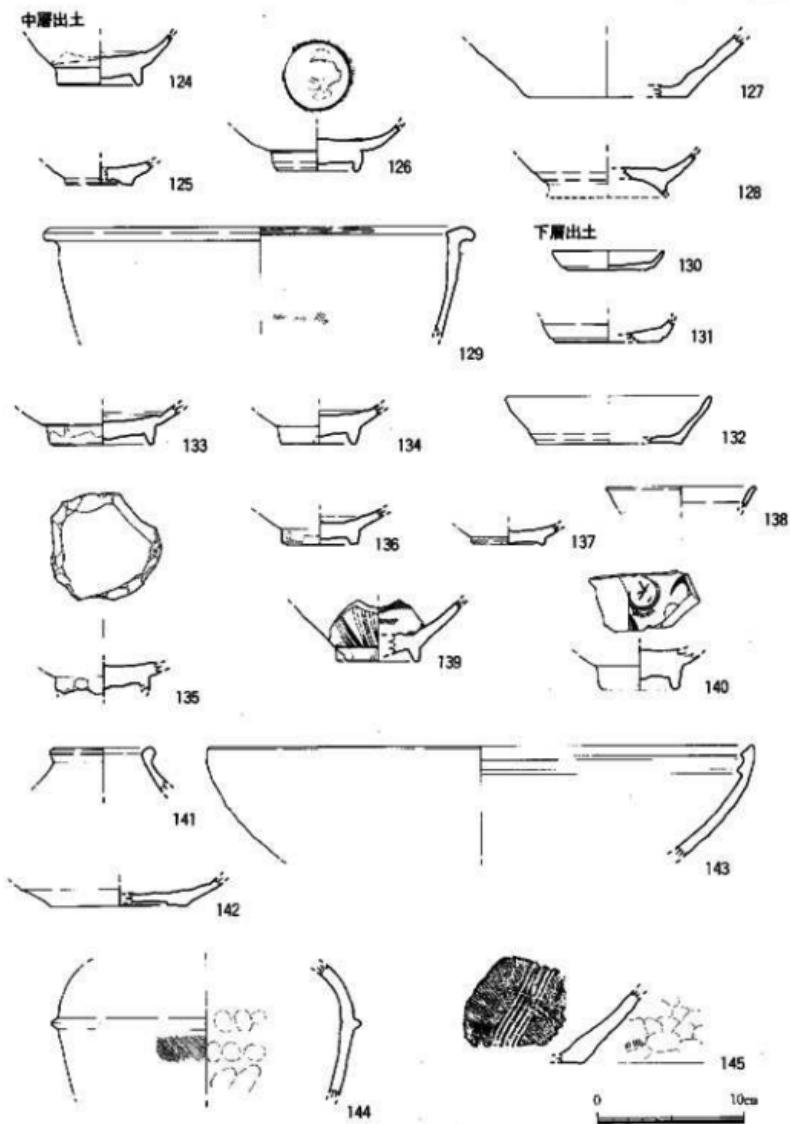


Fig. 72 SD01出土遺物 1 (1/4)

3. 第142・143次調査

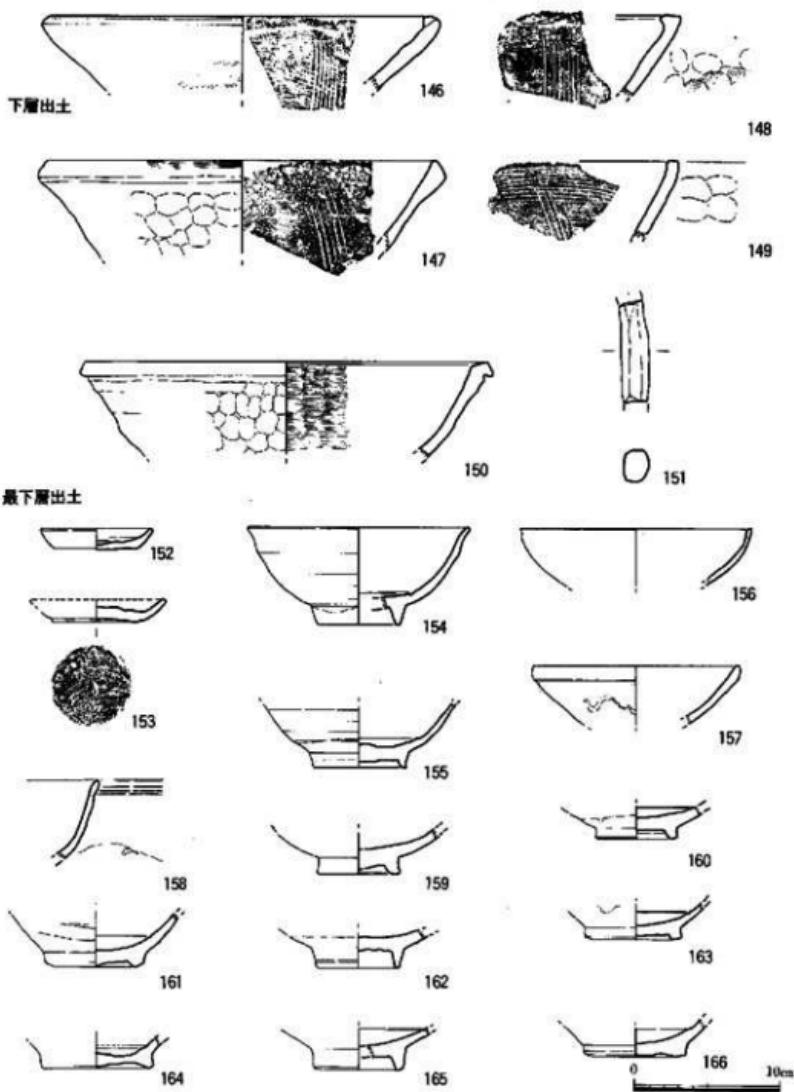


Fig. 73 SD01出土遺物 2 (1/4)

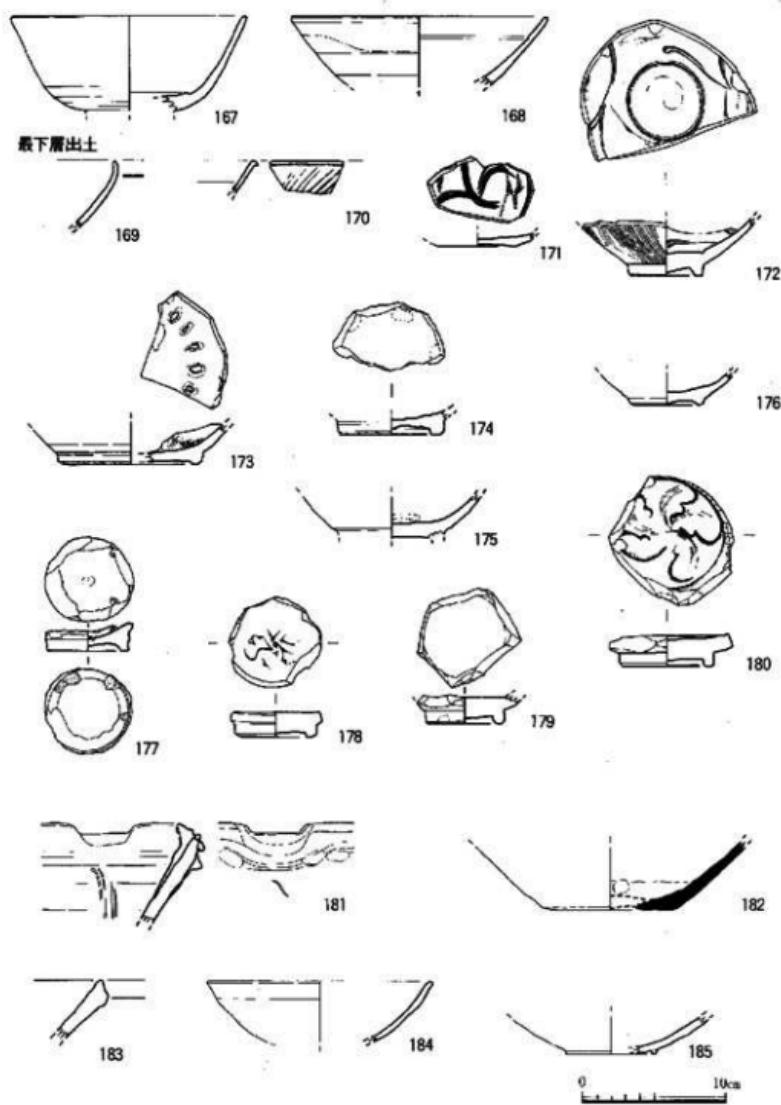


Fig. 74 SD01出土遺物 3 (1/4)

3. 第142・143次調査

器の火鉢（火舍）。189は復元底径17.0cmを測る。内底は粗い刷毛、外底部には板目圧痕と粗い刷毛が施され、煤が厚く付着する。190は189より大きく、内面は刷毛。外面色調は189が暗褐色、190が黒灰色で、胎土は189が粗砂を多く含み、190は細砂を含む。191は土師質土器の鍋口縁部1/6片。復元口径29.6cmを測る。内面は粗い刷毛が残り、外面は黒色で厚く煤が付着する。胎土は細砂粒・金糸を含む。192は土師質土器の大型の支脚である。直径4cm前後を測る。

193～200は須恵質の瓦片。いずれも最下層出土。193～198は平瓦。いずれも凸面は斜格子の叩きで、凹面は布目痕が残る。厚みは2cm前後である。斜格子は大きいもの193～194、格子の小さいもの196～198の2種類がある。199・200は丸瓦で凸面は斜格子叩き、凹面は布目痕が残る。200は玉縁部である。凹面に細かい布目痕が残る。以上は越州窯磁器と同時代のものか。

201～215は各層出土の石製品・土製品。201・202は滑石製石鍋。201は中層出土。底部片で復元底径27.2cmを測る。ノミ状工具により削り調整で、底部には煤が付着している。また胴部上半には直径8mmの円孔がある。202は最下層出土の再利用品。ノミ状工具による削りで、胴部の割れ口も削っている。203～207は砥石片。203は下層出土で、灰黄色の砂岩を用い、上面を砥面として利用している。205は砥石か磨石片。上・下面が擦られている。石質は火成岩

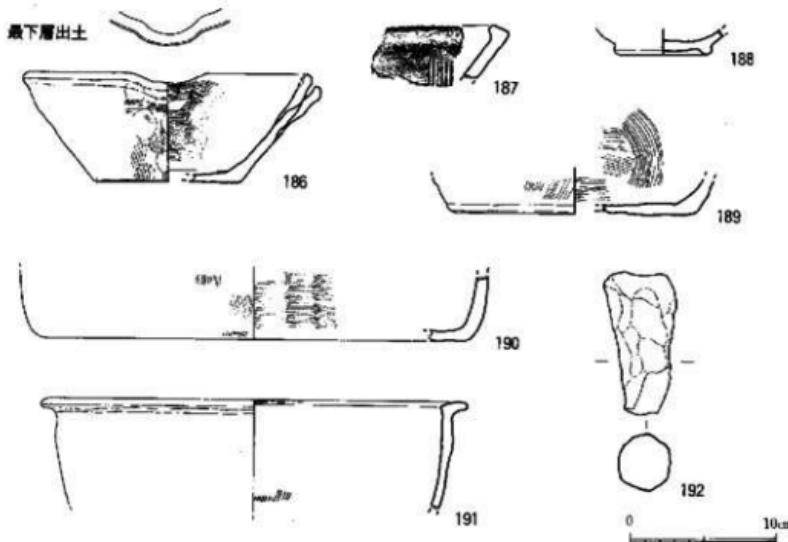


Fig. 75 SD01出土遺物 4 (1/4)

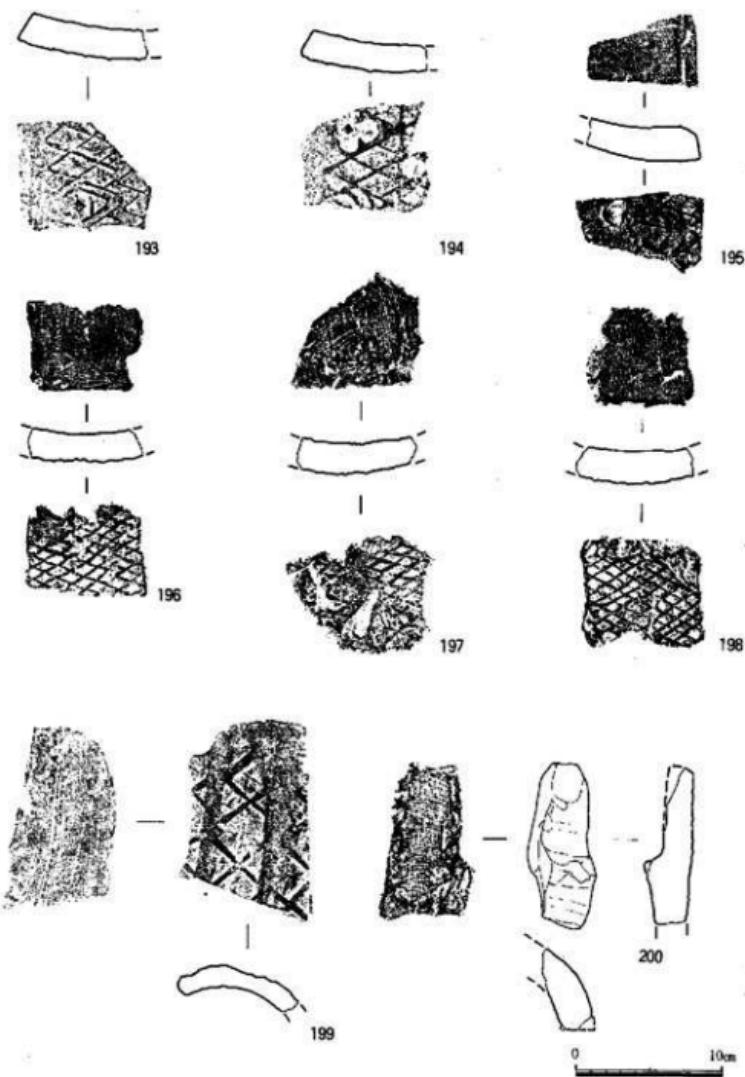


Fig. 76 SD01出土遺物 5 (1/4)

系か。205は最下層出土。一見抉入片刀石斧の未製品に見える。上面と側面に研磨痕が残る。206は下層出土で、砂岩製で破損品であるが上面に明瞭な使用痕跡が残る。207は下層出土の砂岩製。表面は剥落、欠損が著しいが、上面と左側面が砥石として使用されている。208・209は砂岩製の叩石。208は下層出土。断面円形の長楕円形を呈す形態で、長さ8.6cm、直径4cmを測る。上下両端に使用痕跡が残る。209は中層出土。断面は方形で、先端は欠損するが、長さ11.4cmを測る。各面は擦っている。210は半円形の磨石の破片。直径9.5cm、厚さ3.6cmを測る。石質は安山岩系である。211は下層出土。太型蛤刃石斧の刃部片で、石質は玄武岩である。212は叩石で下層出土。玄武岩の角礫を粗削りし使用している。下端には使用による敲打痕が残り、各面は擦り減っている。全長10.7cm、最大幅9cm、重さ、1640gを測る。213は下層出土の板碑の破片。上下両面は敲打調整面であるが、上面にはたがねによる線刻が入る。残存長13cm、厚さ3.8cmを測る。色調は灰色だが、表面はやや赤味を帯び2次の火熱を受けているようだ。214は最下層出土の土鍤。全長5.8cm、最大幅3.8cm、孔径0.8~1cm、重さ87gを測る。胎土に粗砂を含むが焼成は良い。全体に磨滅が著しい。216は近世の泥面子である。上層出土。

SD02 (Fig. 79, PL. 28)

SD01に斜交し主軸をN-57°30' - Wに取るトレンチ状の溝で、SD01に切られる溝である。規模は17m、幅1.2~1.35m、深さは0.55~0.75mを測り、溝断面は逆台形を呈す。埋土は暗褐色土を主体とし、溝底近くは黒褐色粘質土をわずかに含む。底面のレベルは全体同じである。性格は不明だが、屋敷地の区割溝であろうか。

出土遺物 (Fig. 80, PL. 37) 土師器・須恵器・白磁・青磁・瓦などの破片や、轆の羽口や染付磁器片各1点などが上層を中心に出土している。

218~221は土師器の皿である。218・221は1/3片。220は1/4片、221は1/3片で口径は9.5cm、9.6cm、9.8cm、(9.8cm)、器高は1.5cm、1.4cm、1.4cm、(1.4cm)を測る。全体に磨滅がひどいが、218は底部糸切り痕が残り、胎土は不良。218~220は下層出土。222は壊か、復元口径11cm以上を測る。全体に磨滅がひどい。232は碧玉製の管玉。長さ6mm、直径3mmを測る。青味がかかった緑色で、中層から出土した。混入品である。

SD03 (Fig. 81, PL. 29)

調査区北東側で検出した主軸をN-39° - Wに取る溝状造構である。幅1.2~1.5m、深さは東壁土層 (Fig. 81) から見れば、南側造構面からだらだらと深くなり、深さは約1.3mを測る。この溝の北側には道路面と考えられる砂利混りのよく練った暗褐色土面があり、この道路の伴う側溝かもしれない。この溝の埋土は暗褐色粘質土と黄色地山ローム土を主体とする。またこの溝の続きは東側の第153次調査区でも確認されている。

出土遺物 (Fig. 80, PL. 38) 土師器・須恵器・陶器・磁器・染付磁器・瓦などの細片が出土している。近世の時期であろう。

3. 第142・143大洞査

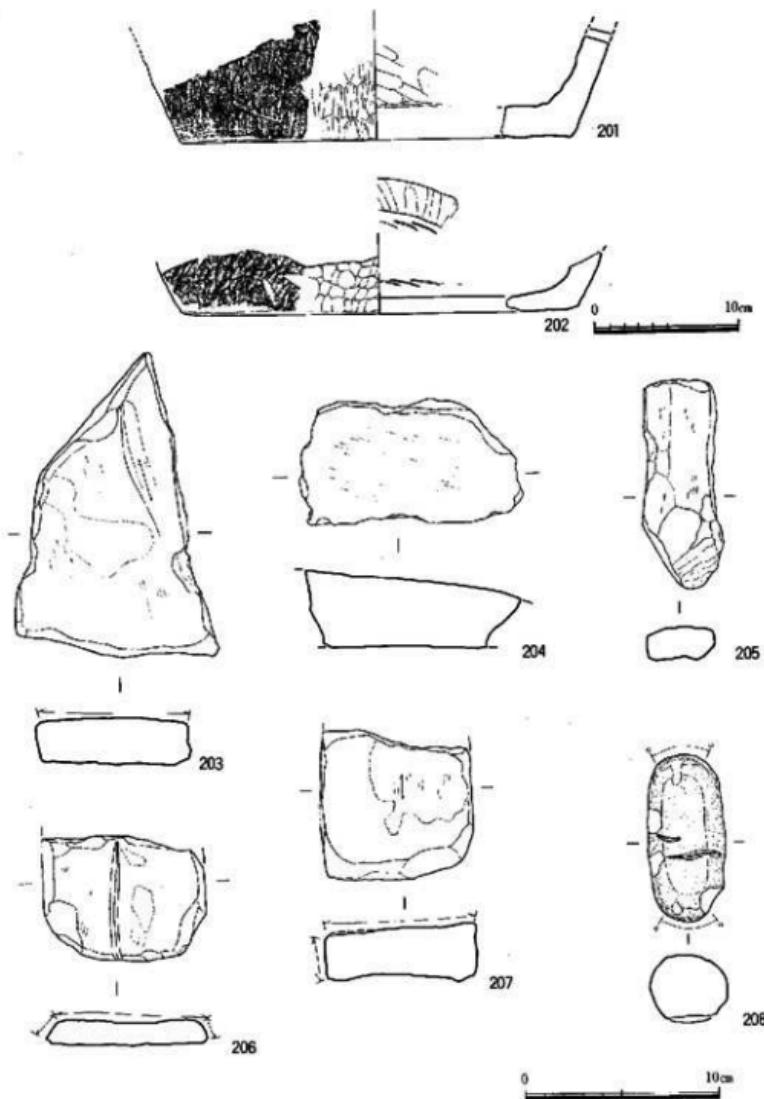


Fig. 77 SD01出土遺物 6 (1/3・1/4)

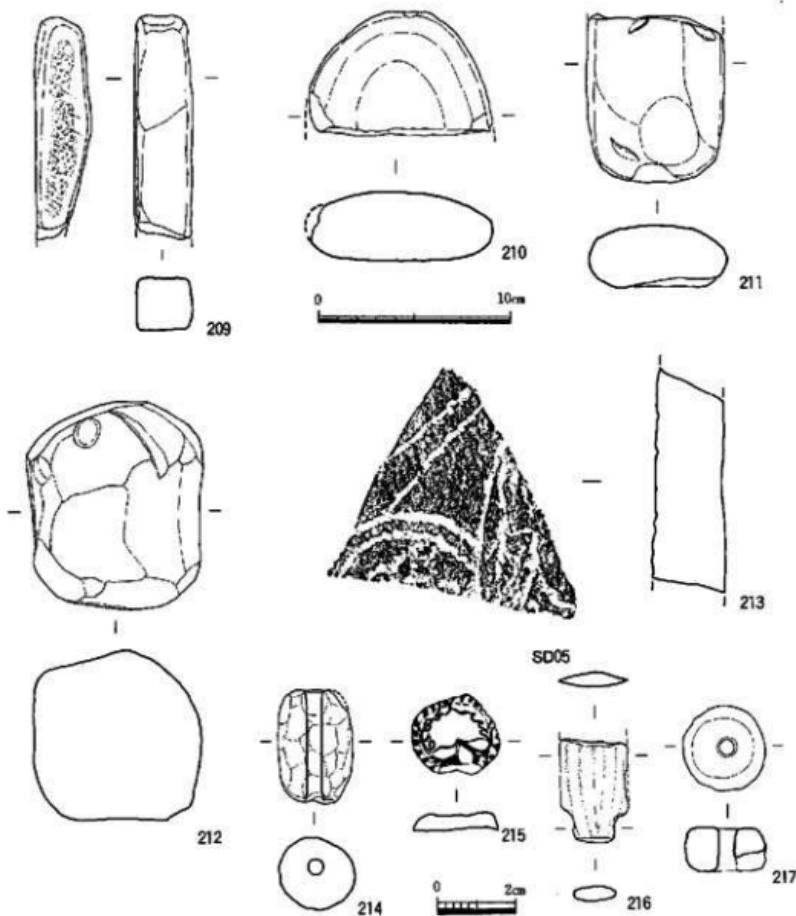


Fig. 78 SD01-05出土遺物 (1/3・2/3)

224・225は肥前系の染付磁器。224は碗1/2片で復元口径11.6cm、器高6cmを測る。外面草花文を呉須で描く。いわゆる広東碗といわれるもの。225は小皿の1/5片で復元口径13.2cm、器高

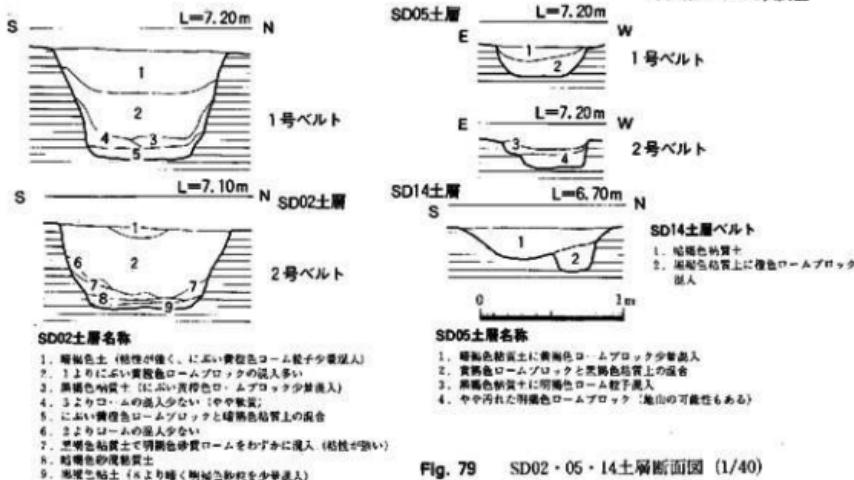


Fig. 79 SD02・05・14土層断面図 (1/40)

3.8cmを測る。内外両頬で文様を描き、外面は唐草か。

SD04

SD03の西側でSD03に並行する小溝。幅0.2~0.5m、深さ5~10cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。埋土から見て近世以降のもので、SD08~13などの窯の畠状造構やSD03と関連するものであろう。

出土遺物 (Fig. 80) 土師器・須恵器、白磁・青磁・染付磁器などの細片が少量出土している。

219は越州窯系青磁碗の底部1/2片。見込みと高台型付きに胎土目痕が残る。2次の焼成を受けている。この溝の時期を示す資料ではないが、特記すべきものとして図示した。

SD05 (Fig. 79, PL. 29)

SC01・02を切り主軸をN-40°-Eに取る小溝。確認長は11m、幅0.5~1m、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、下層は地山ロームブロックを多く含む。

出土遺物 (Fig. 80, PL. 37) 土師器・須恵器の破片が出土しているが量的には少ない。

226は須恵器壊身1/3片で復元口径は12cmを測る。外面色調子は暗青灰色で、胎土は粗砂を多く含み不良。227は土師器の壺1/10片で、口縁直下に帯状の粘土帯を一条貼付け肥厚させる。磨滅がひどいが、口縁部内面には指おさえ痕が残る。色調は明褐色で、胎土は粗砂を含み不良である。216は磨製石剣の茎片。全長5.2cm、刃部幅3.6cm、厚さ0.8cmを測る。全体に磨滅が著しい。明灰褐色を呈し、石質は安山岩質凝灰岩ホルンフェルスか。217は土製の筋縫車。一部を欠失するが、直径4.2cm、孔径0.9cm、厚さ2.3cmを測る。全体に磨滅がひどい。胎土は良好。いずれも上層出土。

3. 第142・143次調査

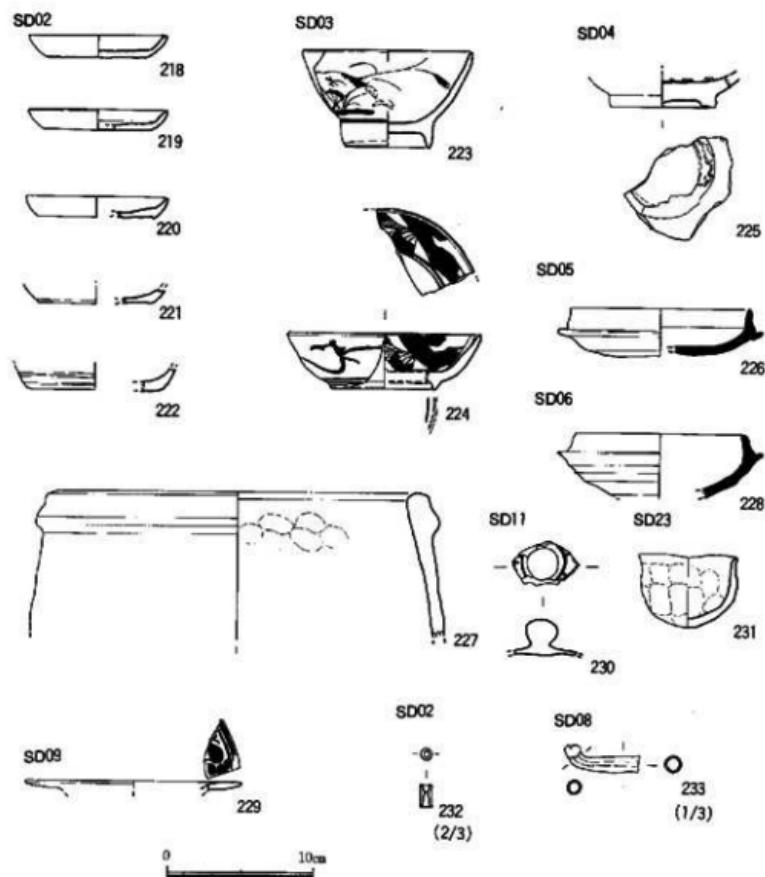


Fig. 80 各溝出土遺物 (1/4・1/3・2/3)

SD06 (Fig. 81, PL. 30)

調査区東側境界地で検出したSC06を切る溝。確認規模は5m以上、幅1.2m、深さ25~50cmで、溝断面は逆台形状を呈す。溝底は北東側にかけて深くなる。埋土は上半で暗褐色粘土、下半で黒褐色粘質土である。

出土遺物 (Fig. 80) 古墳時代の土師器・須恵器片が出土しているが、少量で図示出来るものは少ない。

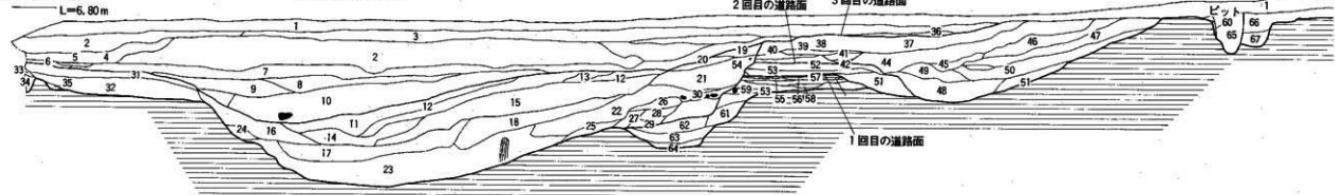
第143次調査区東壁土層図

1. 暗褐色粘土質土
 2. 明褐色ロームブロックに暗褐色土少量混入
 3. 黄褐色土
 4. 褐褐色土上に褐色粘土質土に、暗褐色ローム少量混入
 5. にふる・褐色色土に褐色ロームブロック少混入
 6. にふる・褐色色土に褐色ロームブロックをやや多く混入
 7. にふる・褐色色土に褐色色土少混入
 8. リリーフの跡(く、緑する)
 9. 細粒ローム土と褐色土少混入
 10. 売褐色土と褐色土少混入
 11. 売褐色土と褐色土(玄、緑)、砂質土少量混入
 12. 売褐色土(玄)も砂質
 13. 売褐色土
 14. 売褐色土(やや緑色あり)
 15. 売褐色ローム土と褐色ローム上の混合
 16. 売褐色粘土質土
 17. 売褐色土
 18. #リープ形跡地輪
 19. 売褐色土に砂質を多く混入
 20. 売褐色土(く緑する)
- 壁土:
21. 暗褐色粘土質土
 22. はで10cm程度の根を混入
 23. 黄褐色土と褐色土少混入
 24. にふる・褐色粘土質土で褐色ロームブロック少混入(表面で褐色が強い)
 25. 売褐色粘土質土で褐色ロームブロック少混入
 26. 売褐色粘土質土で褐色ロームブロック少混入(表面で褐色が強い)
 27. 売褐色粘土質土
 28. 売褐色シルト土
 29. 売褐色シルト土(玄、緑)、砂質土多く混入
 30. 売褐色粘土質土
 31. 売褐色土
 32. 売褐色土上に褐色ロームブロックをわずかに混入
 33. 売褐色土上に褐色ロームブロックを少混入
 34. 32/34 少量混入
 35. 売褐色土
 36. 売褐色土
 37. 売褐色土(緑を多く含む)
 38. 売褐色土
 39. 売褐色粘土質土
 40. 売褐色土(く緑する)

- 壁土:
41. 可塑性粘土質土に暗褐色ロームブロック混入
 42. 土砂
 43. 土砂層
 44. 売褐色粘土質土
 45. 売褐色土で褐色ロームブロックを少混入
 46. 売褐色粘土質土で褐色ロームブロック少混入(表面で褐色が強い)
 47. 売褐色粘土質土
 48. 売褐色ローム土に根を混入
 49. 47.2m、灰岩リーフ出で一混入
 50. 売褐色粘土質土で褐色ロームブロック少混入
 51. 47.2m地盤の特徴
 52. 売褐色土(土子が細かく、く緑する)
 53. 売褐色シルト土
 54. 売褐色シルト土(玄)
 55. 売褐色土
 56. 売褐色シルト土(緑を含む)
 57. 売褐色土
 58. 31/32 売褐色ロームブロックを混入
 59. 売褐色粘土質土に褐色ロームブロックを少混入

60. 黄色土
61. 黄色ロームブロックに47を混入
62. 土砂
63. 売褐色粘土質土
64. 黑褐色粘土質土
65. 黑褐色粘土質土に褐色ロームブロックやや多く混入
66. 65. (ロームの混入少し)
67. 売褐色ロームブロックと黒褐色粘土質土の混入

- SD30 壁土
68. 黄色土
 69. 黄色ロームブロックに47を混入
 70. 土砂
 71. 売褐色粘土質土
 72. 黑褐色粘土質土
 73. 黑褐色粘土質土(玄)
 74. 黑褐色粘土質土(緑)
 75. 黑褐色粘土質土(玄)
 76. 黑褐色粘土質土(緑)
 77. 黑褐色粘土質土(玄)
 78. 黑褐色粘土質土(緑)
 79. 黑褐色粘土質土(玄)
 80. 黑褐色粘土質土(緑)
 81. 黑褐色粘土質土(玄)
 82. 黑褐色粘土質土(緑)
 83. 黑褐色粘土質土(玄)
 84. 黑褐色粘土質土(緑)
 85. 黑褐色粘土質土(玄)
 86. 黑褐色粘土質土(緑)
 87. 黑褐色粘土質土(玄)
 88. 黑褐色粘土質土(緑)
 89. 黑褐色粘土質土(玄)
 90. 黑褐色粘土質土(緑)



第142次調査区北壁・東壁土層図

1. 暗褐色粘土質土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土質土
4. 暗褐色粘土質土
5. 暗褐色土に褐色粘土質土を混入
6. 暗褐色土
7. 暗褐色土
8. 41.5mを根入
9. 41.5mを根入の混合
10. 売褐色粘土質土に褐色ローム少混入
11. 売褐色土
12. 売褐色ロームを混入する
13. 売褐色土と褐色ローム、黃褐色土の混合
14. 売褐色粘土質土に褐色ロームブロック混入
15. 褐色ロームブロック
16. 売褐色土
17. 売褐色ロームブロックやや多く混入
18. 売褐色粘土質土に褐色ロームやや多く混入
19. 売褐色ロームの混入が多い
20. 売褐色ロームブロックと黒褐色粘土質土の混入

第143次調査区北壁土層図

1. にふる・褐色色砂土上
2. 売褐色土(緑)(木質)
3. 売褐色土
4. 1.4mで削る
5. 売褐色土で黒褐色粘土質土を混入
6. 黒褐色粘土質土
7. 黑褐色粘土質土に褐色ローム少混入
8. 売褐色粘土質土で明褐色ローム多量混入
9. までのもの混入が多い
10. 黑褐色粘土質土
11. 明褐色ロームブロック
12. 黑褐色土(10.2mやや緑)
13. 黑褐色土(10.2mやや緑)
14. 12.2mの根入が多い
15. 黑褐色粘土質土
16. 黑褐色粘土質土に褐色ローム少混入
17. 14.2mの褐色ロームブロックや少混入
18. 明褐色ロームブロック



Fig. 81 調査区土層断面図 (1/60)

228は須恵壺蓋1/4片で復元口径11.8cmを測る。Ⅲ b期のものである。

SD07 (PL. 30)

SD06に直交するが切られる溝。確認規模は約1m、深さは最大で15cm位で浅い。溝断面は浅い逆台形で、埋土は黒褐色粘土を主体とする。

出土遺物 古墳時代の土師器・須恵器の細片が少量出土しているが図示出来るものはない。

SD08～13出土遺物 (Fig. 80)

古墳時代から近世にかけての遺物が出土している。量的には少ないが土師器・須恵器・陶器・白磁・染付磁器・瓦などの小片が少量出土している。

229はSD09出土。染付磁器の皿の口縁部小片。復元口径14.9cmを測る。呉須で文様を描くが、漫繪に発色している。232は急須などの蓋のつまみ。軟質の焼きで、外面乳白色の化粧土をかけ、その上地に黒色又は褐色の彩絵を施し、透明の上釉を施釉している。233はSD08出土上の銅製の煙管彫首。長さ3.9cm、直径0.7～0.8cmを測る。錆がひどく青銅色を呈する。

SD14 (Fig. 79)

調査区北側、SD01北側で検出した北東方向に延びる浅い小溝。SD01・SD03・04に切られ消滅する。確認長13.3m、幅は0.5～1.5mを測る。溝断面は逆台形で、深さは10～40cmを測り、北側に向けて幅が広く深くなる。埋土は暗褐色粘土である。

出土遺物 図示出来る遺物はないが、須恵器や中世の土師器・瓦器・白磁・青磁の細片が少量出土している。

ピット出土遺物 (Fig. 60・82, PL. 38)

ピット埋土は大きく暗褐色、灰褐色、黒褐色の3種類に大別出来る。柱痕跡を持つものもあるが、建物としてまとめ切れなかった。全体に遺物の出土量は少なく、図化、図示出来るものも少ない。

234はSP11出土上の高台付壺2/3片で、復元口径15.8cm、脚径11.3cm、器高6.3cmを測る。調整はナデで、色調は橙色。胎土に細砂・雲母・赤色粒子を含む。235・236はSP20出土。236は須恵器の1/6片で復元口径12cmを測る。口縁部と天井部の境に一条沈線が巡る。ナデで天井部はヘラ削り。色調は灰白色で、焼成はやや軟質。236は土師器の壺か皿の底部片。口縁部を欠失するが復元口径は11cm弱、器高は約2cmを測る。磨滅がひどいが底部は糸切り。胎土は砂粒を多く混入。237はSP132出土。須恵器の壺身1/5片で、復元口径12.4cm、器高4cmを測る。底部は回転ヘラ削りで、体部にヘラ記号がある。238はSP137出土。土師器の壺口縁部1/8片で復元口径は18.4cmを測る。器壁は磨滅がひどく調整不明。色調は暗褐色で、胎土に砂粒を多く含む。239はSP140出土。滑石製の石鍋底部1/8片。内外面ノミ状工具による削り、外底に燃が厚く付着する。240は土師器の小片丸底壺1/6片。復元口径10.6cmを測る。器壁は磨滅がひどいが、内面に指おさえ痕が残る。外面色調は黄橙色で、胎土に砂粒を多く含む。241はSP168出土。上

3. 第142・143次調査

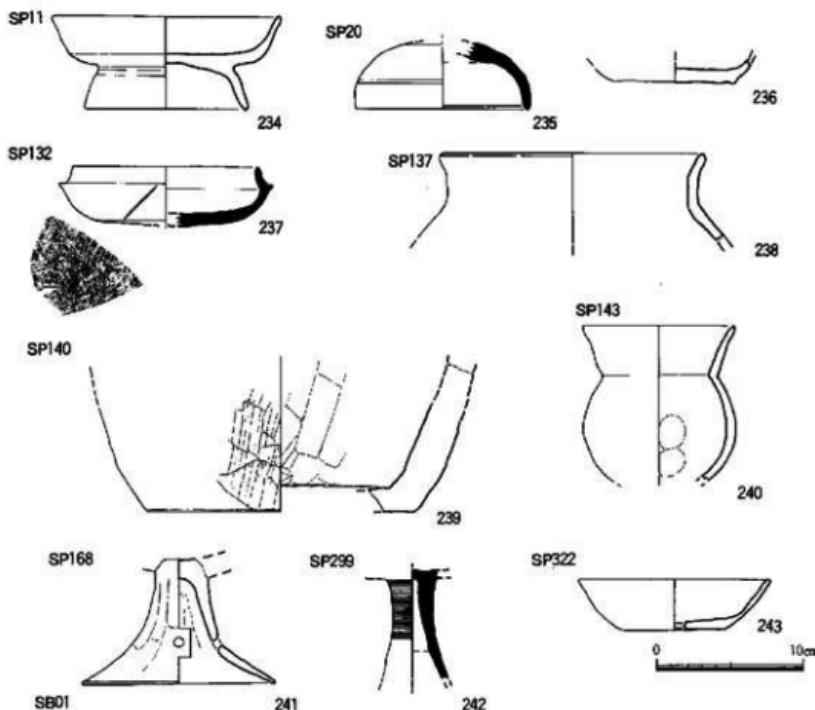


Fig. 82 ピット出土遺物 (1/4)

師器の高坏脚部1/3片で、復元脚径13.2cmを測る。外面ヘラ削りのちナデと刷毛。内面しづり痕が残る。直径7mmの1対の円孔がある。色調はにぶい橙色で胎土は精良。242はSP299出土。須恵器の高坏脚部片。脚外面はかき目で内面はしづり痕が残る。色調は赤褐色で、胎土は精良、243はSP322出土。土師器の坏1/3片で、復元口径13.2cm、器高3.5cmを測る。器壁は磨滅し調整は不明。色調は明橙色で、胎土は精良。100~102はSP120出土。滑石製の暗灰色を呈す円玉で、直径はいずれも4mm、厚さ2.5mm、2mm、2mmを測る。

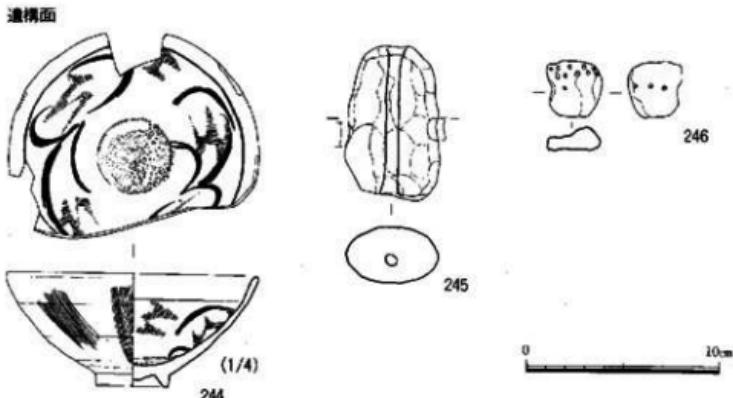


Fig. 83 造構面・表土出土遺物 (1/4・1/3)

その他の造構

SX01 (Fig. 80, PL. 32)

調査区北東隅で検出した溜池状造構、近世以降のもので、区画整理以前に埋め立てられたようだ。護岸用の杭などが残っていた。近世・近代の遺物を含んでいた。

造構面・表土出土遺物 (Fig. 83, PL. 38)

245は造構面出土。重機による表土除去中出土した。同安窯系青磁碗で、口縁部1/4を欠失する。外径17.4cm、底径5cm、器高7.7cmを測る。横横とヘラ切りの文様があり、見込みに重ね焼きの砂粒が多く付着する。246は出土地不明の扁平な土錘。最大長7.9cm、最大幅4.9cm、厚さ2.9cm、孔径0.6cm、重さ124gを測る。外面は磨滅がひどい。色調は黄白色で、胎土に砂粒を多く含む。247は造構面出土の不明上製品。一辺が2.8cm位の方形の破片。上面上方に竹櫛による斜め上方からの刺突と下面は中央部に3個の刺突がある。また右側は断面三角形状のこぶ状の高まりを持つ。明黄橙色で胎土は良い。

3) 小結

以上調査の概要について述べたがここでは各時代毎に遺構の整理を行い、若干の補足を加えてまとめとしたい。今回当調査区で確認した遺構の時期は弥生時代から江戸時代迄の時期である。

弥生時代の遺構はSC07・10、SK21を代表する事が来る。円形住居址を2棟確認している。いずれの住居址も時期を決める遺物がないが、SC07は中期初め頃と遺物から考えられるSK21を切っている事からそれ以降、SC02もほぼ同様の時期であろうか。本調査区周辺では弥生時代前期後半頃の貯蔵穴が各地点で検出されており、弥生時代前期後半代から中期にかけての集落が拡がっていた事が予想される。第34次・64次・86次調査区で確認されている弥生前期末から後期初め頃迄営まれた甕棺墓群との関係が考えられる。

古墳時代は前・中・後期の各時期の住居址が検出されている。前期はSC06・09・16など3棟、中期はSC03・04（この2棟は重複建替え）・13の3棟、後期はSC01・02・08・11・14・15の6棟である。前期の住居址は木丘陵尾根上各地点で検出されており、全域にまんべんなく集落が展開するようである。中期の住居址は第64調査区で2棟、第106次調査区で1棟、第125次調査区で1棟、本調査区で2棟などで5棟確認されている。住居址は集中する状況ではなく、各々25~30m程離れて散在している。この時期の住居址は前期の長方形プラン2本主柱、ベッド状遺構を持った住居形態から方形で4本主柱の住居形態に変化していくが、当遺跡群ではこの時期迄住居址はまだ確認されていない。第125次調査区の堀立柱建物SB02と04はこの時期の建物の可能性がある。

後期の住居址も本調査区周辺各調査区で検出されている。いずれも6世紀代Ⅲa~Ⅳ期の時期である。第35次調査区¹1棟、第64次調査区²6棟、第106次調査区2棟、第142・143次調査区6棟で、第125次調査区では検出されておらず、第53次・64次・106次調査区一帯のグループと、第142次・143次調査区一帯のグループの大きく2グループに分ける事が可能である。本調査区では6棟検出されているが、時期的にはⅢ期のもので、南側SC01・02と北側SC08・11・14・15の2グループに分かれ、重複関係から2棟分の建物と考える。SC01・02がⅢa~b期、SC08から15のグループがSC01よりも新しくⅢb~Ⅳa期迄の時期であろうか。これに伴う遺構としてSK22やSB03や04がある。

古代の遺構については確認出来ていないが、SD01埋土中から越州窑青磁や瓦などが多くなりの量で検出されているので、既に削平消滅したかもしれないが、周辺に該期の遺構が存在した可能性がある。

中世の時期はSD01・02及び土坑群が主体となる。SD02は01より古く、出土土師器の口徑・底径・器高等の法量が田村遺跡第10次地点のSX51・SX31・SE01・SK68出土土師器の法量に近く、外底部糸切りの手法などと合わせて年代は13世紀前半位に求められようか。

土坑SK05～08・10・14・16・17も中世の時期である。造構の性格としては明確ではないが、SK10の底面から骨片が出土している事から墳墓の可能性が強い。いずれも副葬品などではなく、墳墓の配列にも規格性がない。時期的にはSK07や17出土の古唐津・瀬戸天目片などから16世紀後半から17世紀前半が考えられるが、SD01との明確な切り合い関係が把握できず、SD01掘開後にプランを確認したので、SD01より墳墓群は古い可能性がある。

SD01は幅10m近い大溝である。埋上からの遺物は弥生土器からの遺物を多量に含むが、主体としては中世後半の15、16世紀の時期となる。ただ上層から近世の玩具である泥面子などが出土したり、上層の埋土が近世の土に近い事から、上層部については近世に埋没したと考える。この大溝の下層は砂礫や青灰色の粘土を含まず、空隙であると考える。有田遺跡群ではこれと同様の大溝が有田遺跡群の中心部の第55次・133次・95次調査区などで確認されており、時期的には同時期のものである。早良平野は戦国時代大内・大友など有力大名の筑前博多支配を巡る抗争で、16世紀代は大内・大友・龍造寺と支配者が変わる。大内氏の早良郡代である大村興景が小田部の中間に地行地を持ったとされる。当地には中園という小字名が残る。また小田部文書によれば庄崎氏は15世紀の嘉吉元年(1441)と同三年に小武教頼から「小田部地頭職」を安堵されている。庄崎氏は早良郡を中心に那珂郡、怡土郡の一部にまで勢力を有した豪族で、大内氏の筑前国支配下にあっては、早良郡代の下でかなりの重要な役割をはたしていたと考えられる。その本拠地については不明であるが、小田部から有田にかけてが有力な候補地として考えられている。有田には「治部殿屋敷」があったとされ、庄崎氏の居屋敷とも考えられるとしている。有田地区で確認されている方形の空堀を連続して巡らした曲輪群はこの庄崎氏の居敷地に推定される可能性がある。ただ大規模に展開する曲輪群は居敷地の範囲を越えるものであり、大内・大友の支配下の中で、大友氏の被官である小田部氏が地形的特性から糸島に本拠を持つ大内・大友に対立する勢力の原田氏を意識した城郭の築き方をした可能性が強い。現在小田部城として推定されている範囲は有田台地の南端部分であるが、むしろ台地の中心高所部が小田部城の中心であり、西側は南北に貫流する室見川と、東側は金屑川、北側は海岸砂丘背後のラグーン状の湿地という忠まれた自然地形を利用した台地全体が城域と考えうる。そしてSD01は城の防御ラインとしての丘陵を掘り切った堀切りの可能性があると考える。有田台地は八手状に分岐する低丘陵であるが、同様の堀切りがまだ調査では確認されていないが、各尾根筋で発見される可能性がある。小田部城についてはまだ不明な点も多く、今後の周辺の調査に期待したい。

註

- 註1 「有田・小田部第9集」市報第173集 1988
- 註2 昭和60年度調査、現在整理中
- 註3 「有田・小田部第18集」市報第340集 1993
- 註4 「有田・小田部第8集」市報第155集 1987
- 註5 「田村遺跡-V-」市報第192集 1988
- 註6 吉良国光「小田部氏関係史料」福岡市博物館研究紀要創刊号 1991

3. 第142・143次調査

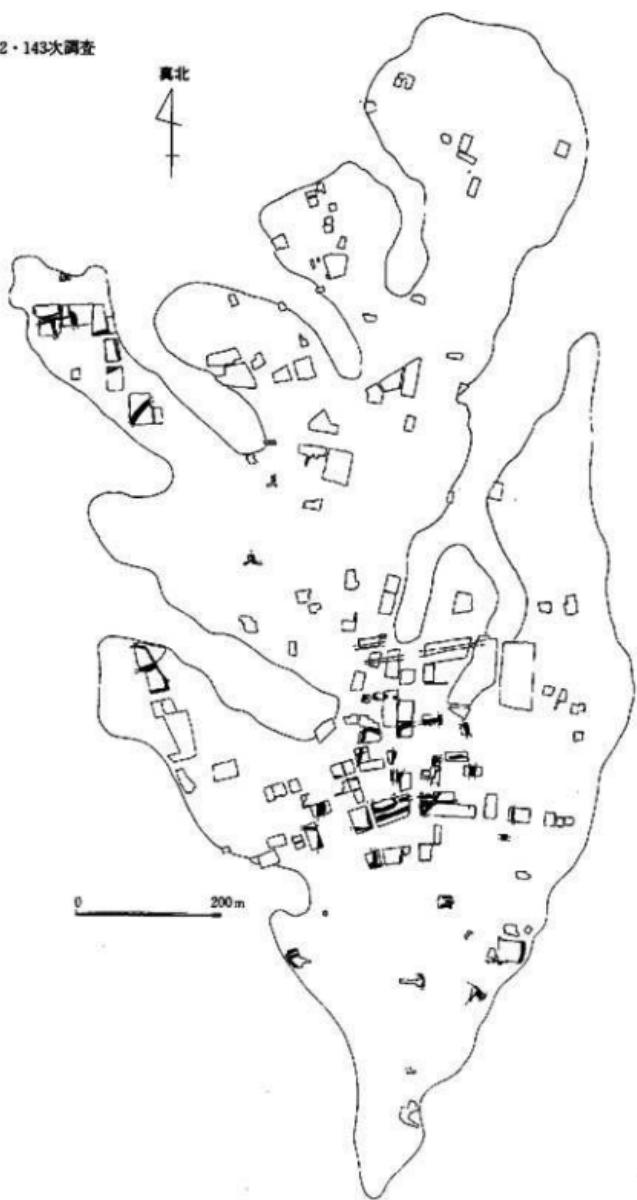


Fig. 84 戰国期の堀状遺構配置図 (1/8,000)

図 版



第142・143次調査作業風景



有田遺跡群周辺航空写真（1961年撮影）



有田遺跡群周辺航空写真（1972年撮影）



(1) 第136次調査区全景（北から）



(2) SD01・06（北西から）



(1) 調査区東側（北西から）



(2) SD06（東から）



(1) SD01東壁土層（西から）



(2) SD01中央土層（東から）



(3) SD01南ベルト土層（北から）



(4) SD06土層（北から）



(1) SC01 (東から)



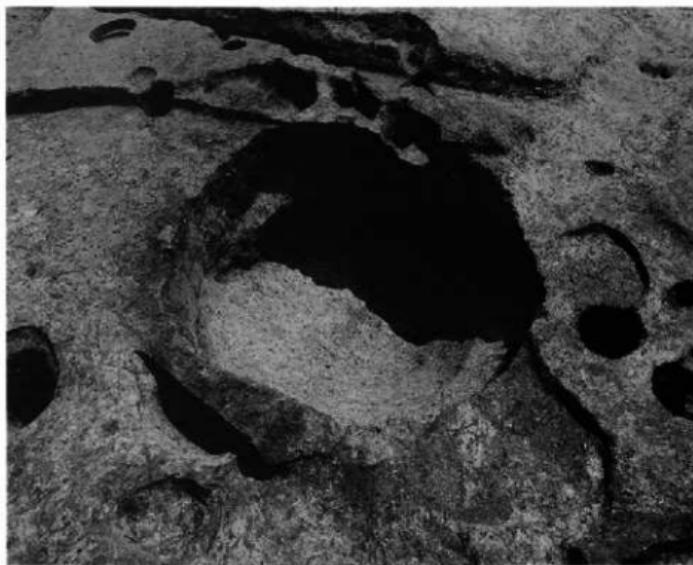
(2) SC01遺物出土状況



(1) SC02 (東から)



(2) SC03 (南から)



(1) SK06 (西から)



(2) SX01防空壕 (北から)



(1) SK01 (西から)



(2) SK01土層 (東から)



(3) SD02 (北から)



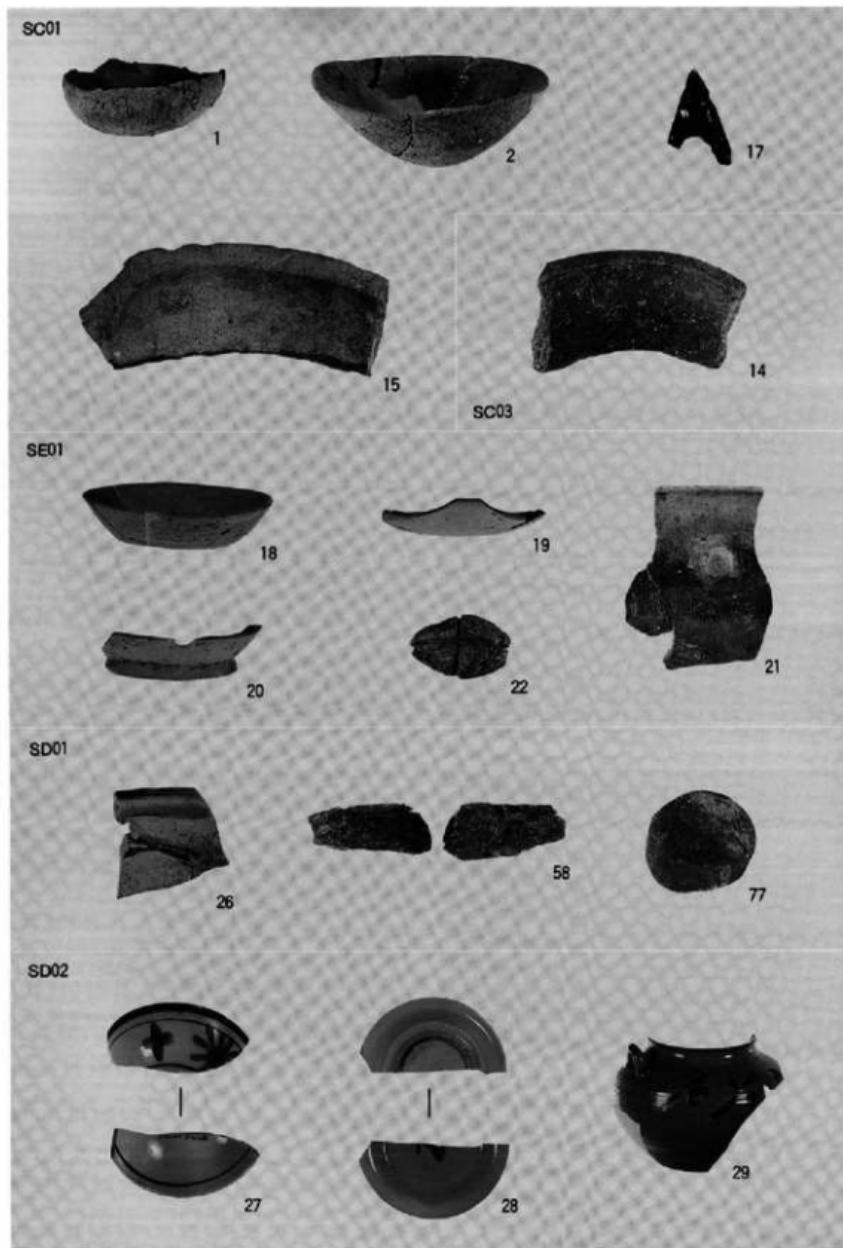
(4) SP05・06 (北から)

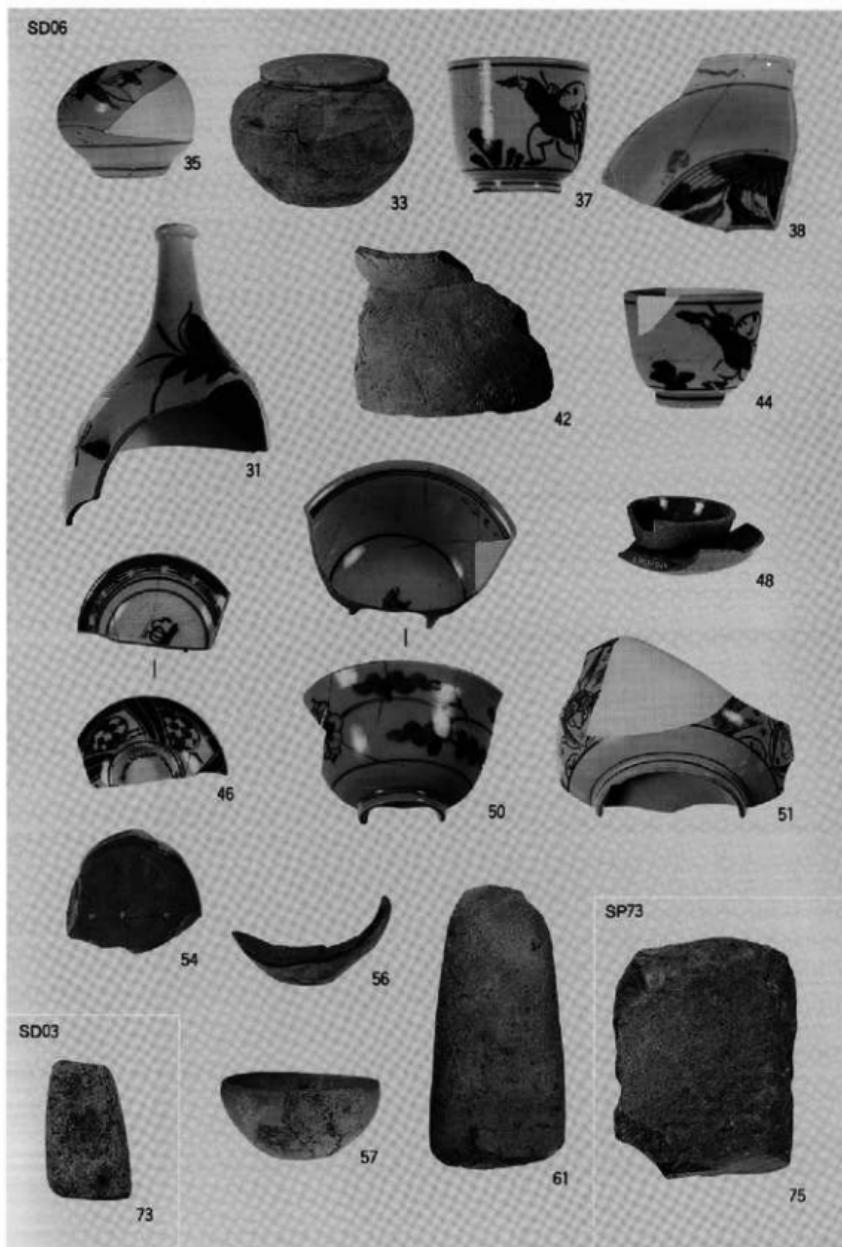


(5) 1号トレンチ (東から)



(6) 2号トレンチ (南東から)







(1) 第141次調査区全景（南から）



(2) 同全景（西から）



(1) SC01・05 (西から)



(2) SC01・05 (南から)



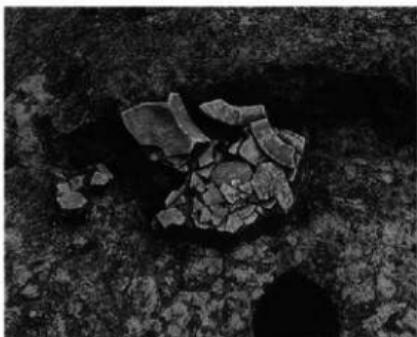
(1) SC02 (南から)



(2) SC02完掘状況 (南から)



(1) SC02遺物出土状況 1



(2) 同出土状況 2



(3) 同出土状況 3



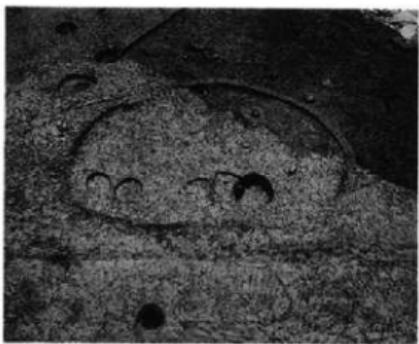
(4) SC03（西から）



(5) SC04（南から）



(6) 同遺物出土状況（西から）



(1) SK01 (北西から)



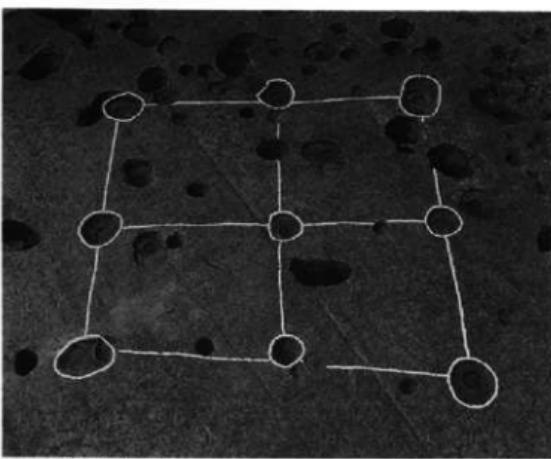
(2) SK02 (西から)



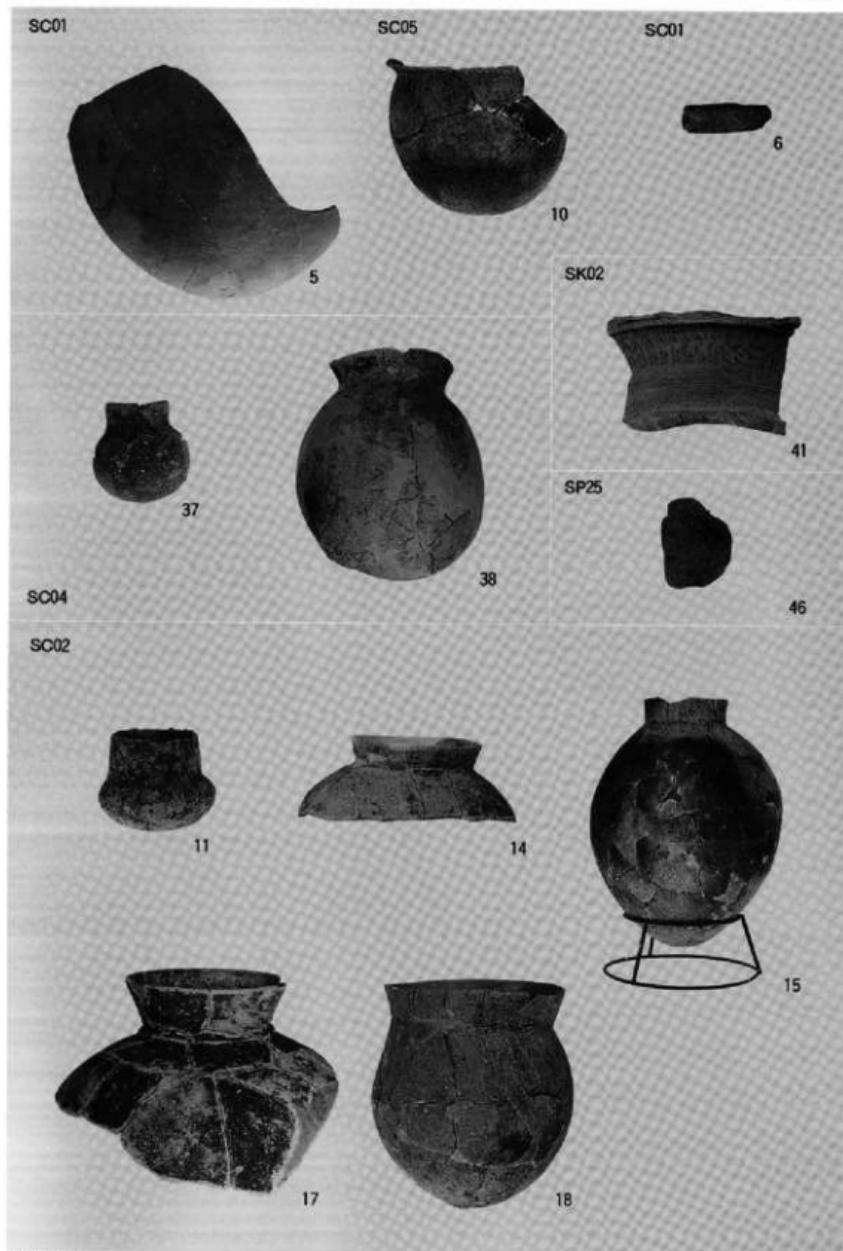
(3) SK03 (西から)

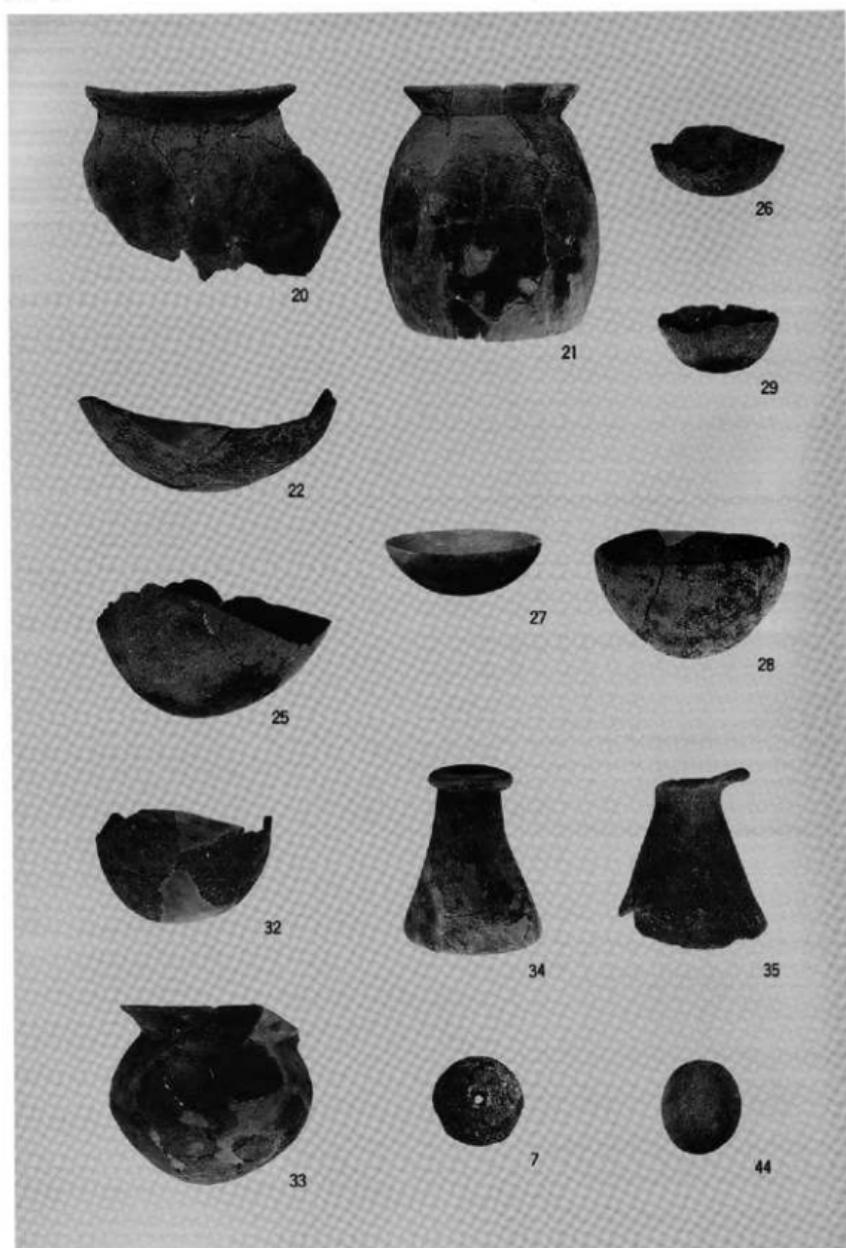


(4) SK02遺物出土状況



(5) SB01 (南西から)







(1) 第142・143次調査区全景（北西から）



(2) 第142次調査区全景（北から）



(1) 第143次調査区全景（西から）



(2) SD01 (西から)



(1) SC01 (北東から)



(2) SC01・02 (北東から)



(1) SC01・02竪検出状況（東から）



(2) SC03・04（北西から）



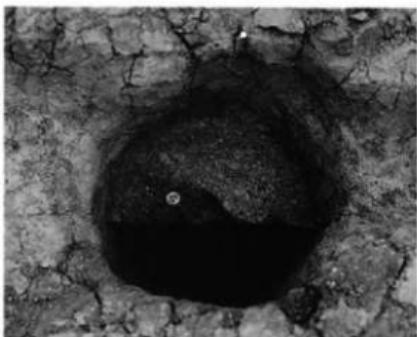
(1) SC07 (西から)



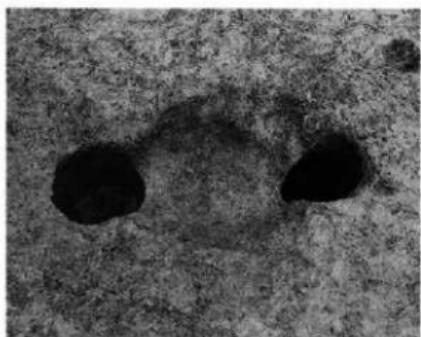
(2) SC10 (北から)



(1) SC06 (北西から)



(2) SC04内 (SP181) 遺物出土状況



(3) SC10中央土坑 (南から)



(4) SC13 (南から)



(5) 同遺物出土状況 (西から)



(1) SC09 (西から)



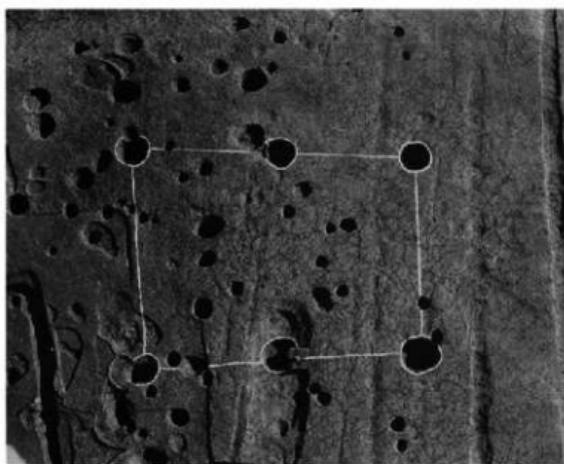
(2) SC16 (南西から)



(1) SC08・11・14・15 (北東から)



(2) SC11・15 (南東から)



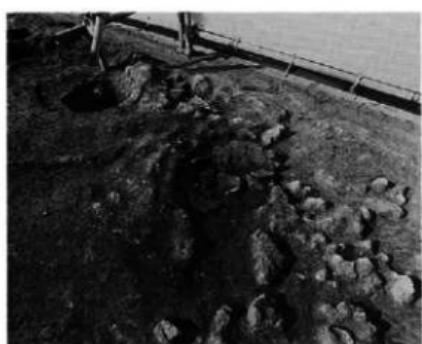
(1) SB04 (北東から)



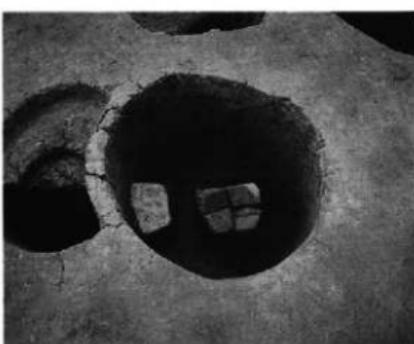
(2) SC08発検出状況 (南東から)



(3) SC11発支脚 (南東から)



(4) SC11・15発検出状況 (南東から)



(5) SP290根石検出状況



(1) SD01 (北東から)



(2) SD02 (北西から)



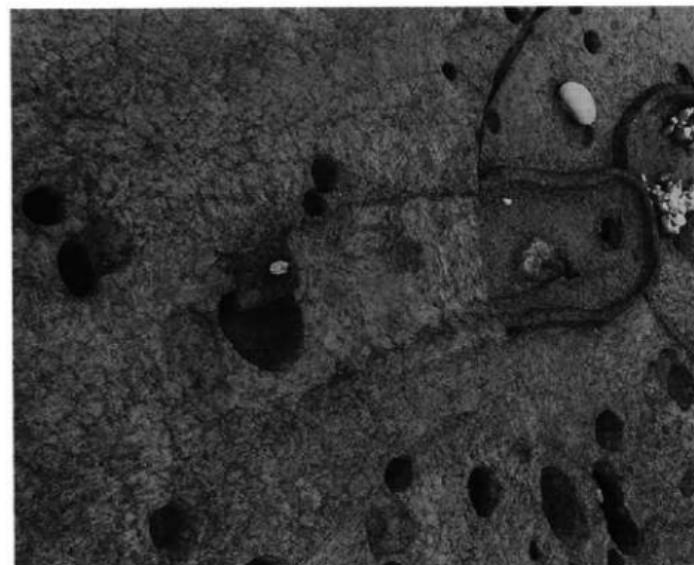
(1) SD03 (北西から)



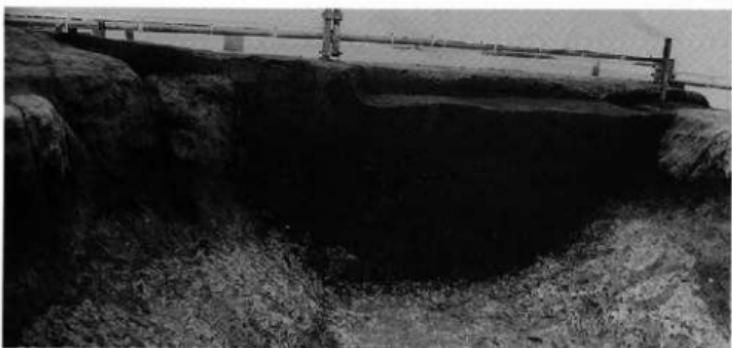
(2) SD05 (北東から)



(1) SD06・07 (南西から)



(2) SK15 (南東から)



(1) SD01南壁土層（北東から）



(2) SD01 2号ベルト土層（南西から）



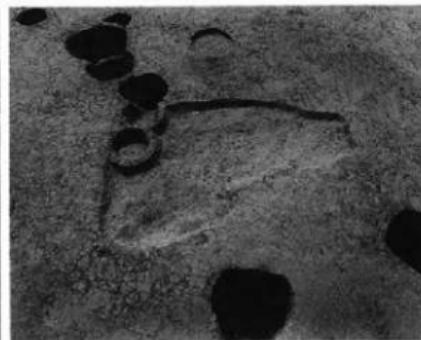
(3) SD01 1号ベルト（南から）



(1) 調査区東壁土層（西から）



(2) SD06土層（南西から）



(3) SK01（北から）



(4) SK05（北から）



(5) SK06（東から）



(1) SK07 (北から)



(2) SK08 (北から)



(3) SK10 (南東から)



(4) SK11 (東から)



(5) SK12 (南から)



(6) SK14 (北西から)



(1) SK16 (南西から)



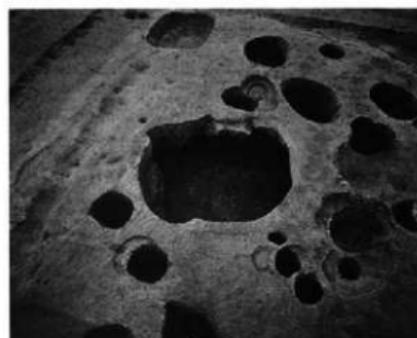
(2) SK17 (北西から)



(3) SK19 (西から)



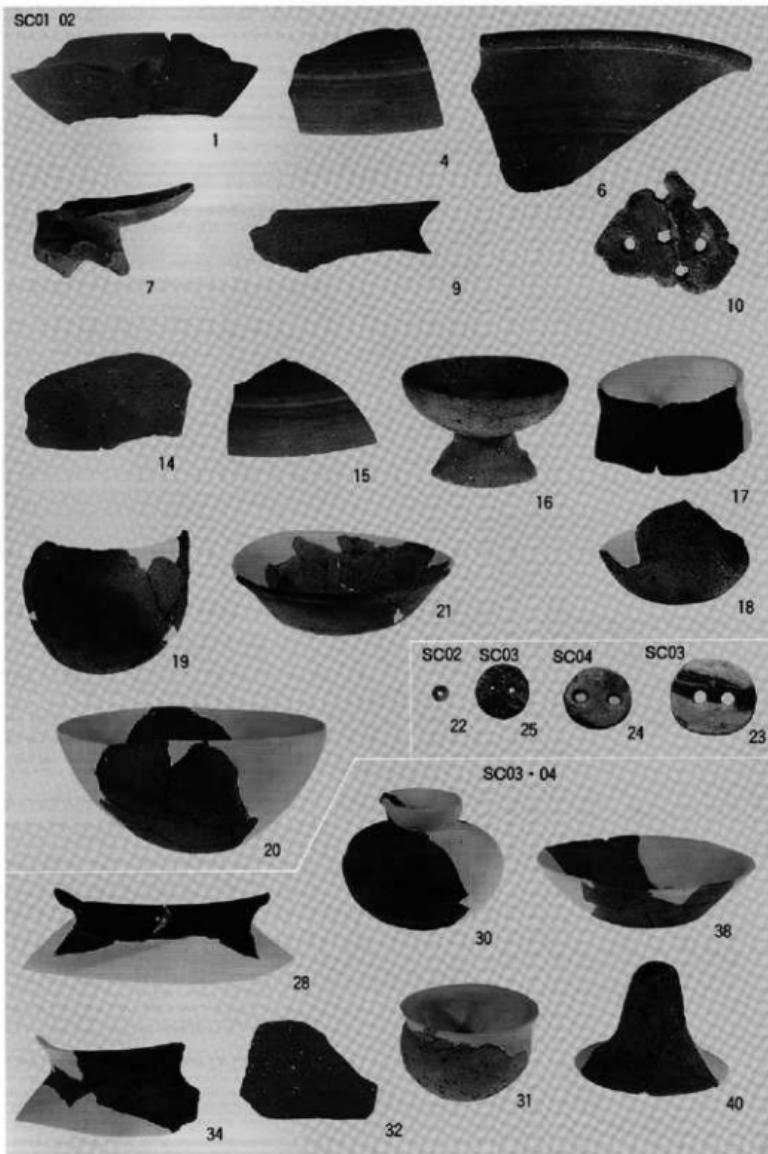
(4) SK20 (東から)

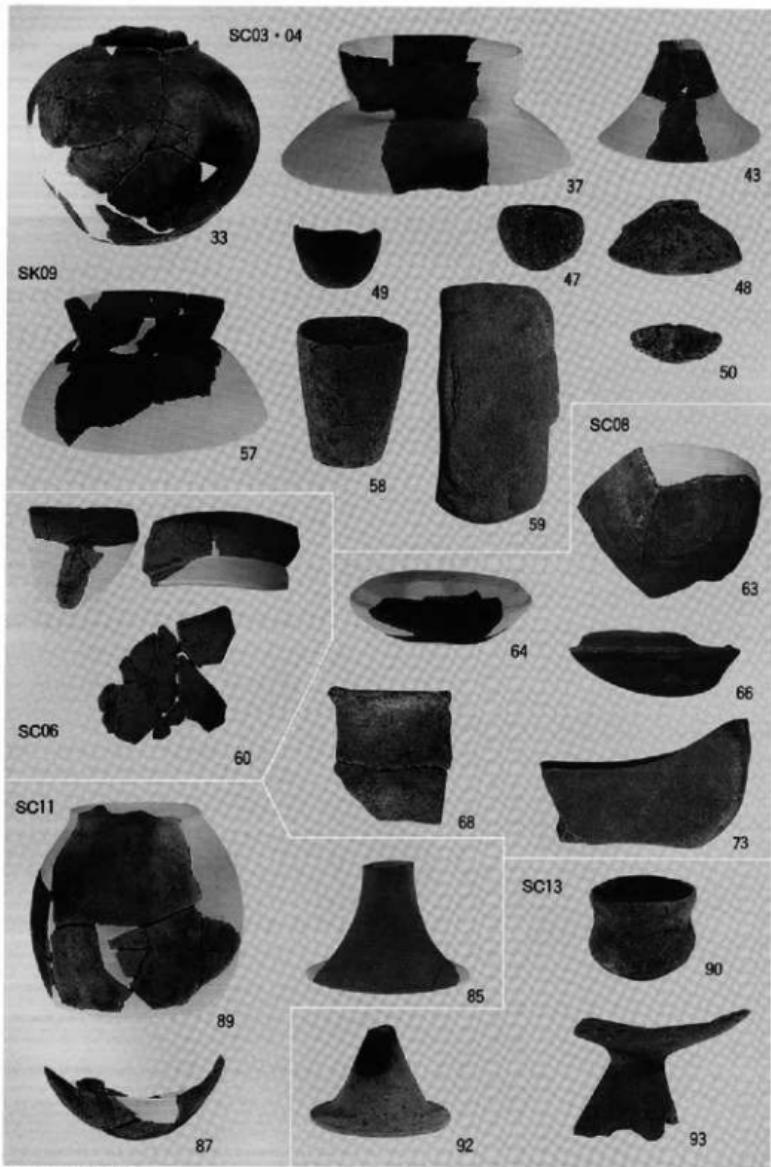


(5) SK21 (南西から)

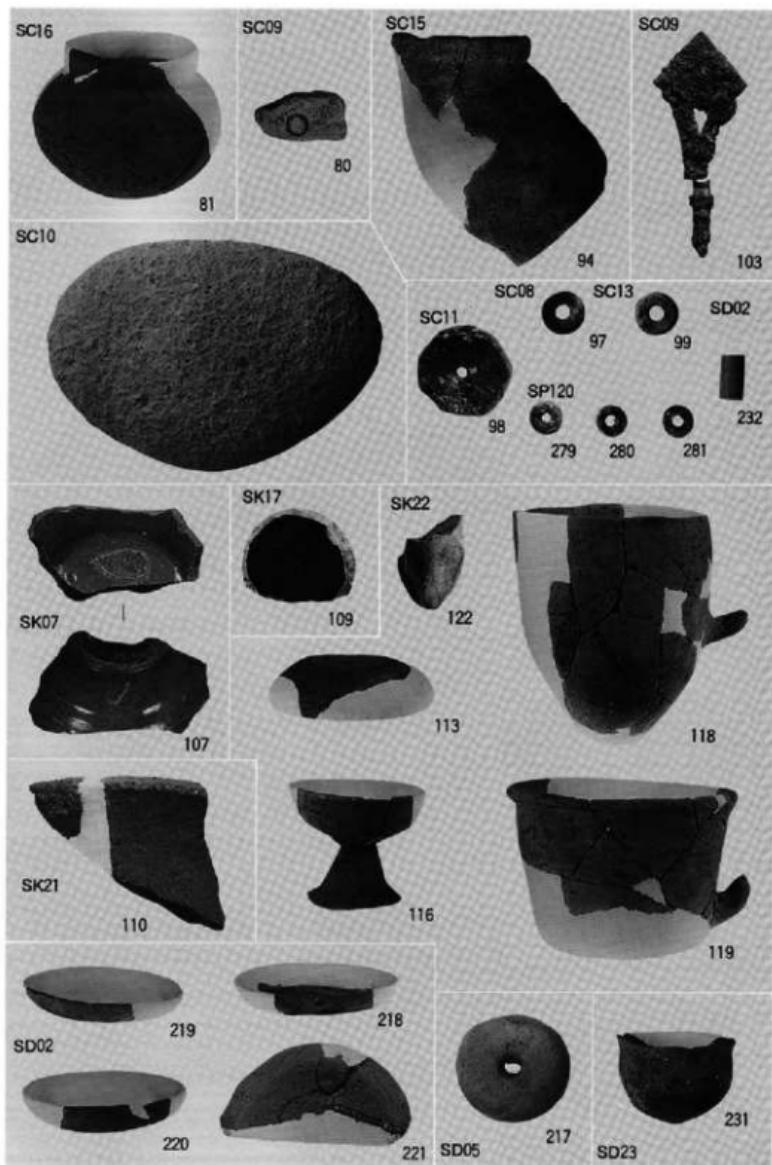


(6) SK22 (南西から)

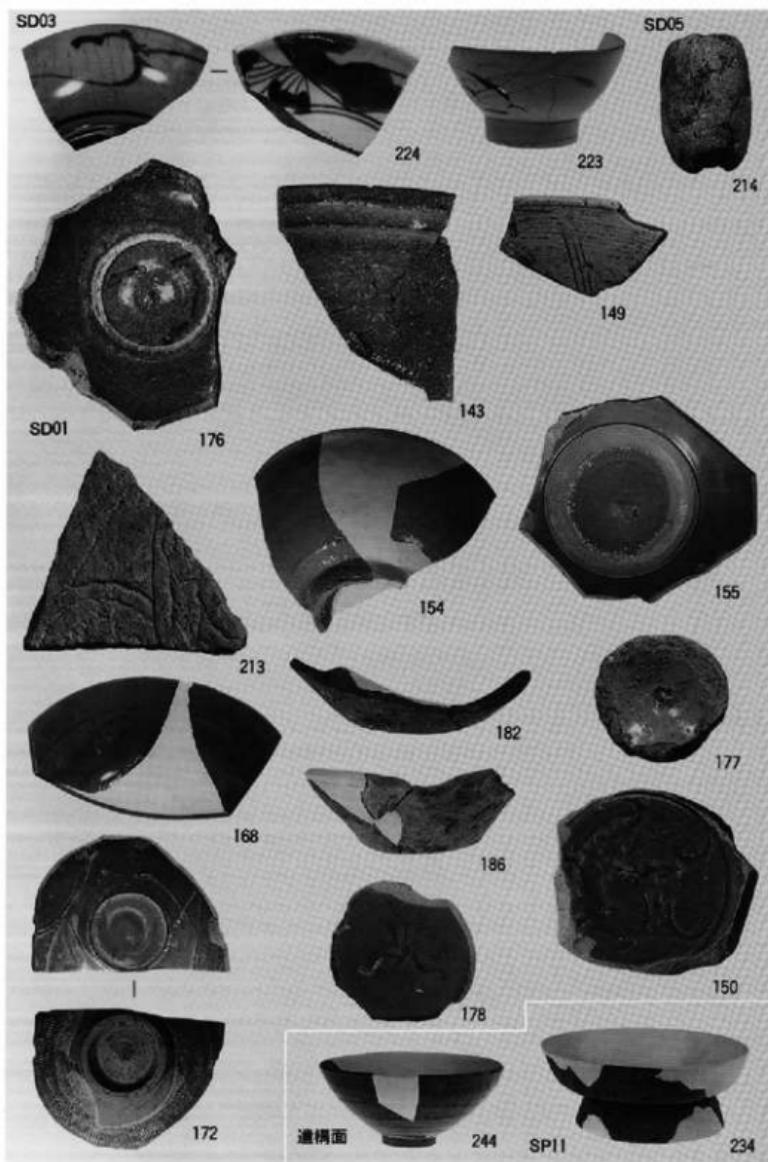




各住居址出土遺物 2



各住居址・溝出土遺物



溝・ピット・造構面出土遺物

有田・小田部 第20集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第378集

1994年（平成6年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区大神1丁目8の1

印 刷 博巧印刷株式会社

